

# 『タットヴァサングラハ』「自律的真理論検討」章の研究 (1) — 〈真〉としての本性的な能力—

石村 克

## 0 はじめに

本研究は、仏教中観学派のシャーンタラクシタ (Śāntarakṣita: ca. 725–788 CE) の『タットヴァサングラハ』(Tattvasaṃgraha) 第25章「自律的真理論検討」(svataḥprāmāṇyaparīkṣā)、及び、それに対するカマラシーラ (Kamalaśīla: ca. 740–795 CE) による注釈書『タットヴァサングラハパンジカー』(Tattvasaṃgrahapañjikā) の内容を解明することを目的とする。この章は、第2810詩節から3112詩節までの303詩節から構成されている。そのうち、本稿では第2810詩節から第2845詩節までの和訳を提示する。

**『タットヴァサングラハ』における本章の位置づけ** 『タットヴァサングラハ』の最後の3章、すなわち第24章「言葉の検討」(śrutiparīkṣā)、第25章「自律的真理論検討」、第26章「超感覚的対象を見る者検討」(atīndriyārthadarśiparīkṣā) は、「〈ダルマ〉の情報源がヴェーダ聖典ではなく仏説である」ということの証明を試みたものである。ミーマーンサー学派が〈ダルマ〉の情報源としてのヴェーダ聖典を擁護するために立てた理論のうち、第24章では〈ヴェーダ聖典非人為性論〉(apauruṣeyatva) を、本研究で扱う第25章では〈自律的真理論〉(svataḥprāmāṇya) をそれぞれ否定し、第26章では、ゴータマ・ブツダの全知者性 (sarvajñatva) を証明することで、仏説を〈ダルマ〉の情報源として確立する、という構成になっている。

**インド哲学における〈真〉の概念** インド哲学では、〈認知主体〉(pramātṛ)・〈認知対象〉(prameya)・〈認知手段〉(pramāṇa)・〈認知〉(pramā, pramiti) という四つの概念を用いて存在論・認識論が論じられる。これらの概念は、基本的に古典インド文法学における〈行為実現者〉(kāraṇa) の理論 (kāraṇa theory) に基づくものである。この理論では、動詞語根 (dhātu) の意味である〈行為〉、及び、それを成立させる六種類の〈行為実現者〉によって意味論が論じられる。インド哲学認識論では、〈認知〉(pramā) という行為における三つの行為実現者、行為主体 (kartṛ)・行為対象 (karman)・行為手段 (karaṇa) として、〈認知主体〉・〈認知対象〉・〈認知手段〉が設定される。もともと、存在論・認識論では、〈認知〉という概念が、〈行為〉そのものではなく、〈認知手段〉の結果 (pramāṇaphala) として規定されているという点で若干の相違がある。これらのうち、〈認知手段〉の特性 (bhāva) である〈認知手段性〉(prāmāṇya) が、現代のインド哲学研究者の間では、「真」(truth) や「妥当性」(validity) と解釈され、(1) 〈認知手段性〉(〈認知手段〉の定義)、及び、(2) 〈認知手段性〉の由来・認識根拠に関する議論が「真理論」(theory of truth) として扱われている。〈認知手段〉は、古典インド文法学の〈行為手段〉の定義に基づいて、「〈認知〉の〈最も優れた実現者〉」と定義される。その属性が〈真〉である。

**ヴェーダ擁護論としての真理論** ミーマーンサー学派によれば、ヴェーダ聖典は、作者が存在せず、始まりのない過去から途切れることなく伝承され続けている文章である。また、それは、それ以外の〈認知手段〉によっては人間が知ることのできない〈ダルマ〉について語っている。法典 (dharmaśāstra) の作者も〈ダルマ〉について語ってはいるが、それはヴェーダ聖典が既に示した内容を分かりやすく纏めたに過ぎない。法典は、あくまで〈ダルマ〉の二次的情報源としての有用性しか持たないものである。そのため、ヴェーダ聖典は人間から良い影響も悪い影響も一切受

けず、法典を除く他の〈認知手段〉との整合性 (saṃvāda) を持たず、〈ダルマ〉の唯一無二の一次的情報源となる。結果として、それは〈欠陥存在不能性〉・〈反証不能性〉・〈新規情報供与性〉によって特徴付けられる。これらの特徴によって、ミーマーンサー学派は、全ての〈認知手段〉の特性である〈真〉を規定しようと試みている。この学派は主張する。「作者由来の〈美質〉の存在ではなく、作者由来の〈欠陥〉の非存在が〈真〉の存在の条件であり、他の〈認知手段〉による積極的な証明ではなく、他の〈認知手段〉による反証の無が〈真〉の確立の条件であり、新規情報を持って初めて〈認知手段〉は真になる」と。

**ウバヴァルシャの真理論** ウバヴァルシャ (Upavaṣa: ca. 480–540 CE)<sup>1</sup> は、『ミーマーンサーストラ』第1巻第1章第3定句から第5定句までに対する『ヴリッティ』で、ヴェーダ聖典を除く知覚 (pratyakṣa) を始めとする〈認知手段〉を論じる認識論 (epistemology)、〈ダルマ〉の〈認知手段〉としてのヴェーダ聖典の擁護論 (apologetics) とそれを支える言語論 (linguistics) を展開している。

(I) 彼は、その認識論において、「〈認知手段〉は広く知られているから検討する必要はない」ということを証明するために、ヴェーダ聖典と無関連な世俗の領域に関する根源的〈認知手段〉である知覚 (pratyakṣa) の〈真〉について議論する。その中で、擬似的知覚 (mithyāpratyaya 「錯誤知」と正しい知覚 (satpratyakṣa) を見分けるための方法論を論じ、(A) 「これはこのようではない」という反証知 (bādhakajñāna 「押し退ける認識」) が生じるかどうかを主要な方法として、(B) 知覚の原因が欠陥によって損傷されているかいないか (duṣṭāduṣṭa) を、反証知が生じない場合の二次的な方法として位置付けた。

さらにまた、(II) ヴェーダ聖典の擁護論において、「ヴェーダ聖典を通じて (1) 〈ダルマ〉の認識が実際に生じ、(2) その認識は疑惑的な形で生じることもなければ、(3) 知覚によって反証されることがないにもかかわらず、それが錯誤的であると言うことはできない」というように、ヴェーダ聖典の〈偽〉を訴える不合理性について指摘した。

**クマーリラの真理論** クマーリラ (Kumārila: ca. 600–650 CE) は、上記のウバヴァルシャの (I) 擬似知覚を見分ける方法論と (II) ヴェーダ聖典擁護論を一般化し、精緻化し、統合することで、自律的真理論という理論を構築した。

クマーリラは、(I) 擬似知覚を見分ける方法論を認識一般にまで拡張した。彼によれば、知覚だけでなく、全ての認識について、〈偽〉はその認識の原因の欠陥によって生じ、一方、〈真〉はその認識にとって本性的なものであり、その原因の美質によって生じるものではない。そして、(A) 反証知と (B) 原因の欠陥の認識の二つのみが〈偽〉の〈認知手段〉であり、それ以外のものによって〈偽〉を証明することはできない。また、作者・言葉・認識という三層構造を有する〈証言〉にこの理論を適用する際に、作者の欠陥が言葉に転移し、それが認識の〈偽〉を生み出すという〈言葉に基づく認識の虚偽化の構造〉を明確化した。

さらに、(II) ヴェーダ聖典擁護論において示されたヴェーダ聖典が満たす三つの特徴、(1) 〈認識を生じさせる〉、(2) 〈確定知を生じさせる〉、(3) 〈反証されない〉に (4) 〈新規情報供与性〉を加えて、〈認知手段〉の定義とした。この理論によれば、〈認知手段〉は、その〈真〉の検証とは完全に無関係に、その本性的な能力に基づいて対象を理解させるために働くことで、それ自体で〈認知手段〉として成立している。一方で、〈非認知手段〉の一種である錯誤知も、〈認知手段〉と同様に、対象を理解させるためにそれ自体で働くが、その後反証が生じるという点において

<sup>1</sup> 『ミーマーンサーストラ』第1巻第1章第3定句から第5定句までに対する『ヴリッティ』が、シャバラ (Śabara: ca. 500–560 CE) によって『パーシャ』の中で紹介されている。この『ヴリッティ』の作者が誰かについて学者たちの間で議論がなされてきた。その詳細は、片岡 [2011: 62–71] に纏められている。そして、それらの議論を総合すれば、この『ヴリッティ』の作者がウバヴァルシャであると結論するのが妥当であるとされている。本稿でも、この結論を前提として記述を進める。

のみ〈認知手段〉から差別化される。その結果として、全ての認識について、人間は〈真〉を顧みることなく前提として自動的に行動を起こすことで日常生活を営み、〈偽〉の根拠が想定される特殊なケースにのみ、真偽を問題にする。

クマーリラは、この自律的真理論を「全ての認識について、〈真〉は自律的であり、〈偽〉は他律的である」というように定式化した。この理論の元で、〈欠陥存在不能性〉・〈反証不能性〉・〈新規情報供与性〉という三つの特徴を持つヴェーダ聖典は、日常生活から乖離した不自然な懷疑主義者を除いて、永遠に〈偽〉の根拠が想定されることなくその〈真〉が前提にされたまま、光のように万人にとって共通なものとして君臨することになる<sup>2</sup>。

**仏教論理学派の真理論** 仏教論理学派のダルマキールティ (Dharmakīrti: ca. 600–660 CE) は、欺かない認識 (avisamvādiñāna)、未知なる対象を理解させるもの (ajñātārthaprakāśa) を〈認知手段〉として規定し、〈真〉は活動 (vyavahāra) によって理解されると主張した。また、アポーハ論を論じる際に、錯誤知によって付託された形象を確定知が排除するという確定のプロセスを明らかにした。

デーヴェンドラブッディ (Devendrabuddhi: ca. 630–690 CE) は、クマーリラの自律的真理論に対抗する形で、ダルマキールティの〈認知手段〉についての言明に基づいて、仏教論理学派の真理論を構築した。彼は、真理論における認識論的側面と存在論的側面をはっきりと区別し、前者が真理論のテーマであると考えた。そして、クマーリラが全ての認識について〈真〉の自律性を規定したのとは違って、「知覚の〈真〉は他律的であり、推理の〈真〉は自律的である」というように知覚と推理で場合分けをした。この定式は、知覚の〈真〉は目的実現の認識 (arthakriyājñāna) に依存して理解されるのに対し、推理の〈真〉はそれに依存せずとも理解されるということを意味する。

さらに、シャーキヤブッディ (Śākyabuddhi: ca. 660–720 CE) は、ダルマキールティの確定知論を真理論に導入することで、デーヴェンドラブッディがクマーリラの真理論と同じ土俵に上げた仏教論理学派の真理論をより精緻な理論へと発展させた。彼は、ダルマキールティによる確定知 (= 推理 + 知覚判断) と錯誤知 (= 錯誤知 + 疑惑知) の区別に基づいて、確定知 (= 推理)、及び、確定知 (= 知覚判断) が後続する認識 (= 反復を伴う知覚) の〈真〉は自律的であり、疑惑知が後続する知覚 (= 最初の知覚) の〈真〉は他律的であると解釈した<sup>3</sup>。

**シャーンタラクシタとカマラシーラ** 仏教後期中観派のシャーンタラクシタは、シャーキヤブッディが発展させた仏教論理学派の真理論を受け継ぎ、それを武器に、『タットヴァサングラハ』において、真理論に関するクマーリラの言明を『ブリハッティーカー』から引用した上で、それらに対して細部に渡って批判を繰り広げた。その弟子カマラシーラは、仏教論理学派のダルモッタラ (Dharmottara: ca. 740–800 CE) とミーマーンサー学派のウンベーカー (Umbeka, Umveka: 730–790 CE) の思想も視野において、真理論の整備を行なっている。

<sup>2</sup>クマーリラの自律的真理論については、片岡 [2002] などを参照。

<sup>3</sup>仏教論理学の真理論、特にデーヴェンドラとシャーキヤブッディのそれについては、稲見 [1993] を参照。ダルマキールティの確定知論とシャーキヤブッディの真理論の関係については、中須賀 [2015: 81] の表を以下に挙げておく。

ダルマキールティ		シャーキヤブッディ	
確定する知	(1) 推理 (2) 知覚判断	自律的真	(1) 推理 (2-1) 反復を有する直接知覚 (2-2) 目的実現の知
付託する知	(3) 錯誤知	他律的真	(3) 初めての直接知覚

**能力の自律性** 本稿で扱う『タットヴァサングラハ』第2810詩節から第2845詩節では、クマーリラの自律的真理論における能力の自律性がテーマとされている。大まかな議論の流れは以下の通りである。

クマーリラは、〈真〉を〈認知手段〉の能力に同定し、「能力は本性的 (svābhāvika) であって作られたものではない」という当時の思想を援用して、〈真〉の自律性を証明しようと試みる。また、〈真〉に依存性がある場合に帰結する無限連鎖 (anavasthā) の問題を強調して、非依存性 (anapekṣatva) のみが〈真〉の根拠であると主張する。

それに対して、シャーンタラクシタは、「本性的」という語でクマーリラが意図している内容として、(A)「常住・無原因である」、(B)「能力保持者と同時に生じる」という二つの選択肢を想定しながら、批判を行う。(A)の場合には、クマーリラは事実無根の主張をしていることになり、(B)の場合には、仏教学派にとっても自明な当たり前のことを主張していることになる。

また、(B)の場合、クマーリラの「能力は本性的である」という主張は一応は正しいとしても、その主張と「非依存性のみが〈真〉の根拠である」という言明の間には関連性がない。前者は〈真〉の存在論的な主張であるのに対し、後者は〈真〉の認識論的な主張である。存在論的に自律的であるからといって、認識論的に自律的であることにはならない。すなわち、〈真〉は〈認知手段〉と同じ原因から同時に生じるが、〈認知手段〉と見かけが同じ無分別の錯誤知 (keśapāsādiraśana) の可能性があるせいで、〈真〉はその〈認知手段〉自体からは確定できない。そうではなく、効果的作用の認識、或いは、原因の美質の認識に依存して初めて確定されるのである。それらの二種類の認識に対する依存性が無限連鎖の問題を生み出さない理由は、後に説明される。したがって、「非依存性のみが〈真〉の根拠である」という主張は誤りである。

また、上記のクマーリラの論法は、〈真〉だけでなく、〈偽〉にもそのまま当て嵌まる。〈真〉が能力であるなら〈偽〉も能力であるはずだからである。したがって、クマーリラ自身は「〈偽〉は他律的である」と主張しているにもかかわらず、「〈偽〉は自律的である」ということが論証されてしまう。

カマラシーラは、上記のシャーンタラクシタの批判の注釈を終えた後で、補足として、ウンベーカーが紹介し批判する自律的真理論解釈についても議論している。ウンベーカーは、『シュローカヴァールツィヤカ』「教令ストラ」章第47詩節に対する『タートパリヤティーカー』で、当時の自律的真理論解釈として、(1)「〈真〉はもともと存在している」という因中有〈真〉説に基づく解釈、(2)「認識の〈真〉はその原因から転移し得ない」という〈真〉不転移説に基づく解釈、(3)「刹那滅する認識の能力は過去・現在・未来のいずれにおいても作り出され得ない」という〈真〉非結果説に基づく解釈、(4)「〈真〉＝〈理解を本質とすること〉は本性的である」という解釈を紹介し、それらを否定した上で、(5)ウンベーカー自身の解釈を提示する。カマラシーラは、それらの解釈を若干の変更を加えて引用し、ウンベーカーによる批判も利用しながら、仏教学派の立場から念入りに批判した上で、最後にウンベーカー自身の解釈も否定する。このようにして、シャーンタラクシタが網羅できなかった自律的真理論の可能性を舐潰しにしていく。本稿で扱う範囲では、(1)から(3)までが取り上げられる。残りは、「自律的真理論検討」章の最後に置かれている<sup>4</sup>。

<sup>4</sup>この議論に関するウンベーカー注とカマラシーラ注の対応は以下の表の通りである。

ウンベーカー		カマラシーラ	
1 「因中有〈真〉」とその批判	TT (48: 15–49: 2)	TSP (912: 23–914: 5)	B
2 「〈真〉不転移」とその批判	TT (49: 3–10)	TSP (912: 1–22)	A
3 「〈真〉非結果」とその批判	TT (49: 11–50: 4)	TSP (914: 6–916: 18)	C
4 「〈理解を本質とすること〉本性由来」 その批判・付随的議論 (錯誤知識)	TT (50: 5–53: 22)	TSP (981: 22–982: 17)	D 付随的議論略
5 ウンベーカー自身の解釈	TT (53: 23–55: 13)	TSP (982: 18–983: 19) TSP (983: 20–987: 15)	E F ウンベーカー批判

カマラシーラは、ウンベーカーの議論の構成要素 {1, 2, 3, 4, 5} を、{1, 2, 3} と {4, 5} に分割し、{1, 2, 3} の1と2の順序を置き替えて、4の中に含まれている付随的議論を取り除く(4\*)。そして、本稿で扱う〈能力の自律性の議論〉の

## シノプシス

### 1 〈認知手段〉の本性的な能力 (svābhāvikaśakti) に関する議論

1.1 導入部：前章との関連性 (2810)；「〈真〉は自律的である」という表現の意味に対する問い (2811)

#### 1.2 自律的真理論に関するクマーリラの言明

1.2.1 〈真〉の成立の自律性：[主張] 〈認知手段〉の〈認知対象を理解させるなどの能力〉 (meyabodhādike śaktiḥ) は本性的 (svābhāvikī) なものとして成立している (sthita)；[理由] 自律的に存在しない能力は他者によって作り出され得ないから (2812)

1.2.2 〈真〉の確立の自律性：[主張] 〈真〉の確立の根拠は〈非依存性〉のみである；[理由] 依存性があれば〈真〉は消え去るから (2813)；[主張] 論理的なことを言う者 (nyāyavādin) は〈真〉を消し去る主張 (他律的真理論) を試みない；[理由] その主張の論証手段 (sādhana) までも自分の主張によって消え去るから (2814)；[説明] 〈真〉は依存性を持つならどの論証手段にも確立されない (na vyavasthāpyate)；そして、その〈真〉が確立していない論証手段 (hetu) によってでは、論証対象を論証することはできない (2815)

#### 1.3 シャーンタラクシタによるクマーリラ批判

##### 1.3.1 〈真〉の成立の自律性の主張 [1.2.1] に対する批判

1.3.1.1 (A) 「本性的」 (svābhāvika) という語によって〈常住〉 (nitya) 或いは〈無原因〉 (ahetuka) が意図されている場合

1.3.1.1.1 a) (1) 「能力は能力保持者と異なる」という見解

1.3.1.1.1.1 見解 (1) の論証：[主張] 既に述べたように、能力は事物 (padārtha) と異なる (2816)；[理由] 能力は結果を作り出すことが可能な事物の本質 (svarūpa) であるから；帰謬法：能力が事物の本質でなければ、事物は結果を生み出す者ではなくなってしまう (2817)

1.3.1.1.1.2 能力は本性的 (=常住・無原因) ではあり得ない

1.3.1.1.1.2.1 [主張] 能力は無常であるので原因を有する (2818)

1.3.1.1.1.2.2 帰謬法：能力が本性的 (=常住・無原因) である場合の帰結 (prasaṅga)：〈認知手段〉も能力を本質とするので常住・無原因になってしまう (2819)；〈認知手段〉そのもの (svarūpa) と結果 (kārya) は、現に一時的であることが観察されるにもかかわらず、そうではあり得なくなってしまう (主張 [1.2.1] の知覚・推理との矛盾) (2820–21)

1.3.1.1.1.2.3 帰謬法の根拠：常住なる事物 (vastu) の顕現 (vyakti) と〈自らとは異なる原因への依存〉 (hetvantarāpekṣā) の否定：[反論] 常住なる〈認知手段〉そのものは顕現させるものによって顕現した時にのみ認識され、自らとは異なる原因に依存する時に結果を生み出す [から主張 [1.2.1] の知覚・推理との矛盾はない] (2822)；[答論] 常住なる事物の顕現と〈自らとは異なる原因への依存〉は否定済みであるから、常にそれそのものと結果は常に認識されることになってしまう (2823)

1.3.1.1.2 (2) 「能力が能力保持者と異なる」という見解 (vyatirekapakṣa)、(3) 「異なり且つ異なる」という見解 (ubhayātmakapakṣa)、[(4) 「異なることも異なることもない」という見解 (anubhayātmakapakṣa)]

後に {2, 1, 3} を、章全体の末尾に {4, 5} を配置し、その後にウンパーカによる解釈に対する自らの批判 (F) を挿入している ({2, 1, 3} {4, 5, F})。



1.3.1.1.2.1 帰謬法：見解 (2) (3) [(4)] の場合の帰結：その場合でも、常住な能力と常に関係しているせいで、〈認知手段〉は常住になってしまう (2824)

1.3.1.1.2.2 帰謬法の根拠：そうでなければ〈真〉は常住になりえない：能力は、〈認知手段〉と常に関係していなければ、単一の本質を持たない（＝それと関係している本質とそれと関係していない本質という二つを持つ）ことになるので、常住（＝本性的）ではあり得なくなる (2825)

1.3.1.2 (B) 「本性的」(svābhāvika) という語によって〈保持者と同時に生じること〉が意図されている場合

1.3.1.2.1 [反論] 能力は〈認知手段〉と同時に生じるのであって、後から他者によって与えられるものではない (2826)

1.3.1.2.2 主張 [1.2.1] は〈内容が確立済み〉(siddhasādhya) [答論] それについて仏教学派に異論はない；[理由]：無部分のものとして実現した事物の中に後から能力は生じ得ない (2827)

1.3.1.2.3 帰謬法：能力が後から生じる場合の帰結

1.3.1.2.3.1 事物と能力は別物であることになってしまう；事物が実現している時に能力が実現していなければ、〈実現していること〉〈実現していないこと〉という矛盾する属性との結び付くから (2828–29)

1.3.1.2.3.2 どのような事物も能力を持てなくなってしまう；あらゆる事物は、刹那滅であるので、能力が与えられる時まで存続しないから (2830–31)

1.3.2 〈真〉の確立の自律性の主張 [1.2.2] に対する批判

1.3.2.1 〈真〉の確立の他律性の論証

1.3.2.1.1 [主張] 能力（＝〈真〉）は、〈認知手段〉の中に本性的なものとして成立しているとしても、自律的には理解され得ない (2832)

1.3.2.1.2 [説明] 〈認知手段〉の〈経験を本質としていること〉(anubhavātmatva) のみを通じてその〈真〉は確定され得ない (2833)

1.3.2.1.3 [理由] 〈非認知手段〉に分類される〈無分別の錯誤知〉にも〈経験を本質としていること〉があるから (2834)

1.3.2.1.4 [結論] それゆえに、〈認知手段〉に能力を生み出すためではなく、そこにある能力を確定するために、認識者は、〈効果的作用の認識〉(arthakriyājñāna)、或いは、〈原因の美質の認識〉(kāraṇaṇājñāna) に依存する (2835)

1.3.2.1.5 [実例] 毒や酒などの能力のように (2836–37)

1.3.2.2 主張 [1.2.2] の〈自らの言明との矛盾〉(svavacanavirodha)：〈真〉の確立の自律性の主張は「能力は論理的要請 (arthāpatti) を確立手段とする」というクマーリラ自身の言明と矛盾する (2838–39)

1.3.2.3 クマーリラは〈真〉の成立と確立の問題を混同している：〈真〉は他律的に確立されるとしても消え去ることはない (2840)；〈真〉は自律的に生じるが、他律的に確定される (2841)

1.3.3 主張 [1.2.1] [1.2.2] の理由の〈不確定性〉(anaikāntikatva)：クマーリラの〈真〉の自律性の論証は、〈偽〉にもそのまま当て嵌まるので、〈偽〉の自律性も導き出される；〈偽〉も能力であるから (2842–45)

## 翻訳研究

### 1.1 導入部

[TSP 2810.0] **evam** ityādinā bhūyaḥ svatantraśrutiniḥsaṅgatvam eva prakārantareṇa samarthayate /

[TSP 2810.0] **de ltar** zhes bya ba la sogs pas yang rang dbang thob la ma zhen pa nyid rnam pa gzhan gyis sgrub<sup>(1)</sup> par byed pa nyid yin te /

[TSP 2810.0] [シャーンタラクシタは、] 第 2810 詩節で、さらに、同じ <〔ゴータマ・ブッダが〕自律的な言葉（ヴェーダ聖典）に執着しなかったこと> (svatantraśrutiniḥsaṅgatva) を別の仕方で裏付けている<sup>5</sup>。

[TS 2810]

**evam ca pauruṣeyatve vedānām upapādite /**

**svataḥprāmāṇyam apy eṣāṃ pratikṣiptam ayatnataḥ //2810//**

**rig byed skyes bus byas nyid du //**

**de ltar bsgrub<sup>(2)</sup> par byas pas na //**

**'bad mi dgos par de dag la //**

**rang las tshad ma nyid kyang btsal<sup>(3)</sup> //**

そして、以上のように〔「言葉の検討」章 (śrutiparīkṣā) で〕ヴェーダ聖典の〈人為性〉が証明されたとき、これら (ヴェーダ聖典) の〈真〉が自律的であるということ (svataḥprāmāṇya) も容易に否定される。

<sup>5</sup> 「自律的な言葉に執着しない」 (svatantraśrutiniḥsaṅga) という語は、具体的には、ダルマ (縁起) を知るためにヴェーダ聖典を頼りにしないということの意味する。シャーンタラクシタは、『タットヴァサングラハ』冒頭の帰敬偈で、第 24 章「言葉の検討」と第 25 章「自律的真理論検討」を示唆しながら、ゴータマ・ブッダを修飾するものとして、この語を用いている。カマラシーラによれば、シャーンタラクシタは、〈自律的な言葉に執着しない〉ということをも「言葉の検討」章と「自律的真理論検討」章で二通りの方法で裏付けている。

TS 1-6: prakṛtīśobhayātmādivyāpārahitaṃ calam / karmatātphalasambandhavyavasthādīsamāśrayam //1// guṇa-dravyakriyājātisamavāyādyupādhibhīḥ / śūnyam āropitākāraśabdapratyayagocaram //2// spaṣṭalakaśaṇasaṃyuktapramā-dvitayaniścitam / anīyasāpi nāmśena miśṛbhūtāparātmakam //3// asaṃkrāntim anādyantaṃ pratibimbādīsaṃnibham / sarvaprāpīcasamdhohaniruktam agatam paraiḥ //4// **svatantraśrutiniḥsaṅgo** jagaddhitavidhīsayā / analpakalpāsaṃkhyeya-sātmībhūtamahādayaḥ //5// yaḥ pratīyasamutpādam jagāda gadatāṃ varaḥ / taṃ sarvajñam pranmyāyam kriyate tattva-saṃgrahaḥ //6// (「(1-8) 根本質料因 (prakṛti)、主宰神 (īśa)、両者 (根本質料因+主宰神)、永続主体 (ātman) などの働きを離れており、(8) ダイナミック (無常) であり、(9) 行為とその結果の関係の設定などの拠り所であり、(10-15) 性質・実体・運動・普遍・内属などという付帯性 (upādhi) を欠いており、(16) 言葉と分別知の対象の形象が付託される場であり、(17-19) 判明な定義を完全に備えている二つ組の〈認知手段〉(知覚+推理) によって確定され、(20) そこにおいてほんの僅かたりとも或る者の本質が他者の本質と混じり合うことがない場であり、(21) [未来から現在、現在から過去への存在者の] 移行 (saṃkrānti) が起こらない場であり、(22) 始まりも終わりもなく、(23) 虚像 (写像) など [といった実体的ない心のみ存在] のようなものであり、あらゆる言語的虚構世界 (prapañca) の総体から解き放たれており、[ゴータマ・ブッダ以外の] 他の者たちは [誰も] 理解することがなかった〈縁起〉 (pratīyasamutpāda) を、或るお方は、(24-25) **自律的な言葉に執着することなく [直観し]**、(26) 数え切れない多くのカルパを経て大悲を本性として身につけて、世界の人々に利益を与えたいという欲求に促されて、説法者たちの最上の者として、お説きになった。その全知者であるお方に敬礼した上で、[私、シャーンタラクシタは、] この『タットヴァサングラハ』を著す)

<sup>(1)</sup>sgrub] D; bsgrub P

<sup>(2)</sup>bsgrub] D; sgrub P

<sup>(3)</sup>kyang btsal] D; kyad rtsal P

## カマラシーラの補遺 K1 『シュローカヴァールツィカ』に基づく自律的真理論の議論の流れの概観

[TSP 2810.1] tathā hi śruteḥ prāmāṇyaṃ yathā syād iti manyamānāḥ sāmānyena sarvaprāmāṇānām svataḥ prāmāṇyaṃ aprāmāṇyaṃ tu parata ity āhur jaiminīyāḥ / parataḥ kila prāmāṇye 'navasthādidoṣa-prasaṅgāt pramāṇetaravyavasthocchedaḥ syāt /

[TSP 2810.1] 'di ltar rgyal dpog pa rnam ni ci nas kyang thos pa tshad ma nyid du bya'o snyam pa na spyir tshad ma thams cad rang las tshad ma nyid yin la tshad ma ma yin pa ni gzhan las so zhes zer ro // gzhan las tshad ma nyid yin<sup>(4)</sup> na thug pa med pa la sogs pa'i skyon du thal ba'i phyir tshad ma dang gcig shos kyi<sup>(5)</sup> rnam par gzhag pa rgyun chad par 'gyur ro //

[TSP 2810.1] すなわち、「〔ヴェーダ聖典という〕言葉が真（〈認知手段〉）になるようにしよう」と考えて、ジャイミニ追従者（バッタ派）は「一般的に、全ての〈認知手段〉の〈真〉は自律的であり、〈偽〉の方は他律的である」と主張している。聞くところによれば、〈真〉が他律的であるとするならば、無限連鎖（anavasthā）などの問題が起こってしまうので、〈認知手段〉と〈非認知手段〉の区別が根絶されてしまうだろうとのことである。

### K 1.1 真理論の四つの選択肢の可能性

[TSP 2810.2] tathā hi catvāraḥ pakṣāḥ sambhavanti / kadācid ubhe 'pi prāmāṇyāprāmāṇaye<sup>1)</sup> svata eveti prathamāḥ / kadācit parata<sup>2)</sup> eveti dvitīyāḥ / prāmāṇyaṃ parato 'prāmāṇyaṃ tu svata eveti tṛtīyāḥ / etad-viparyayaś<sup>3)</sup> caturthaḥ /

[TSP 2810.2] 'di ltar phyogs bzhir 'gyur ba yin te / res 'ga' tshad ma dang tshad ma ma yin pa gnyi ga rang nyid las zhes bya ba ni dang po'o // gnyis pa ni res 'ga' gzhan nyid las so zhes bya ba'o // gsum pa ni tshad ma nyid ni gzhan las yin la tshad ma ma yin pa ni rang las zhes bya'o // bzhi ba ni 'di las bzlog pa'o //

[TSP 2810.2] すなわち、四つの見解があり得る<sup>6)</sup>。第一の見解は「ある場合には、〈真〉と〈偽〉の両方とも必ず自律的である」というものである<sup>7)</sup>。第二の見解は「ある場合には、〔〈真〉と〈偽〉の両方とも〕必ず他律的である」というものである<sup>8)</sup>。第三の見解は「〈真〉は他律的であり、〈偽〉は自律的である」というものである<sup>9)</sup>。第四の見解はこれ（第三の見解）の逆（「〈真〉は自律的で

<sup>6)</sup>ŚV codanā 33: sarvavijñānaviṣayam idaṃ tāvat pariṣyātām / pramāṇāpramāṇatve svataḥ kiṃ parato 'thavā // （「まず、全ての認識を主題として次のことが検討されなければならない。〔全ての認識の〕〈真〉と〈偽〉はそれぞれ自律的なのか、それとも他律的なのか」）

<sup>7)</sup>ŚV codanā 34ab: svato 'satām asādhyatvāt kecid āhur dvayaṃ svataḥ / （「或る者たちは、〔或る属性保持者に〕自律的に存在していない〔属性〕は実現され得ないという理由から、〔〈真〉と〈偽〉は〕両方とも自律的であると主張している」）

<sup>8)</sup>ŚV codanā 34cd: apare kāraṇotpannaguṇadoṣāvadhāraṇāt // （「他の人たちは、〔認識の〕原因に生じた美質と欠陥の確定を通じて〔それぞれ認識の〕〈真〉と〈偽〉が確定されるという理由から、〈真〉と〈偽〉の両方ともまさに他律的であると主張している」）

<sup>9)</sup>ŚV codanā 38–39: tasmāt svābhāvikaṃ teṣām apramāṇatvam iṣyatām / prāmāṇyaṃ ca parāpekṣam atra nyāyo 'bhīdhīyate // aprāmāṇyam avastutvān na syāt kāraṇadoṣataḥ / vastutvāt tu guṇaiḥ teṣām prāmāṇyam upajanyate // （「それゆえに、それら（認識）の〈偽〉は本性的であり〈真〉は他に依存していると認めなければならない。このことについて道理を述べよう。〔認識の〕〈偽〉は非実在者であるから〔因果関係の中にないで〕原因の欠陥によって生じえない。一方、それら（認識）の〈真〉は実在者であるから〔原因の〕美質によって生じさせられる」）

<sup>1)</sup>prāmāṇyāprāmāṇaye] TSP<sub>GOS</sub>; pramāṇāpramāṇye TSP<sub>BBS</sub>; -pramāṇatve TSP<sub>MSJ</sub> TSP<sub>MSJ</sub>

<sup>2)</sup>-cit parata] TSP<sub>MSJ</sub>; -cid aparata TSP<sub>BBS</sub> TSP<sub>GOS</sub>; -cid uparataḥ TSP<sub>MSJ</sub>

<sup>3)</sup>-viparyayaś] TSP<sub>BBS</sub> TSP<sub>GOS</sub> TSP<sub>MSJ</sub>; -viparyayā TSP<sub>MSJ</sub>

<sup>(4)</sup>yin] D; om. P

<sup>(5)</sup>kyi] D; kyis P



あり、〈偽〉は他律的である」) である。

## K 1.2 第1 選択肢の否定

[TSP 2810.3] tatra na tāvad ādyaḥ pakṣaḥ / tathā hi ekavyaktyādhāraṃ vā tad ubhayaṃ syād vyakti-bhedena vā / na tāvad ekasyāṃ vyaktau parasparaparihārasthitalakṣaṇayoḥ pramāṇetaradharmayoḥ sambhavaḥ, virodhāt / nāpi vyaktibhedena, niyamakāraṇābhāvān niścayahetvasambhavāc cāsaṃkīrṇapramāṇāpramāṇavyavasthānābhāvaprasaṅgāt / tathā hi dvayor api svātantrīyād idaṃ pramāṇam eveti niyamo na syāt / bodhasāmānyena<sup>4)</sup> ca dvayor api tirohitabhedatvād anyasya cāvadhāraṇakāraṇasyānabhyupagamād vibhāgenāparijñānād idaṃ pramāṇam apramāṇam iti vyavasthā na syāt /

[TSP 2810.3] de la re zhiḡ phyogs dang po ni ma yin te / 'di ltar de gnyi ga gsal ba gcig la brten pa yin nam / gsal ba tha dad pa la brten pa yin / re zhiḡ gsal ba gcig la phan tshun spangs te gnas pa'i mtshan nyid kyi tshad ma dang / cig shos kyi chos srid pa ma yin te / 'gal ba'i phyir ro // gsal ba tha dad pa la yang ma yin te / nges pa'i rgyu med pa'i phyir dang / nges pa'i rgyu med pa la yang tshad ma dang tshad ma ma yin pa'i rnam par gzhaḡ pa ma 'dres pa med par thal bar 'gyur ba'i phyir ro // de bzhin gnyi ga yang rang dbang can yin pa'i phyir 'di ni tshad ma'o // 'di ni tshad ma ma yin pa'o zhes bya ba nges par mi 'gyur ro // rtog pa mtshungs pas gnyi ga yang tha dad pa bsgribs pa'i phyir dang / gzhan nges par 'dzin pa'i rgyu khas ma blangs pa'i phyir ro // rnam par phyen nas yongs su mi shes pa'i phyir 'di ni tshad ma yin la 'di ni tshad ma ma yin no zhes rnam par gzhaḡ<sup>6)</sup> par mi 'gyur ro //

[TSP 2810.3] それらのうち、まず、第一の見解(「〈真〉と〈偽〉の両方とも自律的である」)は成立しない。すなわち、(A) その両者(〈真〉と〈偽〉)は同一の個物を拠り所として[同じ個物に]存在しているのだろうか、それとも、(B) 個物を異にして[別々の個物に]存在しているのだろうか。まず、(A) 相互に排除し合う形で成立する本質を有する〈認知手段〉と〈非認知手段〉の属性(〈真〉と〈偽〉)が同一の個物に存在し得るということはない<sup>10)</sup>。なぜなら、〔〈真〉と〈偽〉は同じ場所にあるとき〕矛盾するからである<sup>11)</sup>。また、(B) 〔〈真〉と〈偽〉が] 個物を異にして[別々の個物に]存在するというものもない。なぜなら、(B-1) [「これは真に他ならない」という]制限の根拠がないし、(B-2) [どの認識が真でありどの認識が偽であるかの] 確定の根拠があ

<sup>10)</sup> ダルマキールティによる〈矛盾〉(virodha) の分類に基づく説明。ダルマキールティは、(1) 〈共存不能性〉(sahānavasthāna) と (2) 〈相互に排除し合う形で成立する本質を有すること〉(parasparaparihārasthitalakṣaṇatā) という二種類に〈矛盾〉を分類する。(1) と (2) の例として、それぞれ、冷たさという感触と熱さという感触の間の矛盾、及び、存在と非存在の間の矛盾が挙げられる。なお、(1) 〈共存不能性〉は、例えば、熱くも冷たくもない感触が存在するので、排中律を含意しないが、(2) 〈相互に排除し合う形で成立する本質を有すること〉は、例えば、事物は存在するか存在しないかしかないので、排中律を含意する。

NB 3.72-75: dvividho hi padārthānām virodhaḥ // avikalakāraṇasya bhavato 'nyabhāve 'bhāvād virodhagatiḥ // śītoṣṇasparśavat // parasparaparihārasthitalakṣaṇatayā vā bhāvābhāvavat // (「その理由は次の通りである。実在者たちの間の〈矛盾〉は二種類に分類される。(1) 原因を完備しているもの X が存在している場合、それとは異なるもの Y が存在するときに X が存在しなくなることで〈[X が Y と] 矛盾すること〉が理解される。例えば、冷たさという感触と熱さという感触[の間の矛盾]のように。或いは、(2) [X と Y が] 相互に排除し合う形で成立する本質を有することで〈[X が Y と] 矛盾すること〉が理解される。」) 例えば、存在と非存在[の間の矛盾]のように)

これらの二種類の矛盾の間の関係は、次のように考えられるだろう。(1) 〈共存不能性〉は、存在のレベルでの矛盾であり、経験的に確立される。(2) 〈相互に排除し合う形で成立する本質を有すること〉は、思考のレベルでの矛盾であり、経験によらずとも確立される。また、思考のレベルでの矛盾は、論理的思考(推理)の存在の存在の存在に対する〈制約関係〉を通じて、存在のレベルでの矛盾を必然的に導出する。

<sup>11)</sup> ŚV codanā 34ab: svatas tāvad dvayaṃ nāsti virodhāt (「まず、〔〈真〉と〈偽〉の] 両方とも自律的であるということはない。なぜなら、矛盾するからである」)

ŚV codanā 35ab: katham hy anyānapekṣasya viparītātmāsambhavaḥ / (「実に、どうして他に依存していない[同一の個別的認識]に〔〈真〉と〈偽〉という二つの] 反対の本性が存在し得るだろうか」)

<sup>4)</sup> bodha-] TSP<sub>M<sub>J</sub></sub> TSP<sub>M<sub>S</sub></sub>; bādha- TSP<sub>B<sub>S</sub></sub> TSP<sub>G<sub>O</sub>S</sub>

<sup>6)</sup> gzhaḡ] D; bzhag P

り得ないので、混じり合っていない〈認知手段〉と〈非認知手段〉が区別されないということになってしまうからである。すなわち、(B-1)〔〈真〉と〈偽〉は〕二つとも自律的であるから、「これは真に他ならない」という制限はあり得ない。そして、(B-2) 認識の共通性によって〔〈真〉と〈偽〉の〕両方ともその特殊性が隠されているし、他の〔〈真〉と〈偽〉の〕確定の根拠は認められていないので、〔〈真〉と〈偽〉は〕別個な形で認識されないから、「これは真であり、〔これは〕偽である」というように区別（確定）することができない<sup>12</sup>。

### K 1.3 第2 選択肢の否定

[TSP 2810.4] nāpi dvitīyaḥ pakṣaḥ, prāg ubhayaśvabhāvarahitasya jñānasya niḥśvabhāvatvaprasaṅgāt / na hi parasparaparīhāraśthitalakṣaṇayoḥ prāmāṇyetaṛayor abhāve rūpāntaram asya śakyam avadhārayitum ity asaṃśayam asyānupākhyatvam āpadyate / āha ca /

svatas tāvad dvayaṃ nāsti virodhāt parato na ca /  
niḥśvabhāvatvam evaṃ hi jñānarūpe prasajyate //<sup>13</sup>  
vijñānavyaktibhedena bhavec ced aviruddhatā /  
tathāpy anyānapekṣatve kiṃ kveti na nirūpyate //<sup>14</sup>

iti /

[TSP 2810.4] phyogs gnyis pa yang ma yin te / dang po gnyi ga'i rang bzhin dang bral ba'i shes pa ni rang bzhin med pa nyid du thal bar 'gyur ba'i phyir ro // phan tshun spangs te gnas pa'i mtshan nyid kyi tshad ma dang / cig shos dag med pa la 'di'i ngo bo gzhan nges par nus pa ma yin pa'i phyir 'di the tshom med par nye bar brjod pa med pa nyid du 'gyur ro // yang bshad pa /

re zhig 'gal phyir rang las ni //  
gnyis med gzhan las kyang ma yin //  
de ltar shes pa'i ngo bo ni //  
rang bzhin med pa nyid du thal //  
shes pa'i gsal ba tha dad pas //  
rig byed dang ni 'gal bar 'gyur //  
'di ltar 'di ni ltos med ni //  
ci zhig gang rung nges mi byed //

ce'o //

[TSP 2810.4] また、第二の見解（「〈真〉と〈偽〉の両方とも他律的である」）も成立しない。なぜなら、〔他によって〈真〉と〈偽〉が作り出される〕前の〔〈真〉と〈偽〉の〕両方の本質を欠いた認識は、本質を持たないことになってしまうからである。実に、〔或る認識に〕相互に排除し合っ

<sup>12</sup>ŚV codanā 36: vijñānavyaktibhedena bhavec ced aviruddhatā / tathāpy anyānapekṣatve kiṃ kveti na nirūpyate // （「【反論】〔〈真〉と〈偽〉は〕個別的認識を異にすることで〔別々の個別的認識に存在するとすれば〕矛盾しないはずである。【回答】そのような場合でも、〔この見解では〈真〉と〈偽〉は〕他に依存していないので、どの〔認識〕に〔〈真〉と〈偽〉の〕どちらがあるのか確定〔でき〕ない」）

<sup>13</sup>ŚV codanā 34.

<sup>14</sup>ŚV codanā 36.

て成立する本質を持つ〈真〉と〈偽〉が存在しないとき、この〔認識〕に属するそれら以外の本質を確定することはできない。したがって、疑いなくこの〔認識〕は規定不能であることになってしまう<sup>15</sup>。そして、〔クマーリラは、第一と第二の見解について次のように〕述べている<sup>16</sup>。

「まず、〔〈真〉と〈偽〉の〕両方とも自律的であるということはない。なぜなら、矛盾するからである。また、〔〈真〉と〈偽〉の両方とも〕他律的であるということもない。なぜなら、このような場合、認識自体は本質を持たないことになってしまうからである」(ŚV codanā 34)

「【反論】〔〈真〉と〈偽〉は〕個別的認識を異にすることで〔別々の個別的認識に存在するとすれば〕、矛盾しなくなるはずである。【回答】そのような場合でも、〔〈真〉と〈偽〉は〕他に依存していないのであれば、どの〔認識〕に〔〈真〉と〈偽〉の〕どちらが存在するかは確定されない」(ŚV codanā 36)

#### K 1.4 第3 選択肢の否定

[TSP 2810.5] nāpi ṛṭīyaḥ pakṣaḥ, anavasthādoṣāt / tathā hi na tāvat parato 'pramāṇabhūtāt prāmāṇyam āśamsanīyam, tasya svayam evāpramāṇatvāt / nāpi pramāṇabhūtāt, tasyāpi tulyaparyanuyogena parataḥ-prāmāṇyāśamsāyām anavasthāprasaṅgāt / tataś caikapramāṇavyaktivavasthāpanāya pramāṇaparampārām anusarataḥ sakalam eva puruṣāyusaḥ upayujyeta /

[TSP 2810.5] phyogs gsum pa yang ma yin te / thug pa med pa'i skyon du 'gyur ba'i phyir te / 'di ltar re zhiḡ tshad mar gyur pa gzhan las tshad ma nyid du 'dod pa yang ma yin te / de ni rang nyid tshad ma yin pa'i phyir ro // tshad mar gyur pa las kyang ma yin te / de la yang brgal zhiḡ brtag pa mtshungs pas gzhan las tshad ma nyid du 'dod pa na thug pa med par thal bar 'gyur ba'i phyir ro // de lta yin na<sup>(7)</sup> tshad ma'i gsal ba gcig rnam par gzhaḡ par bya ba'i phyir tshad ma brgyud pa'i rjes su 'brangs pas skyes bu'i tshe mtha' dag dogs par 'gyur ro //

[TSP 2810.5] また、第三の見解(「〈真〉は他律的であり、〈偽〉は自律的である」)も成立しない。なぜなら、無限連鎖という問題が起こるからである。すなわち、まず、〔或る認識の〕〈真〉は〈非認知手段〉である他者を通じて〔他律的に〕求められることはあり得ない。なぜなら、それ(〈非認知手段〉である他者)はまさにそれ自体が偽であるからである。また、〔或る認識の〕〈真〉は〔認知手段〕である〔他者〕を通じて〔他律的に〕求められることもあり得ない。なぜなら、それ(〈認知手段〉である他者)も、「それは本当に真なのか」と同じように問い詰められることで〔さらなる〕他者を通じて〔他律的に〕その〈真〉が求められるので、無限連鎖が起こってしまうからである。そして、そのことから、一つの〈認知手段〉の個物を〔真であると〕確定するために、〔認識者は〕〈認知手段〉を次から次へと追い求めることで〔その認識者の〕人生全てが残りなく捧げられることになるだろう<sup>17</sup>。

<sup>15</sup>ŚV codanā 34bcd: parato na ca / niḥsvabhāvatvam evaḡ hi jñānarūpe prasajyate // (「また、〔〈真〉と〈偽〉の両方とも〕他律的であるということもない。なぜなら、このような場合、認識自体は本性を持たないことになってしまうからである」)

ŚV codanā 35cd: kimātmakaḡ bhavet tac ca svabhāvadvyavarjitam // (「そして、それ(認識)は、〔〈真〉と〈偽〉と〕いう二つの本性を欠いているならば、いったい何を本性としているのだろうか」)

<sup>16</sup>クマーリラは、第一の見解を矛盾律に反するという観点から、第二の見解を排中律に反するという観点からそれぞれ否定している。また、第一の見解において、矛盾律の侵犯を回避するために、或る認識は真であり、或る認識は偽であるというように、異なる個別的認識に〈真〉と〈偽〉を住み分けさせると、それらは外部のものとは完全に無関係なので、外部から見分けることができなくなる。

<sup>17</sup>ŚV codanā 49–51: jāte 'pi yadi vijñāne tāvan nārtho 'vadhāryate / yāvat kāraṇasuddhatvam na pramāṇāntarād gatam // tatra jñānāntarotpādāḡ pratīkṣyaḡ kāraṇāntarāt / yāvad dhi na paricchinnā 'suddhis tāvad asatsamā // tasyāpi kāraṇe 'suddhe tajjñāne syāt pramāṇatā / tasyāpy evam ifiṭṭhaḡ ca na kvacid vyavatiṣṭhate // (「仮に、認識 1 が生じてても、〔認識 1 の〕原因 1 の清

<sup>(7)</sup>na] D; dang P

### K 1.5 第4 選択肢の確立

[TSP 2810.6] tasmād gatyantarāsambhavāt svataḥ sarvaprāmāṇānām prāmāṇyaṃ parato 'prāmāṇyam iti gṛhyatām / tatra prayogaḥ /

ye yadbhāvanīyatās te taṃ prati na param apekṣate, yathākāśam amūrtatvāya /  
pramāṇabhāvanīyatas ca vivādāspadībhūtā vijñānādayaḥ /

iti vyāpakaviruddhopalabdhiḥ / na cāsyānaikāntikatvam, svato 'sambhavinō dharmasya pareṇādhātum aśakyatvād ākāśasyeva mūrtatvam / yad āha /

na hi svato 'satī śaktiḥ kartum anyena pāryate // <sup>18</sup>

iti //

[TSP 2810.6] de lta bas na go skabs gzhan med pa'i phyir tshad ma thams cad kyi tshad ma ni rang las yin la / tshad ma ma yin pa nyid ni gzhan las zhes gzung bar bya'o // de la sbyor ba ni

gang dag gang<sup>(8)</sup> gi rang bzhin du nges pa de dag ni de las gzhan la ltos<sup>(9)</sup> pa ma yin te / dper na nam mkha' lus can ma yin par bya ba bzhin no //

rtsod pa'i gzhir gyur pa'i rnam par shes pa la sogs pa yang tshad ma nyid du nges pa yin no

zhes bya ba ni khyab par byed pa 'gal ba dmigs pa'o // 'di ma nges pa yang ma yin te / rang las med pa'i chos ni gzhan gyis bya bar mi nus pa'i phyir nam mkha'i lus can nyid bzhin te /

rang las nus pa med pa ni //

gzhan gyis bya bar nus ma yin //

zhes gang bshad pa ma yin no //

[TSP 2810.6] それゆえに、他の選択肢はあり得ないという理由から、「全ての〈認知手段〉の〈真〉は自律的であり、〈偽〉は他律的である」と理解されなければならない。そのことについて〔次のように〕論証式が述べられる。

【遍充関係】〔属性保持者〕X が属性 Y の中に制約されているとき、X は Y に関して他に依存しない。例えば、虚空が無形態性のために〔他に依存していない〕ように。

【主題所属性】そして、議論的になっている認識など（認識と認識原因）は、〈認知手段〉の特性（〈真〉）の中に制約されている。

〔【結論】認識などは〈真〉に関して他に依存していない。〕

浄さ（美質）が他の〈認知手段〉（認識 2）を通じて理解されないかぎり、〔認識 1 の〕対象は確定されないとしよう。その場合、別の認識 2 は別の原因 2 から生じていることが予想されるはずである。なぜなら、清浄さは確定されないかぎり〔認識者にとって〕存在しないも同然だからである。それ（認識 2）も、原因 2 が清浄であり、それ（清浄な原因 2）の認識が生じたとき、真にな〔り原因 1 の清浄さを確定す〕るだろう。そして、それ（原因 2 の原因の清浄さの認識 3）も同様である。〔したがって、認識 n の原因の清浄さの認識 n+1 が永遠に求められることになる。〕このように〔〈真〉は〕どの〔認識〕にも定まることはなくなる〕

<sup>18</sup>TS 2812cd. Cf. ŚV codanā 47 cd: na hi svato 'satī śaktiḥ kartum anyena śakyate //

<sup>(8)</sup>gang] D; om. P

<sup>(9)</sup>ltos] D; bltos P

以上は、〈能遍と矛盾するものの認識〉〔による推理〕(vyāpakaviruddhopalabdhi) である<sup>19</sup>。そして、この〔推理の証因〕は不確定ではない。なぜなら、〔或る存在者の中に〕自律的に存在し得ない属性<sup>20</sup>を〔その存在者の中に〕他〔の存在者〕が与えることはできないからである。例えば、虚空の中に〔自律的に存在し得ない〕有形態性(形態)を〔虚空の中に他の存在者が与えることができない〕ように。そのことを〔クマーリラは〕次のように述べている。

「なぜなら、〔或る存在者の中に〕自律的に存在していない能力を〔その存在者の中に〕他〔の存在者〕が作り出すことはできないからである」(TS 2812cd)

[TSP 2811.0] atra svata ityādīnā tucchaṃ pratijñārthaṃ sambhāvayaṃ tadvicāradvāreṇa dūṣaṇam ārabhate /

[TSP 2811.0] 'dir tshad ma kun gyis zhes bya ba la sogs pas dam bca' ba'i don gsog yin pa srid pa na nram par dpyad pa'i sgo nas sun 'byin pa rtsom pa yin te /

[TSP 2811.0] 以上のことについて、〔シャーンタラクシタは、〕第 2811 詩節で、空っぽな〔全ての〈認知手段〉の〈真〉は自律的である〕という主張の意味について思いを巡らしながら、その〔主張の意味〕を考察することを通じて〔自律的真理論の〕批判を開始している。

[TS 2811]

svataḥ sarvapramāṇānāṃ prāmāṇyam iti gr̥hyatām /<sup>21</sup>

ity etasya ca vākyasya bhavadbhiḥ ko 'rtha iṣyate //2811//

rang las tshad ma thams cad kyi //

tshad ma nyid ni gzung bar gyis //

de lta bu'i ngag de la ni //

khyed kyi don ni ji ltar 'dod //

また、あなたたち(バツタ派)は、「全ての〈認知手段〉の〈真〉は自律的であると理解しなくてはならない」というこの文にどのような意味を認めているのだろうか。

## 1.2 自律的真理論に関するクマーリラの言明

### 1.2.1 〈真〉の成立の自律性

[TSP 2812ab.0] ko 'rtha iṣyata iti praśne para āha meyabodhādika ityādi /

[TSP 2812ab.0] don gang yin par 'dod ces 'dri ba la / gzhan gyis gzhal bya rtogs la sogs zhes bya ba la sogs pa smos te /

[TSP 2812ab.0] 「〔「全ての〈認知手段〉の〈真〉は自律的である」というこの文に〕どのような意味を認めているのだろうか」という質問に対して、対論者(クマーリラ)は第 2812 詩節前半を述べている。

<sup>19</sup>ダルマキールティによる〈非認識〉(anupalabdhi) の分類については、Kajiyama[1998: 151-154]を見よ。この論証式では、〈能遍と矛盾するもの〉は、「〈真〉の中に制約されているということ」である。また、「能遍と矛盾するもの」という表現における「能遍」の指示対象は〈その中に主題が制約されている属性に関する他への依存性〉であり、それによって遍充される所遍は〈〈真〉に関する他への依存性〉であることになる。

<sup>20</sup>「自律的」(svatas)の「自」(sva)は、属性ではなく、存在者(属性保持者)の方を指示する。それ自体で存在(自存)し得ない属性ではなく、存在者の本性に由来し得ない属性ということである。

<sup>21</sup>SV codanā 47ab.



[TS 2812ab]

meyabodhādike śaktis teṣāṃ svābhāvīkī sthitā /

de dag la ni rang bzhin gyis //

gzhal bya rtogs sogs nus gnas yin //

〔「全ての〈認知手段〉の〈真〉は自律的である」という主張の意味は次の通りである。〕

それら（〈認知手段〉）に属する〈認知対象を理解させる能力〉などは本性的なものとして成立している<sup>22</sup>。

[TSP 2812ab.1] yadi jñānaṃ pramāṇaṃ tadā tasya **meyabodhe** prameyapariçchede **svābhāvīkī śaktiḥ**, arthapariçchedakatvāḥ jñānasya / atha cakṣurādīni tadā teṣāṃ yathārthajñānanajanane codanāyā atīndriyārthādhigame svata eva śaktir ity etad **ādiśabdena** saṃgrhītam /

[TSP 2812ab.1] gal te shes pa tsam yin na de'i tshes **gzhal bar bya ba rtogs pa'i** tshad ma de yongs su rtogs pa'i tshad gcod<sup>(10)</sup> par byed pa la **nus pa'i rang bzhin can** yin te / shes pa ni don gcod<sup>(11)</sup> par byed pa yin pa'i phyir ro // 'on te mig la sogs pa yin na de'i tshes de dag don ji lta ba bzhin du shes pa skyed par byed pa dang / skul bar byed pa la yang dbang po las 'das pa'i don rtogs par rang nyid kyis<sup>(12)</sup> nus pa yin no zhes bya ba 'di ni **sogs pa'i** sgras gzung bar bya'o //

[TSP 2812ab.1] もし認識が〈認知手段〉であるならば、その場合、それ（認識）に属する「**認知対象を理解させる**」、認知対象を画定する（prameyapariçcheda）、「**能力は本性的である**」。なぜなら、認識は対象を画定するもの（arthapariçchedaka）だからである。またもしも視覚器官など〔の認識原因が〈認知手段〉〕であるならば、その場合、それら（視覚器官など）に属する対象と対応した認識を生じさせる〔能力は自律的（本性的）である他はなく〕、教令に属する超感覚的な対象を理解させる能力は自律的（本性的）である他はない。このことが〔「**認知対象を理解させる能力など**」という表現の〕「**など**」という言葉によって含められている<sup>23</sup>。

[TSP 2812cd.0] atraiva tāvat para upapattim āha **na hītyādi** /

[TSP 2812cd.0] 'di nyid la re zhig gzhan dag 'thad pa 'chad pa ni / **rang nyid kyis med** ces bya ba la sogs pa'o //

<sup>22</sup> 「本性的である」（svābhāvika）という語は、svabhāva（「本性」）という名詞語基の後に、「それから来たもの（āgata）」という意味で、接辞が導入されることで成立する。このことから、「能力が本性的である」という表現は、「能力が本性から来るものである」ということを意味し、能力（śakti）と本性（svabhāva）が別物であることを前提としている。

A 4.3.74: tata āgataḥ // （「X から」というように分析文において第 5 格接辞の意味的連関を有する項目 X の後に、「来たもの」という意味で A 4.1.83 からここまで規定された接辞が導入される）

A 7.2.117: taddhiteṣv acām ādeḥ // （「指標辞 N、或いは、指標辞Nを有する〈タッディタ接辞〉が導入される時、語基〈アンガ〉の最初の母音の代わりに〈ヴリッディ〉が起こる」）

A. 7.3.50: thasya ikaḥ // （「th 音の代わりに ik 音という位置要素が起こる」）

<sup>23</sup> クマーリラにとって、〈認知手段〉（pramāṇa）と〈認知〉（pramā）の概念は相対的なものである。彼によれば、〈認知手段〉は、〈認知〉の直近の原因（pratyāsatti）である。そして、〈認知〉を何に設定するかで、〈認知手段〉が何であるかが決まる。「認知」という語が認識（jñāna）を指示する場合には、「〈認知手段〉」という語は、その認識を生み出す直近の原因、すなわち、〈靈魂（ātman）と精神器官（manas）の結合（saṃyoga）〉を指示する。一方、「認知」という語が概念的知覚（savikalpaka）や行動の決断（hānādibuddhi）などといった〈より高次の認識〉を指示する場合には、「〈認知手段〉」という語は、その〈より高次の認識〉を生み出す直近の原因である〈より低次の認識〉を指示する。結果として、「〈認知手段〉」という語は、場合によって、認識と認識原因の両方を指示することになる。戸崎 [1992]、Taber [2005: 70–78] を参照。

<sup>(10)</sup> de yongs su rtogs pa'i tshad gcod] D; yongs su gcod P

<sup>(11)</sup> gcod] D; cig P

<sup>(12)</sup> kyis] D; kyi P

[TSP 2812cd.0] まさに上記のことについて、まず、対論者（クマーリラ）は、第 2812 詩節後半で合理的説明（upapatti）を述べている。

[TS 2812cd]

na hi svato 'satī śaktiḥ kartum anyena pāryate<sup>5)</sup> //2812//

rang la med pa'i nus pa ni //

gzhan gyis byed par nus ma yin //

なぜなら、（或る存在者の中に）自律的に存在していない能力を（その存在者の中に）他（の存在者）が作り出すことはできないからである。

### 1.2.2 〈真〉の確立の自律性

[TSP 2813.0] etad eva darśayann āha **anapekṣatvam evaikam** ityādi /

[TSP 2813.0] 'di nyid bstan par bya ba'i phyir / **ltos**<sup>(13)</sup> **med gcig pu kho na nyid** ces bya ba la sogs pa smos te /

[TSP 2813.0] まさに以上のことを示すために〔クマーリラは〕第 2813 詩節を述べている。

[TS 2813]

anapekṣatvam evaikam prāmāṇyasya nibandhanam /

tad eva hi vināśyeta sāpekṣatve samāśrite //2813//

**ltos**<sup>(14)</sup> **pa med nyid gcig kho na //**

**tshad ma nyid kyi rgyu mtshan yin**<sup>(15)</sup> //

**ltos**<sup>(16)</sup> **pa dang bcas nyid rten na //**

**de ni 'jig pa kho nar 'gyur //**

〔〈認知手段〉の〕〈真〉〔の確立〕の根拠はただ一つ非依存性だけである。なぜなら、〔〈真〉の確立に〕依存性が認められるならば、それ（〈真〉）そのものが失われてしまうだろうからである<sup>24</sup>。

<sup>24</sup>クマーリラは、『ミーマーンサーヌートラ』第 1 巻第 1 章第 5 定句を意識して、「非依存性」（anapekṣatva）という語を用いている。

MS 1.1.5: autpattikas tu śabdasyārthena sambandhas tasya jñānam upadeśo 'vyatirekaś ca arthe 'nupalabdhe **tat pramāṇam** bādarāyaṇasyā**anapekṣatvāt** //（「そうではなくて、言葉の本来的な〈対象との関係〉が〔〈ダルマ〉の認識根拠である〕。教示（ヴェーダ聖典）は、それ（〈ダルマ〉）の認識手段であり、否定されることがない。まだ把握されていない対象に関して、それは〈認知手段〉（真）である。パーダラーヤナの考えでは、〈依存性〉がないから）」

クマーリラは、この定句の中に自身の真理論のエッセンスを読み込んでいる。

彼によれば、「教示」（upadeśa）という語は、「ヴェーダ教令」（codanā）、「ヴェーダ規定」（vidhi）という語と同義語である。「否定されることがない」（avyatireka）という語は、ヴェーダ聖典に基づく認識に対して反証知（bādhaka）が生じないことを意味している。「本来的」（autpattika）という語は、ヴェーダ聖典に基づく認識の原因における欠陥の非存在を示している。これによって、〈偽〉の二種類の〈認知手段〉、(A) 反証知（bādhaka）、(B) 原因における欠陥の

<sup>5)</sup>pāryate] TS<sub>BBS</sub>; śakyate TS<sub>GOS</sub> TS<sub>MS</sub> TS<sub>MS</sub> P

<sup>(13)</sup>ltos] D; bltos P

<sup>(14)</sup>ltos] D; bltos P

<sup>(15)</sup>yin] P; nyid D

<sup>(16)</sup>ltos] D; bltos P

[TSP 2813.1] **prāmāṇyasyeti prāmāṇyavyavasthānasya / tad eva hīti prāmāṇyam, vyāpakanivṛttau vyāpyasyānavasthānāt //**

[TSP 2813.1] **tshad ma nyid kyis zhes bya ba ni tshad ma rnam par gzhas par mi 'gyur ro // de nyid ces bya ba ni tshad ma nyid de<sup>(17)</sup> / khyab par byed pa log na khyab par bya ba mi gnas pa'i phyir ro //**

[TSP 2813.1] 「〈真〉の」というのは「〈真〉の確立の」ということである<sup>25</sup>。「なぜなら、（〈真〉の確立に依存性が認められるならば、）それ（〈真〉）そのものが（失われるだろうからである）」という〔表現の「それ」とは〕〈真〉のことである。なぜなら、能遍（非依存性）が否定されるとき、所遍（〈真〉）は確立されないからである<sup>26</sup>。

[TSP 2814ab.0] **syād etat / vināśyatām nāma, ko doṣa ity āha ko hītyādi /**

[TSP 2814ab.0] **'di snyam du 'jig par 'gyur mod skyon ni ci zhis yod ce na / rigs pa smra ba ni zhes bya ba la sog pa smos te /**

[TSP 2814ab.0] 次のような反論があるかもしれない。

【反論】〔主張の〈真〉が〕失われるなら失われればいい。何の問題があるだろうか。

【回答】以上のような反論を想定して〔クマーリラは〕第 2814 詩節前半で回答している。

[TS 2814ab]

**ko hi mūlaharam pakṣam nyāyavādy adhyavasyati<sup>6)</sup> /**

**rigs pa smra bsu zhis ni //**

**rtsa ba la gnod phyogs nges med //**

**実に、論理を述べる者のうち一体誰が（主張の）根底を奪い去る主張（「〈真〉は他律的である」という主張）を確定するだろうか。**

認識 (doṣajñāna) のいずれも、ヴェーダ聖典に対して生じないから、自律的に〈真〉の確立が起こることということが示される。また、「まだ把握されていない対象に関して」という表現によって、〈新規情報供与性〉が〈真〉の必要条件であるということが示される。

バク派の真理論では、〈対象との対応性〉 (tattvārthatva) と〈新規情報供与性〉 (ajñātārthatva) の二つが〈真〉の必要条件とされる。これらのうち、自律的真理論は、〈対象との対応性〉が主観的にどのように確立されるかを扱う。これら全てが、このヴェーダ聖典の〈真〉を確立する定句の中に表現されているとする訳である。

ŚV autpattika 10: autpattikagirā doṣaḥ kāraṇasya nivāryate / abādho 'vyatirekeṇa svataḥ tena pramānatā // (「本来的」という語によって原因の欠陥が否定されている。「否定されることがない」[という語]によって「反証されないこと」が〔意図されている〕。したがって、〔ヴェーダ聖典には〕自律的に〈真〉〔の確立が起こる〕」)

ŚV autpattika 11: sarvasyānupalabdhe 'rthe prāmāṇyam smṛtir anyathā / codanā copadesāś ca vidhiś caikārthavācīnaḥ // (「全て〔の〈認知手段〉〕は、まだ把握されていない対象に関して真である。そうでなければ、想起になってしまう。「ヴェーダ教令」、「教示」、及び、「ヴェーダ規定」という語は、同じ対象を指示している」)

<sup>25</sup>クマーリラは、「〈真〉の根拠」という表現を「〈真〉の確立 (vyavasthāna) の根拠」と説明することで、「クマーリラのこの主張は、真理論の存在論的側面ではなく認識論的側面からなされている」ということを示している。

<sup>26</sup>X (能遍) によって Y (所遍) が遍充されているとき、「能遍が存在しないとき、所遍は存在しない」という存在レベルの命題と「能遍が確立されないとき、所遍は確立されない」という認識レベルの命題のいずれも成り立つ。ここでは、前者ではなく後者として解釈した。nivṛtti という語は、〈停止すること〉〈非存在〉〈消滅すること〉という存在論的な意味だけでなく、〈否定されること〉という認識論的な意味も持っている。一方、ここでは、vyavasthā という語は、〈確立されること〉〈確定されること〉〈区別されること〉という認識論的な意味でしか用いられていない。ここでは、vyavasthā という語の認識論的な意味合いに合わせて、nivṛtti という語も〈否定されること〉を意味すると解釈した。

<sup>6)</sup>vādy adhyava-] TS<sub>CO</sub>S TS<sub>MS</sub>J TS<sub>MS</sub>P; vadyādhyava- TS<sub>BBS</sub>

(17)de] D; do P

[TSP 2814ab.1] **mūlaṃ** prāmāṇyam / tac ca sāpekṣatvenāpahriyate, tasya tadvyāpakaviruddhatvāt / tathā hi nirapekṣatvena prāmāṇyaṃ vyāptam / tac ca kathaṃ svavyāpakaviruddhe sāpekṣatve saty avasthām labheta /

[TSP 2814ab.1] **rtsa ba** ni tshad ma nyid de / de yang ltos<sup>(18)</sup> pa dang bcas pa nyid kyis 'phrog par byed de / de ni de'i khyab par byed pa dang 'gal ba'i phyir ro // 'di ltar ltos pa med pa nyid kyis tshad ma nyid la khyab la / de yang ji ltar rang gis khyab par byed pa dang 'gal ba ltos<sup>(19)</sup> pa dang bcas pa nyid yod pa na gnas pa rnyed par 'gyur //

[TSP 2814ab.1] 「(主張の) 根底」というのは〈真〉のことである<sup>27</sup>。そして、それ(〈真〉)は依存性によって奪い去られる。なぜなら、それ(依存性)はそれ(〈真〉)の能遍(非依存性)と矛盾するからである。すなわち、非依存性によって〈真〉は遍充されている。そして、それ(〈真〉)は、どうして、自らの能遍(非依存性)と矛盾する依存性があるときに確立を得ることができるだろうか。

[TSP 2814cd.0] **yenetyādīnā** prāmāṇyasyānapekṣatvena vyāptim<sup>7)</sup> darśayati /

[TSP 2814cd.0] **gang gis**<sup>(20)</sup> zhes bya ba la sogs pas tshad ma nyid la ltos<sup>(21)</sup> pa med pa nyid kyis khyab par ston par byed pa yin te /

[TSP 2814cd.0] 第 2814 詩節後半で「〈真〉は非依存性によって遍充されている」ということを示している。

[TS 2814cd]

**yena tatsiddhyupāyo 'pi svoktyaivāsya vinaśyati //2814//**

**gang gis ngag gi rang tshig gis //**

**de grub thabs kyang 'jig par byed //**

なぜなら、その(主張)の論証手段までも、他ならぬ(その)自分の(主張)言明によってなくなるからである<sup>28</sup>。

[TSP 2814cd.1] **yeneti yasmād ity arthaḥ /**

[TSP 2814cd.1] **gang gis**<sup>(22)</sup> zhes bya ba ni gang gi phyir gyi don te /

<sup>27</sup>クマーリラは、第 2813 詩節で「根拠」(nibandhana) という語を、第 2814 詩節で「根底」(mūla) という語を用いている。カマラシーラによれば、「根拠」は〈真〉の確立の根拠である非依存性を、「根底」は〈真〉そのものを指示している。「〈認知手段〉の〈真〉は他律的である(依存性を持つ)」という主張は、その主張の〈真〉の確立の根拠である非依存性(根拠)を否定することで、その主張の〈真〉(根底)の確立を奪い去る。

<sup>28</sup>「その論証手段」(tatsiddhyupāya) という表現における「それ」は、〈真〉=根底(mūla)ではなく、「〈真〉は他律的である」という主張(pakṣa)を指示していると解釈するのが自然である。この文脈に限っては、基本的に、√sidh や √sādha という動詞語根は主張に関して、vi-ava/√sthā という動詞語根は〈真〉に関して用いられていると想定する。その場合、「論証手段」(siddhyupāya) という語は、〈真〉の他律性を論証する証因(sādhanaḥetu)、すなわち、直後の第 2815 詩節後半の「その〔主張の〕証因が確立されていない」(anavasthitahetu) という表現の「証因」(hetu) の指示対象を指示していると考えてよいだろう。

<sup>7)</sup>vyāptim] TSP<sub>GOS</sub> TSP<sub>msP</sub>; prāptim TSP<sub>BBS</sub> TSP<sub>msJ</sub>

<sup>(18)</sup>ltos] D; bltos P

<sup>(19)</sup>ltos] D; bltos P

<sup>(20)</sup>gis] D; gi P

<sup>(21)</sup>ltos] D; bltos P

<sup>(22)</sup>gis] D; gi P

[TSP 2814cd.1] **yena** という語は「なぜなら」(yasmāt) ということの意味している。

[TSP 2815ab.0] **kathaṃ vinaśyātīty āha sāpekṣaṃ hīti /**

[TSP 2815ab.0] **ji ltar 'jog par byed ce na / Itos<sup>(23)</sup> pa dang bcas zhes smos te /**

[TSP 2815ab.0] 「どうして〔その論証手段が〕なくなるのか」ということを〔クマーリラは〕第 2815 詩節前半で述べている。

[TS 2815ab]

**sāpekṣaṃ hi pramāṇatvaṃ na vyavasthāpyate kvacit /**

**ltos pa dang bcas tshad nyid ni //**

**la lar yang ni gzhan<sup>(24)</sup> byas min //**

実に、〈真〉は、他に依存しているとするならば、どの（主張）においても確立されることはない。

[TSP 2815ab.1] **na vyavasthāpyata** ity anavasthā syāt /

[TSP 2815ab.1] **rnam par gzhaḡ<sup>(25)</sup> bya min** zhes bya ba ni thug pa med par thal bar 'gyur ba'i phyir ro //

[TSP 2815ab.1] 「**確立されることはない**」というのは、無限連鎖が起ってしまうだろうということである。

[TSP 2815cd.0] bhavatv anavasthādoṣa ity āha **anavasthitahetur** ityādi /

[TSP 2815cd.0] **thug pa med pa yin pa la rag mod ci nyes she na / thug pa med pa'i gtan tshigs can** zhes bya ba la sogs pa smos te /

[TSP 2815cd.0] 【反論】無限連鎖の問題が起こるなら起こればいい。

【回答】以上のような反論を想定して、〔クマーリラは〕第 2815 詩節後半を述べている。

[TS 2815cd]

**anavasthitahetuś ca kaḡ sādhyam sādhyaiṣyati //2815//**

**gtan tshigs thug pa med pa yis //**

**bsgrub bya su zhig sgrub<sup>(26)</sup> par byed //**

そして、（自分の主張の）証因が確立されていないにもかかわらず、誰が論証対象を論証する（ことができる）だろうか<sup>29</sup>。

<sup>29</sup> 『タットヴァサングラハ』第 2813 詩節から第 2815 詩節で、クマーリラは、「〈認知手段〉の〈真〉は他律的である」という主張が成立しない理由として、無限連鎖の問題が帰結するせいで、その主張自体を推理によって証明することができないことを指摘している。それは、他律的真理論の論書を書くこと自体が自己矛盾だという皮肉な批判になっている。

Cf. ŚV codanā 81: na cānūmānataḡ sādhyā śabdādīnām pramāṇatā / sarvasyaiva hi mā prāpat pramāṇāntarasādhyatā // （「そして、推理を通じて言葉を始めとする〔〈認知手段〉〕の〈真〉を確立することはできない。なぜなら、全て〔の〈認知手段〉の〈真〉〕が残らず他の〈認知手段〉によって確立されるということが結果してはならないからである」）

<sup>(23)</sup>ltos] D; bltos P

<sup>(24)</sup>gzhaḡ] P; gzhan D

<sup>(25)</sup>gzhaḡ] D; bzhaḡ P

<sup>(26)</sup>bsgrub] D; sgrub P



[TSP 2815cd.1] **anavasthito** 'pariniścito **hetur yasya** vādinaḥ sa tathoktaḥ / etad uktaṃ bhavati / jñāto hi jñāpako jñāpyam<sup>8)</sup> arthaṃ jñāpayati, na sattāmātreṇa / tataś ca vādī svayam eva tāvad apratipannaḥ kathaṃ parapatipādanāya sādhanam upādāsyate //

[TSP 2815cd.1] **thug pa med pa** ste ma nges pa'i **gtan tshigs gang la yod pa** de la de skad ces bya'o // 'di skad du bstan pa yin te / shes par byed pa shes pa ni shes par bya ba'i don shes par byed kyī yod pa tsam gyis ni ma yin no // de lta yin dang re zhiḡ rgol ba rang nyid ma rtogs par ji ltar gzhan rtogs par bya ba'i don du sgrub par byed pa len par byed //

[TSP 2815cd.1] 「その（主張の）証因が」、「**確立されていない**」、確定されていない（apariniścita）主張者がそのように **anavasthitahetu** と表現されている。〔この表現によって〕次のことが意図されている。認識させる〔根拠〕は、認識されたときに〔のみ〕、認識対象を認識させるのであり、存在しているだけで〔対象を認識させる〕ということはない。そして、そのことから、主張者は、まずもって〔証因を〕自分が理解していないにもかかわらず、どうして、他人に理解させるために〔その〕証因を述べる〔ことができる〕だろうか。

### 1.3 シャーンタラクシタによるクマーリラ批判

#### 1.3.1 〈真〉の成立の自律性の主張に対する批判

1.3.1.1 (A) 「本性的」(*svābhāvika*) という語によって〈常住〉(*nitya*) 或いは〈無原因〉(*ahetuka*) が意図されている場合

1.3.1.1.1 (1) 「能力が能力保持者と異なる」という見解 (*avyatirekapakṣa*)

##### 1.3.1.1.1.1 見解 (1) の論証

[TSP 2816.0] **ity evam** ityādinā dūṣaṇam ārabhate /

[TSP 2816.0] **de lta'i don ni** zhes bya ba la sogs pas sun 'byin pa rtsom par byed de /

[TSP 2816.0] 〔シャーンタラクシタは〕第 2816 詩節で〔クマーリラの上記の主張に対して〕批判を開始している。

[TS 2816]

**ity evam** iṣyate 'rthaś cen nanu cāvvyatirekiṇī /

**śaktiḥ sarvapaḍārthānāṃ purastād upapādītā //2816//**

**de lta'i don ni** 'dod ce na //

**dngos po thams cad dag la ni //**

**nus pa tha mi dad pa can //**

**sngar bsgrubs byas zin ma yin nam //**

そして、もし（あなたが「全ての〈認知手段〉の〈真〉は自律的である」という主張の）意味を以上のようなものとして認めているとすれば、「全ての実在者の能力は（それらの実在者と）異なる（*avyatirekin*）」ということを以前に証明したではないか<sup>30</sup>。

<sup>30</sup>シャーンタラクシタは、『タットヴァサングラハ』第 19 章「他の〈認知手段〉の検討」（*pramāṇāntaraparīkṣā*）第

<sup>8)</sup>jñāpyam] TSPms<sub>J</sub>; vyāpyam TSP<sub>BBS</sub> TSP<sub>GOS</sub> TSPms<sub>P</sub>

## カマラシーラの補遺 K2 シャーンタラクシタの議論の流れの説明

### K 2.1 「本性的」という語の意図の二つの可能性

[TSP 2816.1] tatra svābhāvīkī ko 'rtho 'bhipretāḥ / kiṃ nityatvena nirhetukatvāt svābhāvīkī, āhosvid anityāpi satī svahetubhyo jñānānām svabhāvaniṣpattikāla eva bhavati, na tūttarakālaṃ hetvantareṇādhīyata iti kṛtvā svābhāvīkī vikālpadvayam /

[TSP 2816.1] de la rang bzhin zhes bya ba'i don ci yin par 'dod / ci rtag pa nyid kyis rgyu med pa'i phyir rang bzhin can yin nam / 'on te mi rtag pa yin na yang rang gi rgyu dag las shes pa rnams kyis rang bzhin can grub pa'i dus kho nar 'byung ba yin gyi dus phyis rgyu gzhan gyis<sup>(27)</sup> byas pa ma yin pa'i phyir rang bzhin can yin zhes bya bar nam par rtag pa gnyis pas so //

[TSP 2816.1] 上記〔の主張〕において、「本性的」（svābhāvika）という〔語によって、クマーリラは〕どのような意味を意図しているのだろうか<sup>31</sup>。

(A) 〔能力は〕常住なので原因を持たないから本性的である。

或いは、

(B) 〔能力は、〕無常であるとしても、認識の本質が実現する時間において、〔認識〕自体の原因を通じて生じるのであって、〔認識の本質の実現より〕後の時間において、〔認識自体の原因とは異なる〕他の原因によって〔認識に〕与えられるのではない。

以上のようにして、「本性的」という〔語の意味〕に二つの選択肢が想定される<sup>32</sup>。

### K 2.2 能力と能力保持者の関係の四つの可能性

[TSP 2816.2] tatra na tāvad ādyo vikālpāḥ / tathā hi sā vyatirikṭā vā bhaved avyatirikṭā vā yadvā ubhayā-nubhayasvabhāveti catvāraḥ pakṣāḥ / tatra na tāvad ādyaḥ, sambandhāsiddheḥ padārthasyākāratvaprasaṅgāc cetyādīnā sarvapadārthānām avyatiriktaiḥ śaktir iti bahuśaḥ pratipāditavāt //

[TSP 2816.2] de la re zhiḡ rnam par rtag pa dang po ni ma yin te / de tha dad pa yin nam / tha mi dad pa yin / yang na gnyi<sup>(28)</sup> ga'am / gnyi ga ma yin pa'i rang bzhin can yin zhes bya ba<sup>(29)</sup> phyogs rnam pa bzhi'o // de la re zhiḡ dang po ni ma yin te / 'brel pa ma grub pa'i phyir dang / dngos po med pa ma yin

1606 詩節から第 1618 詩節まで、及び、第 23 章「言葉の検討」（śrutiparīkṣā）第 2514 詩節で、能力は能力保持者と異なるということをも主張している。そのことを指して述べている。

<sup>31</sup> 『タットヴァサングラハ』第 2812 詩節前半におけるクマーリラの主張の意味が問われている。

TS 2812: meyabodhādike śaktir teṣāṃ svābhāvīkī sthitā / （「それら（認知手段）」に属する〈認知対象を理解させる能力〉などは**本性的なものとして**成立している）」

<sup>32</sup> カマラシーラによれば、シャーンタラクシタは、「本性的」（svābhāvika）という語の意味について、次のような場合分けをした上で批判していることになる。

- (A) 〈常住で原因を持たないということ〉を意味するとした場合
- (A-1) 能力が能力保持者と異なる場合（TS 2816–2817, 2824–2825）
- (A-2) 能力が能力保持者と異なる場合（TS 2818–2822）
- (A-3) 能力が能力保持者と異なりかつ異なる場合（TS 2823–2825）
- (A-4) 能力が能力保持者と異なるのでもなく異なるのでもない場合（TS 2823–2825）
- (B) 〈能力保持者の原因から能力保持者と同時に生じるということ〉を意味するとした場合（TS 2826–2845）

<sup>(27)</sup> gyis] D; gyi P

<sup>(28)</sup> gnyi] D; gnyis P

<sup>(29)</sup> ba] D; bar P

par thal bar 'gyur ba'i phyir ro zhes bya ba la sogs pas dngos po thams cad kyi nus pa nyid ni tha mi dad  
pa yin no<sup>(30)</sup> zhes nam pa mang<sup>(31)</sup> du bstan zin pa'i phyir ro //

[TSP 2816.2] それらのうち、まず、最初の選択肢 (A) はない。すなわち、可能性として (bhavet)、

(A-1) それ (能力) は〔能力保持者 (事物) と〕異なる (vyatirikta)。

(A-2) 〔能力は能力保持者と〕異なる (avyatirikta)。

(A-3) 〔能力は〕両方を本質とする (ubhavyasvabhāva)。(能力は能力保持者と異なり、かつ、異なる)。

(A-4) 〔能力は〕両方を本質としない (anubhayasvabhāva)。(能力は能力保持者と異なるのでも異なるのではない)。

以上の四つの見解 (pakṣa) がある<sup>33</sup>。それらのうち、まず、最初の見解 (A-1) 「能力は能力保持者と異なる」はない。なぜなら、「〔能力保持者の能力との〕関係が成立しないから」「実在者 (能力保持者) が実現者ではなくなってしまうから」などの理由によって、「全ての実在者たちの能力は〔それらの実在者と〕異なる」ということを既に何度も説明したからである<sup>34</sup>。

[TSP 2817.0] etad eva sūcayann āha iṣṭetyādi /

[TSP 2817.0] 'di nyid bstan par bya ba'i phyir / 'dod pa'i 'bras bu zhes bya ba la sogs pa smos te /

[TSP 2817.0] まさに以上のことを示唆するために〔シャーンタラクシタは〕第 2817 詩節を述べている。

[TS 2817]

**iṣṭakāryasamarthaṃ hi svarūpaṃ śaktir ucyate /**

**tasya bhāvātmatābhāve<sup>9)</sup> bhāvo na syāt sa kārakaḥ //2817//**

**gang phyir 'dod 'bras nus pa can //**

**rang bzhin nus pa med ces<sup>(32)</sup> brjod //**

<sup>33</sup>これ以降、(A) 「能力は常住なので原因を持たないから本性的である」という選択肢が、謂ゆる四句否定によって否定される。

<sup>34</sup>カマラシーラは、(1) 能力保持者の能力との関係の不成立、(2) 能力保持者の非実現者化・非実在化、(3) 無限連鎖という三つの帰謬によって、「能力は能力保持者と異なる」という見解を否定することで、「能力は能力保持者と異なる」ということを証明している。

TSP on TS 2514 (827: 15–20): śakter bhāvād vyatireke 'bhyupagamamāne tasyāsau śaktir iti sambandho na syāt , anupakāryasya pāraṅtryāyogāt / na ca\* śrotraṃ śaktim upakaroti, vyañjakasyaiva nādāder upakāratkveṣṭhatvāt / atha śrotrasyāpy upakāratkvaṃ tadā śaktyupakāriṇyā api śakteḥ śrotrād vyatireka ity anavasthā syāt / tatas ca śaktinām eva paramparayā ghaṭanāc chakter eva kāryotpatteḥ śrotrasyākāratkvaṃ syāt / tatas cāvastutvaprasaṅgaḥ / \*na ca] em.; atha TSP<sub>BBS</sub> TSPms<sub>J</sub> TSPms<sub>P</sub>; atha (na ca?) TSP<sub>GOS</sub> (「能力は存在者と異なるということを承認するなら、「存在者 X にはその能力 Y がある」というように〔第 6 格接辞が表示する〈X と Y の〉関係〕はあり得ない。なぜなら、扶助され得ない者が他に依存することはあり得ないからである。そして、聴覚器官が能力を扶助することはない。なぜなら、〔言葉を〕顕現させる音声などこそが扶助者として認められているからである。もし聴覚器官も扶助者であるとするならば、その場合、能力を扶助する能力も聴覚器官と異なるのだから、無限連鎖が起こってしまうだろう。そして、それゆえに、能力こそが間接的に作り出すのだから、能力からこそ結果が生じることになるのだから、聴覚器官は実現者ではなくなってしまうだろう。そして、それゆえに、〔聴覚器官は〕非実在者になってしまう) )

<sup>9)</sup>-tmatā-] TS<sub>GOS</sub>; -tmanā- TS<sub>BBS</sub> TSms<sub>J</sub> TSms<sub>P</sub>

<sup>(30)</sup>no] D; om. P

<sup>(31)</sup>mang] D; med P

<sup>(32)</sup>ces] D; zhes P

de dag dngos bdag nyid min na //

dngos de byed pa por mi 'gyur //

実に、望ましい結果を生み出すことができる本質が「能力」と呼ばれている。その（本質）が存在者の本性ではないとするならば、その存在者は実現者にはなりえない<sup>35</sup>。

[TSP 2817.1] kāryakaraṇasamartho hi svabhāvaḥ śaktiḥ<sup>10)</sup> / tasya ca svabhāvasya bhāvātmatāyā abhāve sati sa bhāvaḥ kāraṇo na syāt / tataś cāsyāvastutvaprasaṅga iti bhāvaḥ //

[TSP 2817.1] 'bras bu byed pa'i rgyu ni nus pa yin te / rang bzhin de yang dngos po'i bdag nyid du med pa na dngos po de byed pa por mi 'gyur ro // de lta yin dang 'di dngos po med pa nyid du thal bar 'gyur ro snyam du bsams pa yin no //

[TSP 2817.1] 実に、能力とは、結果を生み出すことができる本性のことである。そして、その本性が存在者の本質でないとするならば、その存在者は実現者になりえない。そして、そのことから、これ（存在者）は非実在者になってしまうだろう<sup>36</sup>。以上のことが〔この詩節の〕意味の根底にある。

### 1.3.1.1.2 能力は無常であるので原因を有する

[TSP 2818.0] athāvyatirikteti pakṣaḥ, tadā svābhāvikī na syāt, arthasya hetubalabhāvitvenānityatvāt tadavyatiriktāyā api śakter hetubalabhāvitvenānityatāprasāṅgāt / anyathā hi bhinnayogakṣematvād abhedo na syāt / etad evāha sā cānityedṛṣṭiyādi //

[TSP 2818.0] ci ste tha mi dad do zhes bya ba'i phyogs yin na / de'i tshe rang bzhin can du mi 'gyur te / don rgyu'i stobs kyis 'byung ba nyid kyis mi rtag pa nyid kyi phyir de dang tha mi dad pa'i nus pa nams kyang rgyu'i stobs kyis byung ba nyid kyis<sup>(33)</sup> mi rtag pa nyid du thal bar 'gyur ba'i phyir ro // de lta ma yin na grub pa dang bde ba tha dad pa nyid kyi<sup>(34)</sup> phyir tha mi dad par mi 'gyur ro // de nyid ni rang rgyu'i<sup>(35)</sup> stobs las byung ba can zhes bya ba la sogs pa smos pa'o //

[TSP 2818.0] またもし (A-2) 「〔能力は事物と〕異ならない」という見解を取るならば、その場合、〔能力が〕本性的であるということはある得ない。なぜなら、事物は原因の力によって生じるので無常であるのだから、それ（事物）と異ならない能力も、原因の力によって生じることになるので無常であることになってしまうからである。というのは、そうでなければ、運命を異にするこ

<sup>35</sup>TS 1609: arthakriyāsamarthaḥ hi svarūpaḥ śaktilakṣaṇam / evamātmā ca bhāvo 'yaṃ pratyakṣād vyavasīyate // （「なぜなら、〈効果的作用を作り出すことができる本質〉が〈能力の定義〉であり、そして、このような本質を持つこの存在者は、知覚を通じて判断されるからである」）

TS 2514: vyatireke tu tasyeti sambandho nopapadyate / śrotrasyākāraṇatvaṃ ca śakter jñānasamudbhavāt // （「一方、〔能力が存在者と〕異なるとすれば、「それ（存在者）には〔能力〕がある」という関係は妥当しない。そして、聴覚器官が実現者になってしまう。なぜなら、〔聴覚器官を通じてではなく〕能力を通じて認識が生じるからである」）

<sup>36</sup>「実現者」（kāraṇa）とは、〈効果的作用を作り出すもの〉のことである。「実現者でなければ非実在者になってしまう」とは、ダルマキールティの〈実在者の定義〉に基づく説明である。

HB (4: 1-2): arthakriyāyogyalakṣaṇatvād vastuṇaḥ / （「実在者は効果的作用を作り出すことができるものの特徴としているから」）

TS 1737: arthakriyāsamarthatvaṃ vastutvam abhidhīyate / （「効果的作用を作り出すことができることが「実在性」と呼ばれている」）

<sup>10)</sup>-karaṇasamartho hi svabhāvaḥ śaktiḥ] TSPms<sub>J</sub>; -karaṇasamarthā hi svabhāvaśaktiḥ TSP<sub>BBS</sub> TSP<sub>GOs</sub>; -karaṇasamarthā hi svabhāvaśaktiḥ TSPms<sub>P</sub>

<sup>(33)</sup>kyis] D; kyi P

<sup>(34)</sup>kyi] D; kyis P

<sup>(35)</sup>rgyu'i] D; rgyud P

とになるので、(A-2)「〔能力は事物と〕異なる」ということはなくなってしまうからである。まさに以上のことを〔シャーンタラクシタは〕第 2818 詩節で述べている。

[TS 2818]

sā cānityedṛṣī śaktiḥ svahetubalabhāvinī /  
svābhāvīkī pramāṇānām yuṣmābhiḥ katham iṣyate //2818//

rang rgyu'i stobs las byung ba can //

de yang mi rtag de 'dra ba'i //

nus pa tshad ma dag la ni //

rang bzhin gyis ni yod pa ru //

khyed cag ji ltar 'dod pa yin //

そして、上記のこのような能力は無常なので自らの原因の力によって生じるのだから、あなたたち（バツタ派）は、どうして（その能力は）〈認知手段〉にとって本性的であると認める（ことができる）だろうか。

#### 1.3.1.1.1.2. 帰謬法：能力が本性的（＝常住・無原因）である場合の帰結

[TSP 2819.0] kiṃ ca pramāṇānām śaktyavyatirekāc chaktisvarūpavan nityatvāhetutvaprasaṅga iti darśayann āha svābhāvīkyām hītyādi //

[TSP 2819.0] gzhan yang tshad ma rnam las nus pa tha mi dad pa'i phyir ro / nus pa'i rang gi ngo bo bzhin du rtag pa nyid dang rgyu med pa nyid du 'gyur ro zhes bstan pa'i phyir **nus pa'i rang bzhin can yin no** zhes bya ba la sogs pa smos so //

[TSP 2819.0] そしてまた、〈認知手段〉は、能力と異なるのだから、能力自体と同じように、常住であり原因を持たないことになってしまう。以上のことを示すために〔シャーンタラクシタは〕第 2819 詩節を述べている。

[TS 2819]

svābhāvīkyām hi śaktau syān nityatāhetutāthavā /  
pramāṇānām ca tādātmyān nityatāhetute dhruvam //2819//

nus pa rang bzhin can yin na //

rtag pa'am ni rgyu med 'gyur //

de bdag nyid phyir tshad ma yang //

rtag pa nyid dang rgyu med yin //

実に、能力が本性的であるとするならば、（能力は）常住であるか、或いは、原因を持たないことになるだろう。そして、〈認知手段〉も、それ（能力）を本質としているのだから、必然的に常住であるか原因を持たないことになる。

[TSP 2820ab.0] tataś ca ko doṣa ity āha sadābhāva ityādi /



[TSP 2820ab.0] de lta yin dang skyon ci yod ce na / **rgyu med gzhan la mi ltos**<sup>(36)</sup> **phyir** zhes bya ba la sogs pa smos te /

[TSP 2820ab.0] そして、「そのことから、どのような問題が起きるのか」ということを〔シャーンタラクシタは〕第 2820 詩節前半で述べている。

[TS 2820ab]

sadābhāvo 'thavābhāvo 'hetutve 'py anapekṣaṇāt /

rgyu med gzhan la mi ltos phyir //

rtaḡ tu yod pa'am med par 'gyur //

仮に（〔認知手段〕が）原因を持たないとした場合でも、（それは、）常に存在するか（全く）存在しないかのいずれかである。なぜなら、他に依存していないからである。

[TSP 2820ab.1] ahetutve sadābhāvo 'bhāvo vā / nityatve tu sadābhāvo 'nuktasiddha<sup>11)</sup> eveti noktaḡ /

[TSP 2820ab.1] **rgyu med pa nyid yin na rtaḡ tu med pa'am yod pa yin la** / rtaḡ pa nyid yin na ni rtaḡ tu yod pa ma brjod kyang grub pa nyid kyi phyir ma bstan to //

[TSP 2820ab.1] 〔仮に（認知手段）が〕原因を持たないとするならば、（それは、）常に存在しているか、（全く）存在しないかのいずれかである。一方、「〔〔認知手段〕が〕常住であるとするならば、〔それは〕常に存在することになる」ということは、言うまでもなく必ず成立するから、〔シャーンタラクシタはここで〕述べなかったのである。

[TSP 2820cd–2821.0] aparam api prasaṅgam āha **ata** ityādi /

[TSP 2820cd–2821.0] thal bar 'gyur ba gzhan yang bshad pa ni **de phyir** zhes bya ba la sogs pa ste /

[TSP 2820cd–2821.0] もう一つの問題の帰結についても〔シャーンタラクシタは〕第 2820 詩節後半と第 2821 詩節で述べている。

[TS 2820cd–2821]

ataḡ kāryaṃ tadāyattaṃ kādācitkaṃ na yujyate //2820//

dr̥śyate ca pramāṇānāṃ svarūpaṃ kāryam eva ca /

kādācitkaṃ ataḡ śaktir yuktā svābhāvikī na vaḡ //2821//

des na der rag las 'bras bu //

res 'ga' ba ni rigs pa min //

tshad ma rnam kyī rang bzhin dang //

'bras bu nyid ni res 'ga' bar<sup>(37)</sup> //

snang rung des na nus pa yis //

rang bzhin can khyed la mi rigs //

<sup>11)</sup>nuktasiddha] TSP<sub>ms</sub>J TSP<sub>ms</sub>P; 'nuktaḡ siddha TSP<sub>BBS</sub>; 'nu(kto 'pi) TSP<sub>GOS</sub>

<sup>(36)</sup>ltos] D; bltos P

<sup>(37)</sup>bar] D; par P

このことから、(常住であるか、或いは、全く存在していない) それら (〈認知手段〉) に依存している故に、(それらの) 結果 (認知対象の理解など) が一時的であるということは不合理である。しかし、「〈認知手段〉の本質と結果は一時的である」ということが現に経験される。このことから、あなたたち (バッタ派) にとって、能力は本性的であるということ是不合理である。

[TSP 2820cd–2821.1] **tadāyattam** iti pramāṇāyattam / etena yathāyogaṃ pratyakṣānumānavirodhau pratijñāyā darśitau / tathā hi pramāṇānām svarūpaṃ kādācitkaṃ pratyakṣata eva siddham / anumānato 'pi kāryakramato 'numitam / tatas' ca tasya nityatvābhyupagamaḥ sphuṭataram eva pramāṇābhyām bādhyata iti //

[TSP 2820cd–2821.1] **de la rag las**<sup>(38)</sup> zhes bya ba ni tshad ma la rag las pa'o // 'dis ni dam bca' ba mngon sum dang rjes su dpag pa'i don dang 'gal bar bstan pa yin te / 'di ltar tshad ma rnams kyis rang bzhin res 'ga' bar mngon sum nyid kyis<sup>(39)</sup> grub pa yin la / 'bras bu rim can dpog pa'i rjes su dpag pas kyang yin te / de lta yin dang de rtag pa nyid du khas len pa la tshad ma gnyis<sup>(40)</sup> kyis rab tu gnod pa yin no //

[TSP 2820cd–2821.1] 「それらに依存する」というのは「〈認知手段〉に依存する」ということである。これ (第 2820 詩節後半と第 2821 詩節) によって、適宜、[「全ての〈認知手段〉の〈真〉は自律的である」という] 主張 (pratijñā) には、〈知覚との矛盾〉 (pratyakṣavirodha)、及び、〈推理との矛盾〉 (anumānavirodha) [という欠陥] があることが示されている<sup>37</sup>。すなわち、〈認知手段〉の本質は一時的であるということは、まさに知覚に基づいて確立される。推理に基づいても、[〈認知手段〉の本質は一時的であるということは、] 結果のあり方を通じて推理される。そして、そのことから、それ (〈認知手段〉の本質) の常住性という承認事項は、非常に明瞭な形で [知覚と推理という] 二つの〈認知手段〉によって反証される。

### 1.3.1.1.2.3 帰謬法の根拠：常住なる事物の顕現と〈自らとは異なる原因への依存〉の否定

[TSP 2822.0] **pramāṇānām** ityādinā parasya yathoktaprasaṅgadvayasamarthanopāyam āśaṅkate /

[TSP 2822.0] **tshad ma rnams kyi rang bzhin ni** zhes bya ba la sogs pas gzhan dag ji skad du bshad pa'i thal bar 'gyur ba gnyis mi 'jug par sgrub par byed pa'i thabs dogs par byed de /

[TSP 2822.0] 第 2822 詩節で [シャーンタラクシタは、] 対論者 (クマーリラ) の上述の通りの二つの問題の帰結を〈合理化によって回避する論法〉 (samarthanopāya) を想定している<sup>38</sup>。

#### [TS 2822]

<sup>37</sup> 自律的真理論の主張が擬似的主張 (pakṣabhāsa) であることが示されている。

<sup>38</sup> 直前の『タットヴァサングラハ』第 2820 詩節と第 2820 詩節では、「〈真〉は本性的である (原因を持たない)」という主張を仮に承認した場合に、経験に反する二つの事柄、すなわち、(1) 〈認知手段〉が常住であるか全く存在しないということ、及び、(2) 〈認知手段〉の結果が常住であるか全く存在しないということが帰結することが示された。それらの帰結を回避しようとして、〈認知手段〉と結果が一時的に経験されることをうまく説明するために、音素の常住性を証明する際に用いられる顕現理論、及び、結果の一時的性を説明する常套手段である扶助理論を〈認知手段〉にも適用する可能性を想定している。音素と同様に、〈認知手段〉は、常に存在しているが、普段は隠れた状態にあり、一時的に現れた状態になる。また、〈認知手段〉は、共働因が揃ったときにのみ結果を生じさせる。すなわち、〈認知手段〉はその顕現が一時的であり、その結果はその存在が一時的である。このようにして、その両者が経験的に一時的にしか認識されないという事実は、一応は説明がつく。

<sup>(38)</sup> las] D; las pas P

<sup>(39)</sup> kyis] D; kyi P

<sup>(40)</sup> gnyis] D; nyid P

**pramāṇānāṃ svarūpaṃ ced vyañjakair vyaktam iḥṣyate<sup>12)</sup> /**

**pratyañtarasāpekṣaṃ kāryam ārabhate ca tat //2822//**

**tshad ma rnamṣ kyī rang dngos ni //**

**gsal byed kyīs gsal snang bas na<sup>(41)</sup> //**

**skyon gzhan la ni ltos nas ni //**

**de 'bras rtsom par byed ce na //**

【反論】〈認知手段〉の本質は、（常住であり、）顕現させる者によって顕現させられたときに（のみ）認識される。そして、それ（〈認知手段〉の本質）は、別の原因に依存して結果を形成する。

[TSP 2822.1] yadā hi vyañjakaiḥ pramāṇasvarūpaṃ vyajyate, tadā tad upalabhyate, nānyadeti / tena saty api nityatve na sarvadopalabdhiprasaṅgaḥ / nāpi kāryasya sadāsadbhāvaprasaṅgaḥ, kāraṇāntarāpekṣasya kāryārambhakatvābhyupagamāt, na kevalasya<sup>13)</sup> / tena kāraṇāntarasamnidhānāsamnidhānābhyāṃ kāryasya kādācitkatā bhavatīti bhāvāḥ //

[TSP 2822.1] gang gi tshe gsal bar byed pa rnamṣ kyīs tshad ma'i rang gi ngo bo gsal bar byas pa de'i tshe de dmigs par 'gyur gyi / gzhan du ni ma yin pas de'i phyir rtag pa nyid yin na yang thams cad du dmigs par thal bar mi 'gyur la 'bras bu rtag tu yod par thal bar 'gyur ba'ang ma yin no // rgyu gzhan la ltos<sup>(42)</sup> pa nyid 'bras bu rtsom pa nyid du khas len pa'i phyir 'ba' zhiḡ pa ni ma yin te / des na rgyu gzhan nye ba dang mi nye ba dag las 'bras bu res 'ga' ba nyid du 'gyur ba yin no snyam du bsams pa yin no //

[TSP 2822.1] 【反論】 実に、顕現させる者によって〈認知手段〉の本質が顕現させられるときに〔のみ〕、それ（〈認知手段〉の本質）は認識されるのであり、それ以外のときには〔認識され〕ない。したがって、〔〈認知手段〉の本質は、〕常住であるとしても、常に認識されることになってしまうということはない。また、〔〈認知手段〉の〕結果が常に存在することになってしまうということもない。なぜなら、〔〈認知手段〉は、〕単独で〔結果を形成するの〕ではなく、別の原因に依存して結果を形成するということが認められているからである。したがって、別の原因が傍にあるか傍にないか（samnidhānāsamnidhāna）ということによって、〔〈認知手段〉の〕結果は一時的にしか存在しないことになる。以上が〔第 2822 詩節の〕意味の根底にある。

[TSP 2823.0] **vyaktīyādīnā pratividhatte /**

[TSP 2823.0] **rtag pa'i dngos po'i zhes bya ba la sogs pas len 'debs par byed de /**

[TSP 2823.0] 第 2823 詩節で〔シャーンタラクシタは〕回答している。

[TS 2823]

**vyaktihetvantarāpekṣe vyaste nityasya vastunaḥ /**

**tasmāt tadrūpakāryāṇāṃ nityaṃ syād upalambhanam //2823//**

**rtag dngos la ni gsal ba dang //**

<sup>12)</sup>iḥṣyate] TSms<sub>J</sub> TSms<sub>P</sub>; iḥṣate TS<sub>BBS</sub>; aśnute TS<sub>GOŚ</sub>

<sup>13)</sup>kevalasya] TSP<sub>BBS</sub> TSP<sub>GOŚ</sub> TSP<sub>ms<sub>J</sub></sub>; kevalam asya TSP<sub>ms<sub>P</sub></sub>

<sup>(41)</sup>na] D; ni P

<sup>(42)</sup>ltos] D; bltos P

rgyu gzhan la ni ltos<sup>(43)</sup> pa spangs //

de phyir de yi ngo bo dang //

'bras bu rtag tu dmigs par 'gyur //

【回答】常住の实在者が顕現すること、及び、(常住の实在者が) 別の原因に依存することは既に否定している。それゆえに、それら (〈認知手段〉) の本質と結果は、常に認識されることになってしまうだろう。

[TSP 2823.1] vyaktiś ca hetvantarāpekṣā ceti **vyaktihetvantarāpekṣe** / pūrvaṃ hi śrutipārīkṣāyāṃ vista-  
reṇa vyaktir nityasya nirastā / hetvantarāpekṣā cānupakāryasyāyukteti pratipāditam / **tadrūpakāryāṇām**  
iti / **teṣāṃ** pramāṇānām **rūpakāryāṇi** / **rūpaṃ** svabhāvaḥ /

[TSP 2823.1] **gsal ba dang rgyu gzhan la ltos**<sup>(44)</sup> **pa** ni gsal ba dang rgyu gzhan la ltos<sup>(45)</sup> pa dag go //  
sngar thos pa brtag par rgyas par rtag pa'i gsal ba bkag zin la / rgyu gzhan la ltos<sup>(46)</sup> pa yang phan gdags  
par bya ba ma yin pa la rigs<sup>(47)</sup> pa ma yin no zhes bstan zin to // **de'i phyir de yi ngo bo dang** zhes bya  
ba la tshad ma dag gi **ngo bo dang 'bras bu ste / ngo bo** ni rang bzhin no //

[TSP 2823.1] **vyaktihetvantarāpekṣa** という語はドヴァンドヴァ複合語である。実に、以前に「言葉の考察」章において、常住の事物が顕現するというを詳細に否定した<sup>39</sup>。そして、扶助され得ない者 (他の扶助を必要にしないもの) が別の原因に依存するというは不合理であるということは既に説明した。「それらの本質と結果は」について。「それらの」、〈認知手段〉の、「**本質と結果**」。**本質** (rūpa) とは本性 (svabhāva) のことである。

[TSP 2823.2] ubhayapakṣas tu virodhād yathoktapakṣadvayabhāvīdoṣaprasaṅgāc ca<sup>14)</sup> na yuktaḥ / nāpy  
anubhayapakṣaḥ, parasparavyavacchedarūpāṇām ekaṇiṣedhasyāparavidhināntarīyakatvāt / na tadānīm  
eva vihitasya niṣedho yuktaḥ, ekatra vidhipratīṣedhayor virodhād iti bhāvaḥ / sphuṭataratvāt dūṣaṇasyetan<sup>15)</sup>  
noktam //

[TSP 2823.2] gnyi ga'i phyogs ni 'gal ba'i phyir dang ji skad du bshad pa'i phyogs gnyi ga la yod pa'i  
skyon du thal bar 'gyur ba'i rigs pa ma yin no // gnyi ga ma yin pa'i phyogs kyang ma yin te / phan tshun  
rnam par gcod pa'i ngo bo de dag ni gcig dgag pa gzhan sgrub<sup>(48)</sup> pa med na mi 'byung ba yin pa'i phyir  
ro // de nyid kyi tshe dgag pa ni rigs pa ma yin te / gcig la sgrub pa dang dgag pa dag 'gal ba'i phyir ro  
snyam du bsams pa yin no // sun 'byin pa shin tu gsal ba'i phyir ma brjod do //

[TSP 2823.2] 一方、両方であるという見解は、〔能力が認識と異なることと異なることとは〕矛盾するから<sup>40</sup>、また、上述の通りの二つの見解に存在する問題が起こってしまうから、不合理である。また、両方でないという見解も不〔合理である〕。なぜなら、相互に排除し合う本質のうち、

<sup>39</sup>TS 2493 (821: 5–6): na ca vyañjakasadbhāvo yukto nitye viśeṣataḥ / tatsaṃskārānukāreṇa nāto bhinnā dhiyo dhvanau // (「そして、それ (顕現させる者) の扶助に基づく [常住な事物の] 特殊性を通じて常住な事物を顕現させる者が存在するというは合理的ではない。このことから、[一つの] 音声について異なる複数の認識が生じることはない」)

<sup>40</sup>矛盾律による否定。

<sup>14)</sup>-saṅgāc ca] TSPms<sub>J</sub>; -saṅgān TSP<sub>BBS</sub> TSP<sub>GOS</sub>; -saṅgā TSPms<sub>P</sub>

<sup>15)</sup>dūṣaṇasyaitan] TSP<sub>BBS</sub> TSP<sub>GOS</sub>; dūṣaṇasyeti TSPms<sub>J</sub> TSPms<sub>P</sub>

<sup>(43)</sup>[tos] D; bltos P

<sup>(44)</sup>[tos] D; bltos P

<sup>(45)</sup>[tos] D; bltos P

<sup>(46)</sup>[tos] D; bltos P

<sup>(47)</sup>rigs] P; rig D

<sup>(48)</sup>sgrub] D; bsgrub P

一方〔の本質〕の否定は他方〔の本質〕の肯定と不可離であるからである<sup>41</sup>。全く同じ時間に、肯定された〔本質〕が否定されるということは不合理である。なぜなら、一つ〔の事物〕において肯定と否定は矛盾するからである。以上のようなことが〔第 2823 詩節の〕意味の根底にある。〔この〕批判は非常に明瞭なので、この〔(A-4)「能力は事物と異なることも異なることもない」という場合〕を〔シャーンタラクシタは〕述べていないのである。

1.3.1.1.2 (2)「能力が能力保持者と異なる」という見解 (vyatirekapakṣa)、(3)「異なり且つ異なる」という見解 (ubhayātmakapakṣa)、(4)「異なることも異なることもない」という見解 (anubhayātmakapakṣa)

1.3.1.1.2.1 帰謬法：見解 (2) (3) [(4)] の場合の帰結

[TSP 2824.0] idānīm antimaṃ pakṣatrayam abhyupagamyā dūṣaṇam āha **prṥhaktvam** ityādi /

[TSP 2824.0] da ni phyogs phyi ma gsum khas blangs nas sun 'byin pa 'chad pa ni **dngos po nus las** zhes bya ba la sogs pa ste /

[TSP 2824.0] 今度は、〔シャーンタラクシタは、〕第 2824 詩節で後の三つの見解を認めた上で批判を述べている<sup>42</sup>。

[TS 2824]

**prṥhaktvam ubhayātmavm vāstu śaktes tathāpi tat /**

**jñānaṃ nityaṃ bhaved eva nityāśaktyā hi saṃgatam //2824//**

**dngos la nus pa tha dad dang //**

**gnyis bdag nyid na'ang de<sup>(49)</sup> lta na'ang //**

**rtag pa'i nus dang 'brel pa can //**

**de shes rtag tu 'byung bar 'gyur //**

能力は（認識と）別個であるか、両方を本質とするとしよう。そのような場合でも、その認識は必ず常住であることになってしまう。なぜなら、（認識は）常住な能力と関係しているからである。

[TSP 2824.1] **prṥhaktvam** vyatirekapakṣaḥ / **ubhayātmakagrahaṇam** upalakṣaṇam / anubhayātmakapakṣāṅgīkāro 'pi draṣṭavyaḥ / yadvā tasyāpy ubhayarūpapatīṣedhasvabhāvatayobhayātmakatvam asty eva / asmin pakṣatraye 'pi nityayā śaktyā jñānasya sambandhān nityatvam syāt //

[TSP 2824.1] **logs shig** ni tha dad pa'i phyogs so // **gnyi ga'i bdag nyid** smos pa ni nye bar mtshon pa ste / gnyi ga ma yin pa'i bdag nyid kyi phyogs kang khas blang bar bya'o // yang na de la yang gnyi ga'i ngo bo dgag pa'i rang bzhin nyid kyi gnyi ga'i bdag nyid spong ba nyid do // phyogs gsum pa 'di la yang shes pa nus pa rtag pa dang 'brel pa'i phyr rtag pa nyid du 'gyur ro //

<sup>41</sup> 〈相互に排除し合う形で成立する本質を持つこと〉 (parasparaparīhāsthitalakṣaṇatā) という矛盾 (virodha) が含意する排中律による否定。

<sup>42</sup> 「後の見解の三つ組」 (antimapakṣatraya) という表現によって (A-2) (A-3) (A-4) が理解されるが、ここでは、カマシーラは、(A-1) (A-3) (A-4) の三つのことを指示している。

<sup>(49)</sup> de] D; nge P

[TSP 2824.1] 「別個であること」というのは、(A-1)「〔能力は事物と〕異なる」という見解である。「両方を本質とする」という表現は提喩法である。〔この (A-3)「両方を本質とする」という表現によって、シャーントラクシタは〕(A-4)「両方を本質としない」という見解も認めていると見なすべきである。或いは、その〔(A-4)「両方を本質としない」〕も、両方を本質にするものの否定を本性とするものとして両方を本質とするということに他ならない<sup>43</sup>。この三つの見解のいずれにおいても、常住な能力と認識は関係することになるのだから、〔認識は〕常住になってしまうだろう。

### 1.3.1.1.2.2 帰謬法の根拠：そうでなければ〈真〉は常住になりえない

[TSP 2825ab.0] *katham ity āha anyathā hītyādi /*

[TSP 2825ab.0] *ji ltar zhe na / gzhan du zhes bya ba la sogs pa smos te /*

[TSP 2825ab.0] 「どうして〔能力に同一の本質が随伴しないの〕か」ということを〔シャーントラクシタは〕第 2825 詩節前半で述べている。

[TS 2825ab]

*anyathā hi na nityā syād ekarūpāsamanvayāt /*

*de lta min na rtag mi 'gyur //*

*dngos<sup>(50)</sup> gcig rjes 'gro med pa'i phyir //*

なぜなら、そうでなければ、〔能力は〕常住にはなりえないからである。というのは、〔能力に〕同一の本質が随伴しないことになるからである。

[TSP 2825ab.1] *anyathā hi yadi śadktisambaddhaṃ jñānam anityaṃ bhavet tadā śakter nityatvaṃ na prāpnoti / kutaḥ / ekarūpāsamanvayāt / ekasvabhāvānugamābhāvād ity arthaḥ /*

[TSP 2825ab.1] *de lta ma yin te / gal te nus pa dang 'brel pa'i shes pa mi rtag pa nyid du 'gyur na de'i tshe nus pa rtag pa nyid du mi 'gyur ro // gang las she na / ngo bo gcig rjes su 'gro ba med pa'i phyir te / rang bzhin gcig rjes su 'jug pa med pa'i phyir ro zhes bya ba'i don to //*

[TSP 2825ab.1] 「なぜなら、そうでなければ」、もし能力と関係した認識が無常であるとするならば、その場合、能力が常住であることは結果しないからである。

【反論】 どうしてか。

【回答】 「というのは、〔能力に〕同一の本質が随伴しないことになるからである」。「同一の本性が随行しないから」という意味である。

[TSP 2825cd.0] *tam evaika rūpāsamanvayaṃ darśayati kadācid ityādi /*

<sup>43</sup>この詩節では、「別個であること」(prthaktva) という表現で、(A-1)「能力は事物と異なる」という見解が、「両方を本質とすること」(ubhayātmatva) という表現によって、(A-3)「能力は両方を本質とする」という見解が表示されている。しかし、(A-4)「能力は両方を本質としない」という見解は直接的に表示されていない。そこで、「ここでシャーントラクシタは (A-4) も考慮に入れていた」ということを示すために、カマラシーラは、「両方を本質とすること」という表現に二通りの解釈を与える。

(1) この表現は提喩法 (upalakṣaṇa) であり、(A-4) も含意されている。この場合、(A-3) と (A-4) の見解は意味が異なる。(A-3): (P ∧ ¬P); (A-4): ¬(P ∨ ¬P)

(2) (A-3) と (A-4) は実質的に意味が全く同じである。(A-3) = (A-4): (P ∧ ¬P)

<sup>(50)</sup>dngos] D; ddog P



[TSP 2825cd.0] ngo bo gcig rjes su 'gro ba med pa de nyid ston pa ni **gang phyir nus pa zhes bya ba la** sogs pa smos te /

[TSP 2825cd.0] まさにそのように〔能力に〕同一の本質が随伴しないということを〔シャーントラクシタは〕第 2825 詩節後半で示している。

[TS 2825cd]

**kadācit sā hi sambaddhā tajjñānena na cānyadā //2825//**

**gang phyir de shes dang nus pa //**

**res 'ga' 'brel zhing<sup>(51)</sup> gzhan du min //**

というのも、それ（能力）は、或るときにはその認識と関係し、また別のときには（その認識と関係し）ない（というように、〈認識と関係する本質〉と〈認識と関係しない本質〉という異なる本質が随伴することになる）からである。

[TSP 2825cd.1] anitye hi vijñāne sati śaktes tajjñānasambaddhāsambaddhasvabhāvadvyayaṃ<sup>16)</sup> syāt / na caikasya parasparaviruddhasvabhāvadvyayasambhavo yuktaḥ, ekatvahānīprasaṅgād bhedavyavahārochedāpatteś ca //

[TSP 2825cd.1] shes pa mi rtag pa yin na nus pa de'i shes pa<sup>(52)</sup> 'brel ba dang ma 'brel pa'i rang bzhin gnyis su 'gyur la / gcig la phan tshun 'gal ba'i rang bzhin gnyis yod par rigs pa yang ma yin te / gcig nyid nyams par thal bar 'gyur ba'i phyir dang tha dad pa'i tha snyad rgyun chad par 'gyur ba'i phyir ro //

[TSP 2825cd.1] というのも、認識が無常である場合、能力には (1) 〈その認識と関係する本性〉と (2) 〈その認識と関係しない本性〉の二つがあることになってしまうからである。そして、単一〔の事物〕に相互に矛盾する二つの本性が存在し得るということは不合理である。なぜなら、〔〈矛盾する属性との結び付き〉という〈差異の定義〉に基づいて、単一の事物は〕単一性 (ekatva) を放棄することになってしまうし、また、〔その〈差異の定義〉を放棄して、矛盾する属性が単一の事物に存在し得るとすれば、〕差異 (bheda) に関する活動が根絶されてしまうからである<sup>44)</sup>。

1.3.1.2 (B) 「本性的」(svābhāvika) という語によって〈保持者と同時に生じること〉が意図されている場合

1.3.1.2.1 【反論】能力は〈認知手段〉と同時に生じるのであって、後から他者によって与えられるものではない

[TSP 2826.0] dvitīyaṃ vikalpam adhikṛtyāha athetyādi //

<sup>44)</sup>二つの矛盾する属性が存在するということが、それらの属性の二つの基体が異なるということである。この〈差異の定義〉を放棄して、単一の事物に二つの矛盾する属性が存在し得ると主張するならば、それに代わる〈差異の定義〉はないのだから、二つの基体間の〈差異〉の設定が不可能になってしまう。

シャーントラクシタは、『タットヴァサンクラハ』第 20 章「多観点理論検討」(syādvādaparīkṣā) 第 1742 詩節で、〈矛盾する属性との結び付き〉(viruddhadharmasāṅga) という〈差異の定義〉(bhedalakṣaṇa) を述べている。これは、ダルマキールティによる「差異は〈矛盾する属性の存立〉(viruddhadharmādhyāsa) に他ならない」という〈差異の定義〉を前提にしている。

<sup>16)</sup>-sambaddhāsambaddha-] TSPms, TSPms<sub>P</sub>; -sambandhāsambaddha- TSP<sub>BBS</sub> TSP<sub>GOS</sub>

<sup>(51)</sup>zhing] D; cing P

<sup>(52)</sup>pa] D; pa dang P

[TSP 2826.0] nmam par rtog pa gnyis pa'i dbang du byas nas **ci ste** zhes bya ba la sogs pa smos te /

[TSP 2826.0] 第二の選択肢 (B) 「能力は能力保持者と同時に生じる」を主題にして、〔シャーンタラクシタは、クマーリラからの想定反論として〕第 2826 詩節を述べている。

[TS 2826]

**atha śaktiḥ svahetubhyaḥ prāmāṇānāṃ prajāyate /**  
**jātānāṃ tu svahetubhyo nānyair ādhīyate punaḥ //2826//**

rang gi rgyu las skye 'gyur ba //

tshad ma rnams kyi nus pa ni //

rang gi rgyu las skyes 'gyur te /

physis rkyen gzhan byas min zhe na //

【反論】能力は、(〈認知手段〉) 自らの原因から〈認知手段〉の中に生じるのであって、(〈認知手段〉) が自らの原因から生じた後で、さらに(その〈認知手段〉)の中に自らの原因とは異なる他のものによって与えられることはない<sup>45</sup>。

### 1.3.1.2.2 主張 [1.2.1] は〈内容が確立済み〉(siddhasādhyatā)

[TSP 2827–2828.0] **tad atretyādinā siddhasādhyatām pakṣadoṣam āha /**

[TSP 2827–2828.0] **des 'dir** zhes bya ba la sogs pas<sup>(53)</sup> grub pa la sgrub pa nyid kyi skyon 'chad do //

[TSP 2827–2828.0] 第 2827 詩節と第 2828 詩節で、〔シャーンタラクシタは、〕〈論証対象が既に確立されている〉(siddhasādhyatā) という〈〔上述の反論の〕主張の欠陥〉について述べている。

[TS 2827–2828]

**tad atra na vivādo naḥ<sup>17)</sup> ko hy anamśasya vastunaḥ /**  
**svahetor upajātasya śaktiṃ paścāt prakalpayet //2827//**  
**yan nāmottarakālaṃ hi rūpam ādhīyate paraiḥ /**  
**tad bhāvāntaram eveti na tasyātmāpadiśyate //2828//**

<sup>45</sup> ウンベーカーの自律的真理論解釈に酷似している。ウンベーカーは、「〈真〉は認識の原因集合から認識と同時に生じる」と主張している。ただし、〈真〉は対象画定能力 (arthaparicchedaśakti) ではなく、〈対象との整合性〉 (arthāvisamvāditva) であると考え、この反論の内容と異なっている。

TṬ on ŚV condanā 47 (54: 2–3): indriyādisvarūpam eva hy anyanirapekṣam arthāvisamvādijñānotpādakam / (「実に、感覚器官を始めとする〔認識の原因集合〕そのものこそが他 (美質) に依存することなしに〈対象との整合性を有する認識〉を生じさせる」)

TṬ on ŚV codanā 47 (49: 20–22): tad<sup>\*1</sup> apy ayuktam, āsritānām api ghaṭe<sup>\*2</sup> rūpādīnāṃ sahotpattidarśanāt / nanu utpanna eva ghaṭe<sup>\*3</sup> rūpādīrāmbhaḥ / na, tadrahitānām anupalabdheḥ / yogibhiḥ sāvasthopalabhyata iti cen na, pramāṇābhāvāt / <sup>\*1</sup>tad] TṬ; TṬms: etad <sup>\*2</sup>ghaṭe] TṬms; paṭe TṬ <sup>\*3</sup>ghaṭe] TṬms; paṭe TṬ (「その〔解釈〕も不合理である。なぜなら、〔壺の〕色などは、壺に依拠しているにもかかわらず、〔壺と〕同時に生じることが経験されるからである。【反論】生じた後でのみ壺に色などが作り出されるのである。【回答】そのようなことはない。なぜなら、それら (色など) を欠いた形で〔壺などの諸事物は〕把握されないからである。【反論】ヨーガ行者たちは〔壺などの〕その〔色などを欠いた〕状態を把握する。【回答】そのようなことはない。なぜなら、〔その状態に対する〕〈認知手段〉はないからである」)

<sup>17)</sup>naḥ] TS<sub>GOs</sub> TS<sub>BBS</sub>; na TS<sub>msJ</sub> TS<sub>msP</sub>

<sup>(53)</sup>pas] D; pa P

'dir ni bdag cag la rtsod<sup>(54)</sup> med //  
 gang phyir rang rgyu<sup>(55)</sup> las skyes pa'i //  
 cha shad med pa'i dngos po yi //  
 nus pa phyi nas su zhig rtogs //  
 gzhan gyis physis kyi dus su ni //  
 ngo bo gang zhig byas pa ni //  
 de ni dngos gzhan nyid yin pas //  
 de'i<sup>(56)</sup> bdag nyid du brjod min //

【回答】したがって、上述（の反論の主張）について、私たち（仏教学派）に異論はない。というのも、いったい誰が「自らの原因から部分を持たないものとして生じた実在者の中に後から能力（が生じる）」ということ）を想定するだろうか。

なぜなら、（実在者が生じた）後の時間において或る本質が他のものによって（その実在者に）与えられるとすれば、その（本質）は（その実在者と異なる）別の存在者に他ならないことになるので、（その本質は）「その（実在者）の本質（ātman）」と呼ばれることはないからである。

[TSP 2827–2828.1] tathā hi sthīrāsthīrasvabhāvabhedena dvīprakārasyaṅpī padārthasya niraṃṣatvāt sarvātmanā pariniṣpatter nottarakālaṃ pratyayāntareṅātmaḥbhūtā śaktir ādhātuṃ pāryate / ādhāne vārthāntarakaraṅam eva syāt, na tu svabhāvabhūtaśaktyādhānaṃ / bhāvasvabhāvānabhyupagame vā śakter bhāvāsya-kāratvaprasaṅga ity uktam //

[TSP 2827–2828.1] 'di ltar brtan pa dang mi brtan pa'i rang bzhin tha dad pas dngos po'i rnam pa gnyi<sup>(57)</sup> ga yang cha med pa'i phyir bdag nyid kyis yongs su rdzogs pas dus physis rkyen gzhan gyi bdag nyid du byed pa'i nus pa med par mi nus la / byed na yang don gzhan byed pa nyid du 'gyur gyi / rang gi ngo bor gyur pa'i nus pa byed pa ni ma yin no // nus pa dngos po'i rang bzhin du khas mi len na yang dngos po byed pa po nyid ma yin par thal bar 'gyur ro zhes bshad zin to //

[TSP 2827–2828.1] すなわち、常住な本性と無常な本性の差異によって二種類に分類される実在者は、いずれも部分を持たないので全面的に完成しているのだから、後の時間において別の原因によって本質である能力が〔その実在者に〕与えられるということはあり得ない。或いは、仮に与えられるとすれば、まさに別の事物が作り出されることになるのであり、本性である能力が与えられることにはならないだろう。或いは、「能力が存在者の本性であることが認められなければ、存在者は実現者ではなくなってしまう」ということは〔第 2817 詩節で〕既に述べられている<sup>46</sup>。

<sup>46</sup>TS 2817: iṣṭakāryasamarthaṃ hi svarūpaṃ śaktir ucyate / tasya bhāvātmatābhāve bhāvo na syāt sa kāraḥ //2817//（「実に、望ましい結果を生み出すことができる本質が「能力」と呼ばれている。その〔本質〕が存在者の本性ではないとするならば、その存在者は実現者にはなりえない」）

<sup>(54)</sup>rtsod] P; rtsol D

<sup>(55)</sup>rgyu] P; rgyud D

<sup>(56)</sup>de'i] P; de ni D

<sup>(57)</sup>gnyi] D; gnyis P

## 1.3.1.2.3 帰謬法：能力が後から生じる場合の帰結

## 1.3.1.2.3.1 事物と能力は別物であることになってしまう

[TSP 2829.0] syād etat / mā bhūd anamśasya vastuna uttarakālaṃ śaktyādhānam / sāmśasya kasmān na bhavaṭīty āha **viruddhadharmasaṅgo hītyādi** /

[TSP 2829.0] 'di snyam du cha med pa'i dngos po'i nus pa dus phyis mi byed mod / cha dang bcas pa ci'i phyir ma yin snyam du sems pa la / **gang phyir 'gal ba'i chos ldan**<sup>(58)</sup> zhes bya ba la sogs pa smos te /

[TSP 2829.0] 次のような反論があるかもしれない。

【反論】部分を持たない実在者の中に後の時間に能力が作り出されることはあつてはならない。〔しかし、〕部分を持つ〔実在者〕の中に、どうして〔後の時間に能力が作り出されることか〕ないのだろうか。

【回答】以上のような反論を想定して〔シャーンタラクシタは〕第 2829 詩節で回答している。

[TS 2829]

**viruddhadharmasaṅgo hi vastūnām bhinnatoditā /  
tanniṣpattāv anīṣpattē śaktāv api sa vidyate //2829//**

**gang phyir 'gal ba'i chos 'dre ba //**

**dngos po'i tha dad nyid du bshad //**

**de grub na de mi 'grub phyir //**

**nus pa la yang de yod yin //**

というのも、「〈矛盾する属性との結び付き〉が諸々の実在者の〈差異〉である」ということは既に述べたからである<sup>47</sup>。それ（実在者）が実現したときに（能力が）実現していないならば、能力にもそれ（〈矛盾する属性との結び付き〉）が存在することになる<sup>48</sup>。

[TSP 2829.1] sa vidyata iti **viruddhadharmasaṅgaḥ**<sup>18)</sup> //

[TSP 2829.1] **des ni zhes bya ba ni 'gal ba'i chos dang ldan pa'o //**

[TSP 2829.1] 「それが存在する」という表現における「それ」は、〈矛盾する属性との結び付き〉を指示する。

<sup>47</sup>TS 1742: viruddhadharmasaṅgaś ca vastūnām bhedalakṣaṇam / kathañcid anyatheṣṭo 'pi na bhedo nīlapīṭayoḥ // (「そして、諸々の実在者たちの〈差異の定義〉は、〈矛盾する属性との結び付き〉である。そうでなければ、青色と黄色の差異はどのようにしても認められない」)

<sup>48</sup>すなわち、実在者と能力は、それぞれ、〈実現していること〉・〈実現していないこと〉という相互に矛盾する属性とくつつくことになるので、相互に異なることになる。

<sup>18)</sup>-dharmasaṅgaḥ] em.; -dharmaprasaṅgaḥ TSP<sub>BBS</sub> TSP<sub>GOS</sub> TSP<sub>msJ</sub> TSP<sub>msP</sub>

<sup>(58)</sup>ldan] D; can P

### 1.3.1.2.3.2 どのような事物も能力を持てなくなってしまう

[TSP 2830–2831.0] *asthire tu bhāve viśeṣeṇa dūṣaṇam āha sādhitetyādi /*

[TSP 2830–2831.0] *mi brtan pa'i dngos po la khyad par sun 'byin pa ni don kun skad cig ces bya ba la sogs pa smos te /*

[TSP 2830–2831.0] 一方、〔シャーンタラクシタは〕第 2830 詩節と第 2831 詩節で存在者が無常である場合における批判を特別に述べている。

[TS 2830–2831]

*sādhitakṣaṇabhaṅgās ca sarve 'rthā iti teṣu na /*  
*pratya'yāntaram ādhātuṃ śaktiṃ kiṃcana śaktimat //2830//*  
*na hi teṣāṃ avasthānaṃ parastād asti yena te /*  
*pratya'yāntarataḥ śaktiṃ labheran kutracit phale //2831//*

*dngos kun skad cig 'jig pa ru //*  
*bsgrub par byas pas<sup>(59)</sup> de dag gi<sup>(60)</sup> //*  
*nus pa 'ga' zhig rkyen gzhan gyis //*  
*skyed par byed par mi nus so //*  
*gang phyir de dag gis gnas pa //*  
*dus gzhan du ni yod min te /*  
*gang gi dus na<sup>(61)</sup> rkyen gzhan gyis //*  
*'bras bu 'ga' zhig la nus thob //*

そして、全ての事物は刹那滅であるということが既に論証されている。したがって、どのような別の原因も、〈それら（事物）の中に能力を与える能力〉を持つことはない。

というのも、それら（事物）は（生じた）後に存続するということはないからである。（もしそのようなことがあれば、）そのように（存続すること）によって、それら（事物）は別の原因から〈何らかの結果を生み出す能力〉を得ることができるだろうが。

[TSP 2830–2831.1] *kutracit phala ity arthaniścayādau / śeṣaṃ subodham //*

[TSP 2830–2831.1] *'bras bu 'gal la zhes bya ba'i don nges pa la sogs pa ste / lhag ma ni go bar zad do //*

[TSP 2830–2831.1] 「何らかの結果を生み出す」というのは「対象確定などを生み出す」ということである。残りは容易に理解できる。

<sup>(59)</sup> pas] P; pa D

<sup>(60)</sup> gi] P; gis D

<sup>(61)</sup> yod min te / gang gi dus na] D; om. P

## 1.3.2. 〈真〉の確立の自律性の主張 [1.2.2] に対する批判

## 1.3.2.1 〈真〉の確立の他律性の論証

## 1.3.2.1.1 [主張] 能力 (= 〈真〉) は、〈認知手段〉の中に本性的なものとして成立しているとしても、自律的には理解され得ない

[TSP 2832.0] syād etat / yadi bhavatām na vivādaḥ, kathaṃ tarhi parataḥ prāmāṇyam abhyupagatam ity ata āha **etāvāt tv** ityādi /

[TSP 2832.0] gal te 'di snyam du khyed cag la rtsod pa med na / 'o na ji ltar gzhan las tshad ma nyid du khas len par byed snyam du sems na / de'i phyir '**di la blo bzang** zhes bya ba la sogs pa smos te /

[TSP 2832.0] 次のような反論があるかもしれない。

【反論】もしあなたたち（仏教学派）に異論がないのであれば、どうして〈真〉は他律的であるということをお認めているのだろうか。

【回答】以上のような反論を想定して〔シャーントラクシタは〕第 2832 詩節で回答している。

[TS 2832]

**etāvāt tu vadanty atra sudhiyaḥ saugatā ime /**

**jñāne kvacit sthītāpy eṣā na boddhum śakyate svataḥ //2832//**

'di ni blo bzang sangs rgyas pa //

de dag ji ltar brjod pa yin //

shes pa 'ga' la nus gnas kyang //

de ni rang las rtogs nus min //

一方、このことについて、優れた知恵を有するこれらの仏教学派の者たちは、次の限りのことを主張する。

どの認識において成立していようと、この〔能力〕は決して自律的には理解できない。

[TSP 2832.1] **boddhum** iti niścetum / **svata** iti vijñānasvarūpānubhavamātrād<sup>19)</sup> anapekṣitottarakālabhāvikāryasamvādāt //

[TSP 2832.1] **rang las** zhes bya ba ni dus phyis 'byung ba'i 'bras bu mi slu<sup>(62)</sup> ba la mi ltos<sup>(63)</sup> pa'i rnam par shes pa'i rang gi ngo bo nyams su myong ba tsam las so // **rtogs par** zhes bya ba ni nges par ro //

[TSP 2832.1] 「理解」というのは「確定」ということである。「自律的には」というのは、「後の時間に生じる結果との整合性に依存していない〈認識の本質の経験だけ〉を通じては」という〔意味〕である<sup>49)</sup>。

<sup>49)</sup>要するに、真理論の〈確定〉の文脈では、「自律的に」という表現は、「後続の〈効果的作用の認識〉(arthakriyājñāna)に依存せずに」ということを意味する。

<sup>19)</sup>-svarūpānubhava-] TSPms. TSPmsP; -svarūpād anubhava- TSP<sub>BBS</sub> TSP<sub>GOS</sub>

<sup>(62)</sup>slu] D; bslu P

<sup>(63)</sup>ltos] D; bltos p



### 1.3.2.1.2 【説明】〈認知手段〉の〈経験を本質としていること〉(anubhavātmava)のみを通じてその〈真〉は確定され得ない

[TSP 2833.0] syād etat / vijñānāvvyatirekāc chakter vijñānagrahaṇe sāpi grhītaiva, tat katham boddhum na śakyata ity āha **yathāvasthītetyādi** /

[TSP 2833.0] 'di snyam du nus pa ni shes pa las tha mi dad pa'i phyir ro // shes pa gzung ba na de yang 'dzin par byed pa nyid yin te / de ji ltar rtogs par byed pa mi nus snyam du sems na / **ji ltar gnas pa'i** zhes bya ba la sogs pa smos te /

[TSP 2833.0] 次のような反論があるかもしれない。

【反論】能力は認識と異ならないのだから、認識が把握されるときにそれ（能力）も必ず把握される。したがって、「能力は」どうして把握することができないだろうか。

【回答】以上のような反論を想定して〔シャーンタラクシタは〕第 2833 詩節で回答している。

[TS 2833]

**yathāvasthītavijñeyavastubodhāptīśaktatām**<sup>20)</sup> /

**ko nāmānubhavātmavān nīcetuṃ kevalāt prabhuh** //2833//

**ji ltar gnas pa'i shes bya yi** //

**dngos po rtogs dang thob nus nyid** //

**nyams myong bdag nyid gcig pu yis** //

**su zhig nges par byed par nus** //

単に（或る認識が）経験を本質としているという理由だけで<sup>50</sup>、「（その認識が）〈ありのままの状態の認識対象である実在者を理解させたり獲得させたりする能力〉<sup>51</sup>を持つ」ということを、いったい誰が確定できるだろうか。

[TSP 2833.1] bodhaś cāptīś ca **bodhāptī** / **yathāvasthītasya vijñeyasya vastuno ye bodhāptī tatra tadviśaye śakteti vighrahaḥ** / **kevalād iti**<sup>21)</sup> saṃvādakāraṇaguṇaparījñānānapekṣāt<sup>22)</sup> //

[TSP 2833.1] rtogs pa dang thob pa dag ni **rtogs pa thob pa dag** ste<sup>(64)</sup> / **ji ltar gnas pa'i shes bya'i dngos po'i rtogs pa dang thob pa gang**<sup>(65)</sup> **yin pa de la de'i yul can gyi nus pa** zhes tshig rnam par sbyar ro // 'ba' **zhig las** zhes bya ba ni mi slu ba<sup>(66)</sup> dang rgyu'i yid yongs su shes pa la ltos pa med pa'i phyir ro //

[TSP 2833.1] **bodhāptī** という語はドヴァンドヴァ複合語である。「ありのままの状態の認識対象である実在者を理解させたり獲得させたりする」こと、それらの領域に関する（「領域」(viśaya) を

<sup>50</sup>クマーリラの「理解を本質とするという理由で」(bodhātmakatena) という表現を意識して用いている。

Cf. ŚV codanā 53ab: tasmād bodhātmakatvena prāptā buddheḥ pramāṇatā / （「それゆえに、理解を本質とするという理由で認識の中に結果した〈真〉は…」）

<sup>51</sup>クマーリラは〈真〉を〈認知対象を理解させる能力〉(meyabodhaśakti) と同定していた (TS 2812) が、ここで、シャーンタラクシタは、シャークヤブッディの考えに基づいて、それに〈認知対象を獲得させる能力〉を加えている。

<sup>20)</sup>-śaktatām] TS<sub>BBS</sub> TS<sub>GOS</sub>; -śaktitām TS<sub>ms</sub>J TS<sub>ms</sub>P

<sup>21)</sup>kevalād iti] TSP<sub>BBS</sub> TSP<sub>GOS</sub> TSP<sub>ms</sub>J; kevalād iti sambandhād iti TSP<sub>ms</sub>P

<sup>22)</sup>saṃvādakāraṇa-] em.; sambandhādikāraṇa- TSP<sub>BBS</sub> TSP<sub>GOS</sub> TSP<sub>ms</sub>J TSP<sub>ms</sub>P

<sup>(64)</sup>ste] P; te D

<sup>(65)</sup>gang] D; gang dag

<sup>(66)</sup>slu ba] D; bslu P

意味する第7格接辞)「能力を持つ」。以上が *yathāvasthitavijñeyavastubodhāptīśakta* という複合語の分析的説明である。「**だけで**」というのは、「整合知(効果的作用の認識)と原因における美質の認識に依存せずに」ということである。

### 1.3.2.3.3 【理由】〈非認知手段〉に分類される〈無分別の錯誤知〉にも〈経験の本質としていること〉があるから

[TSP 2834.0] *kasmān na prabhur ity āha apramāṇe 'pītyādi /*

[TSP 2834.0] *ci'i phyir mi nus she na / gang gi gsal snang rnam pa can zhes bya ba la sogs pa smos te /*

[TSP 2834.0] 「どうして〔誰も自律的には能力を確定〕できないのか」ということを〔シャーンタラクシタは〕第2834詩節で述べている。

[TS 2834]

**apramāṇe 'pi yenaitat keśapāsādidarśane /**

**vidyate 'nubhavātmatvaṃ viśpaṣṭākārabhāsini //2834//**

**gang phyir tshad ma ma yin yang //**

**skra<sup>(67)</sup> shad la sogs shes pa ni //**

**rnam pa gsal ba snang ba yis<sup>(68)</sup> //**

**nyams myong bdag nyid de yod yin<sup>(69)</sup> //**

なぜなら、毛髪の網などの感覚体験という〈非認知手段〉も、そこに明瞭な形象が現れているので、同じように経験を本質としているからである<sup>52</sup>。

[TSP 2834.1] *keśapāsādidarśana iti keśoṅḍukādidarśane<sup>23)</sup> / anenaitad āha / yady apy anubhūtā śaktih tathāpy apramāṇasārūpyād bhrānter niścetum na śakyate, viśādiśaktivat / na hy anubhava eva kevalo niścayahetuḥ, anyasyāpy abhyāsāder apekṣaṅāt / yatra hy aṃśe bhrāntinimittena na guṇāntaram āropyate tatraiva niścayaḥ //*

[TSP 2834.1] *skra shad la sogs<sup>(70)</sup> mthong ba la zhes bya ba ni skra shad 'dzings pa la sogs pa mthong ba la'o // 'dis ni 'di skad du bstan te / yang<sup>(71)</sup> nus pa nyams su myong ba de lta na yang tshad ma ma yin pa dang 'dra ba'i phyir 'khrul pas dug la sogs pa'i nus pa bzhin du nges par mi nus pa la / goms pa la sogs pa'i<sup>(72)</sup> gzhan la yang ltos<sup>(73)</sup> pa'i phyir nyams su myong ba 'ba' zhig nges pa'i rgyu ma yin te /*

<sup>52</sup> 「毛髪の網などの感覚体験」という表現で、〈眼翳(ティミラ)に代表される欠陥〉によって損傷された感覚器官を通じて生じる〈錯誤的な無分別知〉が意図されている。ダルマキールティの学説では、認識は概念を伴わなければ必ず明瞭な表象を持ち、また、「経験」(anubhava)という語は、二種類の無分別知、すなわち、〈知覚〉(pratyakṣa)と〈錯誤的な無分別知〉を意味し、推理(anumāna)などの有分別知は意味しない。これに則って、シャーンタラクシタは、「〈知覚〉と〈錯誤的な無分別知〉は、全く同様に明瞭な表象を持つから、それ自体では見分けがつかない」ということを指摘することで、無分別知の〈真〉は自律的に確定できないことを証明している。

<sup>23)</sup> keśoṅḍukā- TSPms, TSPms<sub>P</sub>; keśoṅḍrukā- TSP<sub>BBS</sub>; keśoṅḍrakā- TSP<sub>GOS</sub>

<sup>(67)</sup> skra] D; sgra P

<sup>(68)</sup> yis] P; yi D

<sup>(69)</sup> yin] D; min P

<sup>(70)</sup> sogs] D; sogs pa P

<sup>(71)</sup> yang] P; lang P

<sup>(72)</sup> pa'i] D; pa P

<sup>(73)</sup> ltos] D; bltos P

cha<sup>(74)</sup> gang la<sup>(75)</sup> 'khrul pa'i rgyu mtshan gyis yon tan gzhan sgro mi 'dogs par de kho nar nges pa yin no //

[TSP 2834.1] 「毛髪の網のなどの感覚体験」(keśapāśa = keśoṇḍuka)。この〔詩節〕によって〔シャーンタラクシタは〕次のことを意図している。たとえ〔〈認知手段〉の〕能力が経験されるとしても、〔〈認知手段〉の〕〈非認知手段〉との類似性を通じて生じる錯誤知（付託知）のせいで<sup>53</sup>、〔その能力は〕確定され得ない。例えば、毒などの能力のように<sup>54</sup>。実に、単なる経験だけでは確定の原因にはならない。なぜなら、反復習熟（abhyāsa）などというそれ以外のものが期待されるからである<sup>55</sup>。実に、錯覚の原因によって別の性質が付託されていない部分に関してのみ確定が成立するのである<sup>56</sup>。

#### 1.3.2.3.4 【結論】 それゆえに、〈認知手段〉に能力を生み出すためではなく、そこにある能力を確定するために、認識者は、〈効果的作用の認識〉(arthakriyājñāna)、或いは、〈原因の美質の認識〉(kāraṇaṇājñāna) に依存する

[TSP 2835.0] kutas tarhi sā niścetavyety āha tasmād ityādi /

[TSP 2835.0] 'o na gang las de nges par bya ba yin zhe na / **de phyir don byed** ces bya ba la sogs pa smos te /

[TSP 2835.0] 「その場合、何を通じてそれ（能力）が確定されるのか」ということを〔シャーンタラクシタは〕第 2835 詩節で述べている。

[TS 2835]

tasmād arthakriyājñānam anyad vā samapekṣate<sup>24)</sup> /

niścaṃyāyaiva na tv asyā ādhānāya viśādivat //2835//

des na nges par bya nyid phyir //

don byed shes pa'am gzhan ltos<sup>(76)</sup> min //

de byed phyir ni ma yin te /

dug la sogs pa la bzhin no //

それゆえに、〔認識者は、認識の中に〕これ（能力）を与えるためではなく、〔認識の中の能力を〕確定するために、効果的作用の認識、或いは、それ以外のもの（原因の美質の認識）に依存するのである。例えば、毒などの場合のように。

<sup>53</sup> 「〈真〉の上に〈偽〉が付託されるせいで」という意味。「錯誤知」(bhrānti) という語は、この文脈では、狭義の錯誤知 (mithyājñāna) と疑惑知 (saṃśaya) の両方を含意する。

<sup>54</sup> TS 2835–2836.

<sup>55</sup> Cf. TS 2968: vṛttāv abhyāsavatyām tu vailakṣyaṇam praṭīyate / atadvīṣayato jñānād ādye 'prāpte 'pi tatphale // (「一方、〔認識者の〕行動開始が反復を伴う場合、それ（効果的作用）を対象にしない認識（最初の認識）に基づいて、それ（最初の認識の対象）の結果（効果的作用）が獲得されていなくても、最初〔の認識〕の特殊性 (vailakṣyaṇa) が理解される」)

TS 3099: ābhyāsikam yathā jñānam pramāṇam gamyate svataḥ / mithyājñānam tathā kimcid apramāṇam svataḥ sthitam // (「反復的認識が自律的に真であることが理解されるのと同様に、或る種の錯誤知も自律的に偽であることが確立される」)

<sup>56</sup> ダルマキールティの付託の排除としての確定知論そのものである。ダルマキールティの確定知論については、中須賀 [2014] を参照。

<sup>24)</sup> -pekṣate] TS<sub>Sms</sub> TS<sub>SmsP</sub>; -pekṣyate TS<sub>BBS</sub> TS<sub>GOS</sub>

<sup>(74)</sup> cha] D; chas P

<sup>(75)</sup> la] D; las P

<sup>(76)</sup> ltos] D; bltos P

[TSP 2835.1] **anyad veti** hetuśuddhijñānam / **na tv asyā ādhānāyeti anyad apekṣata** iti sambandhaḥ / **asyā** iti śakteḥ / niścayasya puruṣādhāratvāt tadutpattaye yuktā kāraṇāntarāpekṣā, na tv ādhānāya, tasya śaktyādhāratvāt śakteś ca saha bhāvaṇiṣpattau niṣpannatvād iti bhāvaḥ //

[TSP 2835.1] **gzhan yang** zhes bya ba ni rgyu'i shes pa'o // **'di ni** zhes bya ba ni<sup>(77)</sup> nus pa'o // **byed pa'i phyir ma yin** zhes bya ba ni **gzhan la ltos**<sup>(78)</sup> **pa** zhes 'brel to // nges pa ni skyes bu la brten pa'i phyir ro // de bskyed par bya ba'i<sup>(79)</sup> don du rgyu gzhan la ltos par<sup>(80)</sup> rigs kyi<sup>(81)</sup> / de bya ba'i don du ni ma yin te / de'i rten<sup>(82)</sup> ni nus pa snga ma yin pa'i phyir ro // nus pa yang dngos po grub pa dang lhan cig grub pa nyid kyi phyir ro snyam du bsams pa yin no //

[TSP 2835.1] 「それ以外のもの」というのは原因の清浄さ（美質）の認識のことである。「これを与えるためにではなく」という表現に「それ以外のものに依存するのである」という言葉が構文的に関係する。「これを」というのは「能力を」ということである。〔能力の〕確定は人間（認識者）を抛り所とするのだから、〔能力を〕与えるためにではなく、それ（能力の確定）を生じさせるために別の原因に依存するというのが合理的である。なぜなら、それ（能力の確定）は能力を抛り所とするからであり<sup>57</sup>、また、〔存在者の〕能力は、存在者が実現したときに一緒に実現しているからである。以上のことが〔第 2835 詩節の〕意味の根底にある。

### 1.3.2.3.5 【実例】 毒や酒などの能力のように

[TSP 2836–2837.0] **yathā hītyādinā viśādivad** iti drṣṭāntaṃ vyācāṣṭe /

[TSP 2836–2837.0] **ji ltar** zhes bya ba la sogs pa dang **dug la sogs pa bzhin no** zhes bya ba ni dpe bstan pa yin no //

[TSP 2836–2837.0] 第 2836 詩節と第 2837 詩節で〔シャーンタラクシタは〕「毒などのように」という実例を説明している。

[TS 2836–2837]

**yathā hi viśamadyādes tadanyasamatekṣaṇāt /**

**phalānantaratābhāvāc caitadātmāviniścaye //2836//**

**mūrcchāsvedapralāpādītatphalotpattiniścaye /**

**tādātmyaṃ gamyate 'py evaṃ jñāne tacchaktiniścayaḥ //2837//**

**ji ltar dug dang myos 'gyur sogs //**

**de las mtshungs gzhan snang phyir dang //**

**rjes thogs la ni 'bras med phyir //**

**de'i bdag nyid nges gzhan ltos**<sup>(83)</sup> **yin //**

<sup>57</sup>能力の確定は能力を所縁として生じる。

<sup>(77)</sup>ni] P; om. D

<sup>(78)</sup>ltos] D; bltos P

<sup>(79)</sup>bya ba'i]; bya'i D

<sup>(80)</sup>la ltos par] D; las bltos pa P

<sup>(81)</sup>kyi] P; kyis D

<sup>(82)</sup>rten] D; brten P

<sup>(83)</sup>ltos] D; bltos P

brgyal dang dub<sup>(84)</sup> dang 'chol sogs pa'i //  
 de yi 'bras bu nges bskyed na //  
 de'i bdag nyid du rtogs 'gyur te /  
 de<sup>(85)</sup> ltar shes la de nus nges //

実に、例えば、毒 (viṣa) や酒 (madya) などにはそれらと異なるものとの類似性が経験され、かつ、(それらの) 結果が直後に生じることがないから<sup>58</sup>、(毒や酒などの経験のみを通じて) これら (毒や酒など) の本質が確定されることはないが、(それらを飲んだ後で暫くして) 気絶 (mūrcchā)、発汗 (sveda)、饒舌 (pralāpa) を始めとする (それらの結果) の発生が確定されたとき、(毒や酒などは) それら (毒や酒など) を本質とするということが理解される。認識の場合にも、同様にして、その能力が確定される。

[TSP 2836–2837.1] **tadanyasamatekṣaṇād** iti / **tasmād** viṣāder anyan nāgarapānakādi, tena samatā sārūpyam, **tasyā** iḥṣaṇam iti vīgrahaḥ /

[TSP 2836–2837.1] **de las gzhan mtshungs mthong phyir dang** zhes bya ba ni dug la sogs pa **de las gzhan** dod gra<sup>(86)</sup> dang btung ba la sogs pa ste / **de dang mtshungs pa nyid** 'dra ba nyid **de mthong ngo** zhes tshig rnam par sbyar ro //

[TSP 2836–2837.1] 「それらと異なるものと似ていることが経験される」について。「それらと」、毒などと、「異なるもの」、粉末シヨウガ (nāgara) やシロップ (pānaka) など、「との類似性」(samatā = sārūpya)、「が経験されること」。以上が **tadanyasamatekṣaṇa** という複合語の分析的説明である。

[TSP 2836–2837.2] **phalānantaratābhāvād** iti / **phalaṃ** mūrcchādi, **tasyānantaratāyā** abhāvād iti vīgrahaḥ / anantaram phalābhāvād<sup>(25)</sup> iti yāvāt / **etadātmāvinīścaya** iti viṣādyātmāvinīścayē / **tādātmyam** iti viṣādisvabhāvātvaṃ / **tacchaktiniścaya** iti yathāvasthitajñeyavastubodhāptiśaktiniścayaḥ<sup>(26)</sup> //

[TSP 2836–2837.2] **'bras bu mjug thogs su med phyir** zhes bya ba la **'bras bu** ni brgyal ba la sogs pa'o // **de mjug thogs nyid du med pa'i phyir** zhes tshig rnam par sbyar te / mjug thogs su 'bras bu med pa'i phyir zhes bya ba'i tha tshig go // **de bdag rnam par ma nges na** zhes bya ba ni dug la sogs pa'i bdag nyid rnam par ma nges na'o // **de'i bdag nyid du** zhes bya ba ni dug la sogs pa'i rang bzhin du'o // **de nus nges** zhes bya ba ni ji ltar gnas pa'i shes bya'i dngos po rtogs pa dang thob pa nges pa'o //

[TSP 2836–2837.2] 「結果が直後に生じることがないから」について。「結果」、気絶など、「が直後に生じることが」「ないから」。以上が **phalānantaratābhāvāt** という複合語の分析的説明である。

<sup>58</sup> この〈類似性の経験〉、及び、〈結果が直後に生じないこと〉は、「毒ではないのではないか」「酒ではないのではないか」といった疑惑を生み出す〈錯誤知の原因〉(bhrāntikāraṇa) である。〈結果が直後に生じないこと〉は、直後に〈効果的作用の認識〉が生じないということの意味する。一方、〈効果的作用の認識〉が生じたときには、それに基づく「毒に他ならない」「酒に他ならない」という確定知によって疑惑が排除される。

TS 2965–2967: tasmād arthakriyābhāsaṃ jñānaṃ yāvan na jāyate / tāvad ādye 'pramāśānkā jāyate bhrāntihetauḥ // anantaram phalādṛṣṭiḥ sādṛśyasyopalambhanam / mater apaṭutetyādi bhrāntikāraṇam atra ca // kāryāvabhāsisivijñāne jāte tv etan na vidyate / sāksṛd vastuṇibaddhāyāḥ kriyāyāḥ pratedanāt // (「それゆえに、〈効果的作用の顕現を持つ認識〉が生じない限り、〈錯誤知の原因〉を通じて、最初 [の認識] に対して「偽ではないか」という疑念が生じる。〈直後に結果が経験されないこと〉、〈[錯誤知との] 類似性が経験されること〉、〈認識の鈍さ〉などといった〈錯誤知の原因〉がこれ (最初の認識) には存在する。一方、〈結果の顕現を持つ認識〉が生じたとき、これ (〈錯誤知の原因〉) は存在しない。なぜなら、実在者に基づく作用 (効果的作用) が直接的に意識されるからである」)

<sup>25</sup> anantaram phalā-] TSP<sub>BBS</sub> TSP<sub>GOS</sub>; anantaraphalā- TSP<sub>ms</sub> TSP<sub>ms</sub><sub>P</sub>

<sup>26</sup> -ptiśaktiniś-] em.; -ptiśi- TSP<sub>BBS</sub> TSP<sub>GOS</sub> TSP<sub>ms</sub> TSP<sub>ms</sub><sub>P</sub>

<sup>(84)</sup> [dub] D; dul P

<sup>(85)</sup> [de] P; da D

<sup>(86)</sup> [gra] D; kra P

要するに、「直後に結果が生じないから」ということである。「これらの本質が確定されることはないが」というのは、「毒などの本質が確定されることはないが」ということである。「それら**を本質とすること**」というの**は**、「毒などを本性とすること」ということである。「**その能力が確定される**」というの**は**、「ありのままの状態の認識対象である実在者を認識させたり獲得させたりする能力が確定される」ということである。

### 1.3.2.2 主張 [1.2.2] の〈自らの言明との矛盾〉(svavacanavirodha)

[TSP 2838–2839.0] svavacanavirodhaṃ pratijñāyāḥ pratipādayann āha **kiṃcetyādi** /

[TSP 2838–2839.0] dam bca' ba rang gi tshig dang yang 'gal bar bstan pa'i phyir **gzhan yang** zhes bya ba la sogs pa smos te /

[TSP 2838–2839.0] [「全ての〈認知手段〉の〈真〉は自律的である」という] 主張には〈自らの言明との矛盾〉[という欠陥があること]を説明するために、[シャーントラクシタは] 第 2838 詩節と第 2839 詩節を述べている。

[TS 2838–2839]

**kiṃcāvivādam evedaṃ prāmāṇyaṃ śaktilakṣaṇam /**

**prāmāṇāntaraniśceyam ity evaṃ hi tvayoditam //2838//**

**śaktayaḥ sarvabhāvānāṃ kāryārthāpattisādhanā** <sup>59</sup>

**ity arthāpattiḥ siddhaṃ na siddhaṃ parataḥ katham //2839//**

**gzhan yang tshad ma'i nus mtshan nyid //**

**rtsod pa med pa nyid du 'dod //**

**tshad ma gzhan gyis nges byas zhes //**

**de ltar khyed kyis smras pa yin //**

**dngos po rnam kyis nus pa rnam //**

**'bras bu'i don gyis sgrub par byed //**

**des na don gyis go bas grub //**

**gzhan las mi 'grub ji ltar yin //**

さらにまた、「能力を特徴とする〈真〉は他の〈認知手段〉によって確定され得る」というこのことについて（私とあなたには）全く意見の相違はない。なぜなら、あなた（クマーリラ）は、次のように主張しているからである。

「全ての存在者の能力は、〈結果に基づく論理的要請〉を確立手段としている」<sup>60</sup>

したがって、（あなたにとって、能力を特徴とする〈真〉は、）論理的要請を通じて確立されるのだから、どうして他律的に確立されないだろうか。

<sup>59</sup>TS 1588ab.

<sup>60</sup>『ブリハッティーカー』からの引用。Cf. ŚV śūnya 254ab: śaktayaḥ sarvabhāvānāṃ kāryārthāpattikalpikā /



[TSP 2838–2839.1] **na siddham parataḥ katham** iti / siddham eva, arthāpatteḥ pramāṇāntaratvād iti bhāvaḥ //

[TSP 2838–2839.1] **ji ltar gzhan las grub ma yin** zhes bya ba ni grub pa kho na ste don gyis go ba ni tshad ma gzhan yin no snyam du bsams pa yin no //

[TSP 2838–2839.1] 「**どうして（〈真〉は）他律的に確立されないだろうか**」について。「必ず〔他律的に〕確立される。なぜなら、論理的要請は他の〈認知手段〉であるからである。以上のことが〔この表現の〕意味の根底にある。

### 1.3.2.3 クマーリラは〈真〉の成立と確立の問題を混同している

[TSP 2840.0] yad uktaṃ **tad eva hi vināśyeta**<sup>61</sup> iti tasyānaikāntikatvaṃ pratipādayann āha **niṣpannetyādi** /

[TSP 2840.0] **de nyid 'jig pa kho nar 'gyur** zhes bya ba ste ma nges pa nyid du bstan pa'i phyir **rang gi rgyu las** zhes bya ba la sogs pa smos te /

[TSP 2840.0] 「**なぜなら、（依存性が認められるとき、）それ（〈真〉）そのものが失われてしまうだろうからである**」というように〔クマーリラは第 2813 詩節後半で理由を〕述べていたが、それは〔〈真〉の自律性について〕不確定であることを説明するために、〔シャーンタラクシタは〕第 2840 詩節を述べている。

[TS 2840]

**niṣpannānaṃśarūpasya pramāṇasya**<sup>27)</sup> svahetutaḥ /  
**tad evaṃ na vināśāptir niścaye 'nyavyapekṣaṇāt** //2840//

**rang gi rgyu las tshad nyid ni** //

**cha shad med par grub yin na** //

**de ltar yin dang rtsod med de** /

**des bskyed gzhan la ltos**<sup>(87)</sup> **pa'i phyir** //

したがって、〈認知手段〉は、その無部分の本質が自らの原因を通じて既に実現されているのだから、このように〔クマーリラが主張するのとは違って〕、〔自らが〕確定されるために他に依存するからといって、消滅に至ることはない。

[TSP 2841.0] etad eva spaṣṭayann āha **na tat svabhāveti**yādi /

[TSP 2841.0] 'di nyid gsal bar bya ba'i phyir **de'i rang bzhin** zhes bya ba la sogs pa smos so //

[TSP 2841.0] まさに以上のことをはっきりさせるために、〔シャーンタラクシタは〕第 2841 詩節を述べている。

<sup>61</sup>TS 2813c.

<sup>27)</sup>pramāṇasya] em.; prāmānyasya TSms<sub>J</sub> TSms<sub>P</sub> TS<sub>BBS</sub> TS<sub>GOS</sub>

<sup>(87)</sup>ltos] D; bltos P

[TS 2841]

na tat svabhāvanīṣṭyāi pramāntaram apekṣate<sup>28)</sup> /tadrūpanīṣṭyārtham tu pratipattā vyapekṣate<sup>29)</sup> //2841//

rang gi ngo bo grub don du //

tshad ma gzhan la ltos<sup>(88)</sup> pa min //

de yi ngo bo nges don du //

rtogs po de la ltos<sup>(89)</sup> pa yin //

それ（〈認知手段〉）は、本性の実現のために、他の〈認知手段〉に依存することはない。そうではなくて、認識者が、それ（〈認知手段〉）の本質を確定するために、（他の〈認知手段〉に）依存するのである。

[TSP 2841.1] syād etat / yadi bhavatām jñānāpekṣayā parataḥ prāmāṇyaṃ sādhyate tadāsmākam api siddhasādhyatā / tathā hi jñānam apy arthāpattitas tāvat siddham iṣyate, kim aṅga punaḥ tacchaktirūpaṃ prāmāṇyam / arthaniṣṭyālakṣaṇe svakārye tu kartavye jñānaṃ nāpekṣata iti svatas tad ucyata iti /

[TSP 2841.1] 'di snyam du gal te shes pa la ltos nas tshad ma nyid du grub par byed pa de'i tshe kho bo cag la yang grub pa la sgrub pa yin te / 'di ltar re zhiḡ shes pa don gyis<sup>(90)</sup> go bas grub par 'dod de / nus pa de'i ngo bo tshad ma nyid smos kyang ci dgos / don nges pa'i mtshan nyid kyis 'bras bu bya ba la shes pa'i phyir ltos pa med pa yin pas de rang las zhes brjod pa

[TSP 2841.1] 次のような反論があるかもしれない。

【バツタ派】もし、あなたたち（仏教学派）が、〔それを〕認識することとの関連で「〈真〉は他律的である」ということを論証しているのであれば、その場合、〔「〈真〉は他律的である」という主張には、〕〈私たち（バツタ派）にとっても論証対象が既に確立されている〕〔という欠陥〕があることになる。すなわち、〔私たちは、〕まず、〔「能力だけでなく」認識も論理的要請を通じて確立される〕ということを知っている。「それ（認識）の能力を本質とする〈真〉が〔論理的要請を通じて確立される〕」〔ということを知っている〕ということは、言うまでもない。そうではなくて、〔私たちは、〕「対象確定を特徴とする自らの結果が作り出されるべきとき、認識は〔効果的作用の認識を始めとする他者に〕依存しない」ということを「それ（〈真〉）は自律的である」と表現しているのである<sup>62)</sup>。

<sup>62)</sup>クマーリラの〈認知手段〉の働きの自律性の主張、及び、ウンペーカの注釈を念頭に置いている。

TT codanā 48 (55: 14–17): nanu gr̥hītam avyabhicārakhyam prāmāṇyaṃ svakāryam karoti / arthakriyāsaṃvādāditayā ca tad\*<sup>1</sup> gr̥hyeta / tasyāś ca vede 'sattvāt prāptaṃ punar apy\*<sup>2</sup> aprāmāṇyam ity\*<sup>3</sup> āśaṅkyāha ātmalābha iti / naiva hi pramāṇam svakārye svagrahaṇam\*<sup>4</sup> apekṣate, agr̥hītaprāmāṇyād api vijñānād viṣayaparicchēdasiddheḡ // \*<sup>1</sup>tad] TT; om. TTms<sub>S</sub> \*<sup>2</sup>apy] TT; om. TTms<sub>S</sub> \*<sup>3</sup>ity] TTms<sub>S</sub>; ity aprāmāṇyam TT \*<sup>4</sup>-grahaṇam] TT; -graham TTms<sub>S</sub> (「【反論】〈非逸脱性〉という〈真〉は、〔他の〈認知手段〉によって〕把握されたとき自らの結果（対象画定）を生み出す。また、効果的作用との整合性によって、それ（〈真〉）は把握され得る。そして、それ（効果的作用との整合性）はヴェーダ聖典には存在しないという理由から、まだなお〔ヴェーダ聖典に〕〈偽〉が結果する。【回答】以上の反論を想定して〔クマーリラは〕『シュローカヴァールッティカ』「教令スートラ」章第 48 詩節を述べている。実に、〈認知手段〉が自らの結果を生み出すために自らが把握されることを必要とするということは決してない。なぜなら、その〈真〉がまだ把握されていない認識を通じて、対象画定が成立するからである」)

<sup>28)</sup>apekṣate] TSms<sub>J</sub> TSms<sub>P</sub>; apekṣyate TS<sub>BBS</sub> TS<sub>GOS</sub>

<sup>29)</sup>pratipattā vyapekṣate] em.; pratipattāv apekṣyate TS<sub>BBS</sub> TS<sub>GOS</sub>; pratipattā tad apekṣate TSms<sub>J</sub> TSms<sub>P</sub>

<sup>(88)</sup>ltos] D; bltos P

<sup>(89)</sup>ltos] D; bltos P

<sup>(90)</sup>gyis] D; gyi P

[TSP 2841.2] tad etad asamyak, prāmāṇyaniścayam antareṇa svārthaniścayasyaivāsambhavāt / saṃśayādi-  
viṣayīkr̥tasya ca katham̐ kārye nirapekṣatā, pramāṇāntaragrahaṇāpekṣāyām vā katham̐ svapakṣe 'navasthā  
na syād iti yat<sup>30)</sup> kiṃcid etat //

[TSP 2841.2] de ni yang dag pa ma yin te / tshad mar nges pa med par rang gi don nges pa nyid mi srid  
pa'i phyir ro // the tshom la sogs pa yul du byas pa yang ji ltar rang gi 'bras bu la ltos<sup>(91)</sup> pa med pa  
yin // tshad ma gzhan gyis<sup>(92)</sup> bzung ba la ltos<sup>(93)</sup> na yang ji ltar rang gi phyogs la yang thug pa med par  
mi 'gyur te / de ltar na 'di ni gyi na'o //

[TSP 2841.2] 【回答】上記のこの〔反論〕は正しくない。なぜなら、〔認識自身の〕〈真〉の確定が生じていないのに、〔認識〕自身の対象の確定だけが生じるということとはあり得ないからである。そして、〔認識は、〕疑惑などによって対象とされているとき、どうして〔対象確定という〕結果を生み出すために〔効果的作用の認識を始めとする他者に〕依存しないだろうか。或いは、〔認識が結果を生み出すために〕他の〈認知手段〉による把握に依存している場合、どうして、〔クマリーラ〕自身の側において無限連鎖が起こらないだろうか。以上のことはほんの些細な問題に過ぎない。

### 1.3.3 主張 [1.2.1] [1.2.2] の理由の〈不確定性〉(anaikāntikatva)

[TSP 2842–2845.0] kiṃcetyādīnā hetos tadbhāvanīyatatvād ity etasyānaikāntikatām udbhāvayati / tathā  
saṃvādasāmarthyam niśceyam anyata iti vartate / samaṃ dvayam iti pramāṇam apramāṇam ca / viparyayād  
ity aprāmāṇyāt /

[TSP 2842–2845.0] **gzhan yang** zhes bya ba la sogs pas de'i ngo bor nges pa'i phyir zhes bya ba'i gtan  
tshigs 'di ma nges pa nyid du ston pa yin te /

[TSP 2842–2845.0] 第 2842 詩節から第 2845 詩節までで〔シャーンタラクシタは〕「〔認識などは〕  
X の特性の中に制約されているから」(tadbhāvanīyatatva)<sup>63</sup> というこの理由が不確定であるとい  
うことを指摘している。

[TS 2842–2845]

kiṃcāprāmāṇyam apy evaṃ svata eva prasajyate /

na hi svato 'satas tasya kutaścid api sambhavaḥ //2842//

anapekṣatvam evaikam aprāmāṇyanibandhanam /

ityādy atrāpi niḥśeṣam abhidhātum hi śakyate //2843//

visaṃvādanasāmarthyam niśceyam tu yathānyataḥ /

tathā saṃvādasāmarthyam sarvathātaḥ samaṃ dvayam<sup>31)</sup> //2844//

tataḥ ko 'tīśayo dṛṣṭaḥ prāmāṇyasya viparyayāt /

yena svatas tad eveṣṭam paratas tv apramāṇatā //2845//

<sup>63</sup>[TSP 2810.6] の論証式を参照せよ。

<sup>30)</sup>yat] TSP<sub>BBS</sub> TSP<sub>GOS</sub> TSP<sub>msJ</sub>; yat tu TSP<sub>msP</sub>

<sup>31)</sup>-rthyam sarvathātaḥ samaṃ dvayam] TS<sub>BBC</sub> TS<sub>GOS</sub>; -rthyam sarvathāto dvayam samam TS<sub>msJ</sub>; -rthyam niścayam tu yathānyo TS<sub>msP</sub>

<sup>(91)</sup>ltos] D; bltos P

<sup>(92)</sup>gyis] D; gyi P

<sup>(93)</sup>ltos] D; bltos P

gzhan yang tshad ma nyid min<sup>(94)</sup> yang //  
 de ltar rang nyid las thal 'gyur //  
 rang las tshad ma min med na //  
 gzhan las kyang ni srid ma yin //  
 ltos<sup>(95)</sup> pa med pa gcig kho na //  
 tshad min nyid kyi rgyu mtshan yin //  
 de lta bu sogs 'dir yang ni //  
 ma lus brjod par nus ma yin //  
 slu bar byed pa'i nus pa ni //  
 ji ltar gzhan las nges pa yi //  
 de ltar mi slu'i<sup>(96)</sup> nus pa nyid //  
 des na rnam kun gyi gnyis mtshungs //  
 bzlog pa de las tshad nyid la //  
 phul du byung ba ci zhig snang //  
 gang gis rang las de nyid dang //  
 gzhan las tshad ma min pa 'dod //

そしてまた、〈偽〉も（〈真〉と）同様に必ず自律的であるということが帰結する。なぜなら、自律的に存在していないならば、それ（〈偽〉）は何から生じえないからである。

実に、「ただ一つ、非依存性だけが〈偽〉の根拠である」などというように、これ（〈偽〉）についても、完全に言うことができる<sup>64</sup>。

一方、非整合知（〈非認知手段〉）の能力が他律的に確定されるべきであるのと同様に、整合知（〈認知手段〉）の能力も（他律的に確定されるべきである）。このことから、（〈認知手段〉と〈非認知手段〉の）二つは、全面的に同じである。

それゆえに、反対のもの（〈偽〉）に対して〈真〉にどのような卓越性があることが経験されるだろうか。（もしそのような何らかの卓越性が経験されるのであれば、）その（卓越性）によって、それ（〈真〉）のみが自律的であり、〈偽〉の方は他律的であるということになるだろうか。

[TSP 2842–2845.1] *tathā saṃvādasāmarthyam niśceyam anyata iti vartate / samaṃ dvayam iti pramāṇam apramāṇam ca / viparyayād ity aprāmāṇyāt /*

<sup>64</sup> 『タットヴァサングラハ』第2812詩節から第2815詩節までに引用している、クマーリラによる〈真〉の自律性の論証は、全て〈偽〉についてもそのまま適用できる」ということを、クマーリラの言明そのものを〈真〉を〈偽〉に置き換えて利用することで、シャーントラクシタは示している。

TS 2812cd: na hi svato 'satī śaktiḥ kartum anyena pāryate //

TS 2842cd: na hi svato 'satas tasya kutaścid api sambhavaḥ //

TS 2813ab: anapekṣatvam evaikam prāmāṇyasya nibandhanam /

TS 2843ab: anapekṣatvam evaikam aprāmāṇyanibandhanam /

<sup>(94)</sup> min] P; ma ni]D

<sup>(95)</sup> ltos] D; bltos P

<sup>(96)</sup> slu'i] D; bslu'i P

[TSP 2842–2845.1] **de bzhin mi slu'i**<sup>(97)</sup> **nus pa yang** zhes bya ba ni **gzhan las nges** zhes bya ba dang sbyar ro // **gnyi ga mtshungs** zhes bya ba ni tshad ma dang tshad ma ma yin pa'o // **bzlog pa las** zhes bya ba ni tshad ma nyid ma yin pa las so //

[TSP 2842–2845.1] 「同様に、整合知の能力も」という表現の後に「他律的に確定されるべきである」という表現が継起する。「二つは（全面的に）同じである」という表現における二つとは、〈認知手段〉と〈非認知手段〉のことである。「反対のものに対して」とは「〈偽〉に対して」ということである。

## カマラシーラの補遺 K3 その他の自律的真理論の解釈とそれらの批判

### K 3.1 自律的真理論解釈（A）及びその批判

#### K 3.1.1 自律的真理論解釈（A）

[TSP 2842–2845.2] yo 'pi manyate / na nityatvāc chaktīnām svābhāvikatvam, nāpi svahetubhya evotpat-ter uttarakālaṃ kāraṇāntarānapekṣaṇāt / kiṃ tarhi svabhāvata eva bhāvānām pratiniyatarūpāḥ śaktayaḥ samudbhavantī svābhāvikatvam āsām<sup>32)</sup> / tathā hi yad eva svātmani rūpam asti kāraṇānām tad eva taiḥ kārye samādhyate / yathā kapālair<sup>33)</sup> upajanyamāne ghaṭe rūpādayaḥ svaguṇadvāreṇaiva prārabhyante / udakādyaḥaraṇaśaktis tu tair ātmany avidyamānatvān nādhīyate ghaṭe / svata eva tu sā tasya prādur-bhavati / tathā jñāne 'pi tatkāraṇair indriyādibhir arthaparicchedaśaktir ātmany avidyamānatvān nādhīyate / svata eva sā tasya bhavatyī atāḥ svābhāvikī śaktir iti /

[TSP 2842–2845.2] gang yang nus pa rnams ni rtag pa'i phyir rang bzhin can<sup>(98)</sup> ma yin la / dus phyis rgyu gzhan la mi ltos pa'i phyir rang gi rgyu dag kho na las skye ba ni ma yin no // 'o na ci zhe na / dngos po rnams kyi nus pa yang ma nges pa'o // de yang nus pa rnams ni rang kho na las skye ba'i phyir 'di dag ni rang bzhin can yin no // 'di ltar bdag nyid la rgyu rnams kyi<sup>(99)</sup> ngo bo yod pa gang yin pa de kho na de dag gi 'bras bu la byed pa yin te / dper na 'ji ba'i dum bus bskyed par bya ba'i bum pa la gzugs la sogs pa rang gi yon tan gyi sgo kho na nas rtsom par byed pa bzhin no // chu la sogs pa 'dzin pa'i nus pa ni bdag la yod pa ma yin pa'i phyir de dag gis bum pa la byed pa ma yin gyi de'i de ni rang nyid kyi skye ba yin no // de bzhin du shes pa la yang dbang po dang don la sogs pa de'i rgyu rnams kyis bdag nyid la byed pa'i phyir don yongs su gcod pa'i nus pa byed pa ma yin gyi / de'i de ni rang kho na las yin pa'i phyir des na nus pa rang bzhin can yin no zhes rlom pa

[TSP 2842–2845.2] 次のように考えている者もいる<sup>65</sup>。

【自律的真理論解釈者（A）】能力は、「常住である」という理由から本性的であるということもなければ、「自らの原因のみから生じた後の時間において別の原因に依存しない」という理由から〔本性的であるということ〕もない<sup>66</sup>。そうではなくて、「〔或る存在者たちの〕本性から〔それらの〕存在者たち〔自体〕に特定の本質を持つ能力が生じる」という理由から、これら（能力）は

<sup>65</sup>以下の自律的真理論の解釈に対する批判は、それらの解釈に関するウンベーカーの紹介と批判を援用し、その批判部に仏教の理論を盛り込むことで形成されている。

<sup>66</sup>シャーントラクシタが立てた「本性的」(svābhāvika) という語の意味の解釈の選択肢 (A) と (B) を否定している。

<sup>32)</sup>āsām] TSP<sub>BBS</sub> TSP<sub>GOS</sub> TSP<sub>msJ</sub>; āśām TSP<sub>msP</sub>

<sup>33)</sup>kapālair] TSP<sub>BBS</sub>; kápālair TSP<sub>GOS</sub> TSP<sub>msJ</sub> TSP<sub>msP</sub>

<sup>(97)</sup>slu'i] D; bslu'i P

<sup>(98)</sup>can] D; om. P

<sup>(99)</sup>kyi] P; kyis D

本性的なのである。すなわち、複数の或る原因自らに存在する本質のみを、それら〔の原因〕は〔一つの〕結果の中に与える。例えば、複数の〈壺の断片〉(kapāla)は、自らの性質(色など)のみを通じて、それらが生み出している〔一つの生の〕壺の中に、色などを形成する。一方、〔一つの壺が持つ〕水などを運ぶ能力は、〔それらの〈壺の断片〉〕自体に存在していないから、それら(〈壺の断片〉)が壺の中に与えることはない。そうではなくて、その〔能力〕は、それ(一つの壺)の中に必ず自律的に生じるのである。それと同様に、認識の場合にも、対象を画定する能力は、自らに存在していないから、感覚器官を始めとする複数の〈それ(認識)の原因〉が〔認識の中に〕与えることはない。その〔能力〕はそれ(認識)の中に必ず自律的に生じるのである。以上の理由から、能力は本性的なのである<sup>67</sup>。

### K 3.1.2 自律的真理論解釈 (A) に対する批判

#### K 3.1.2.1 〈偽〉も自律的になってしまう

[TSP 2842–2845.3] tasyāpy etat pralāpamātram, anena nyāyenāprāmānyasyāpi svata eva prasaṅgāt / tathā hi tad api viparītārthaparicchedādīśaktīlakṣaṇam / na ca nayanādīnām tathāvidhaśaktiyogo 'stīti /

[TSP 2842–2845.3] de'i<sup>(100)</sup> de ni bla<sup>(101)</sup> col tsam yin te / rigs pa 'di tshad ma ma yin pa nyid kyang rang nyid las yin par thal bar 'gyur ba'i phyir te / 'di ltar de ni phyin ci log gi don yongs su gcod pa'i mtshan nyid can yin la mig la sogs pa rnam ni rnam pa de lta bu'i nus pa dang ldan pa yang ma yin no //

[TSP 2842–2845.3] 【解釈 (A) 批判】彼の上記〔の解釈 (A)〕も、単なるお喋りに過ぎない。なぜなら、この同じ道理によって〈偽〉も必ず自律的であることになってしまうからである。すなわち、それ(〈偽〉)も〈反対の対象を画定するする能力〉などを本質としている<sup>68</sup>。そして、視覚器官などがそのような能力と結び付くことはない<sup>69</sup>。

<sup>67</sup>Cf. TṬ on ŚV codanā 47 (49: 3–6): aparā āha / kāraṇaguṇapūrvaprakrameṇa<sup>\*1</sup> kārye guṇārambhaḥ / na ca vijñānakāraṇānam indriyādīnām abodharūpāṇām bodhākhyasaktir asti / tenocyate na svato vijñāne bodharūpatā asatī kartum anyenendriyādīnā śakyate, teṣu tasyā abhāvād iti / aprāmānyam punar abodharūpam<sup>\*2</sup> / tac cānavabodharūpaiḥ<sup>\*3</sup> kāraṇaiḥ śakyakriyam iti / <sup>\*1</sup>-guṇapūrvapra- TṬms; -guṇapra- TṬ <sup>\*2</sup>-abodha TṬ; nāvabodha- TṬms; <sup>\*3</sup>-bodharūpaiḥ TṬ; -bodhaiḥ TṬms (「他の者たちは〔『シュローカヴァールツェチカ』第2章第47詩節の解釈について〕次のように述べている。前から原因の中にある性質の〔結果への〕転移によって結果の性質が作り出される。そして、感覚器官などの認識原因は理解を本質としないから、〔認識原因には〕「理解」という能力は存在しない。そのことに基づいて、「自律的に認識に存在していない〈理解を本質とすること〉を〔認識〕以外のものである感覚器官などが〔認識の中に〕作り出すことはできない。なぜなら、それら(感覚器官など)にはそれ(〈理解を本質とすること〉)は存在しないからである」と〔クマーリラは『シュローカヴァールツェチカ』第2章第47詩節後半で〕述べているのである。一方、〈偽〉は理解を本質としない。そして、それ(〈偽〉)は、理解を本質としない原因が作り出すことができる」)

<sup>68</sup>クマーリラが〈真〉として言及している「〈認識対象を理解させる能力〉など」に対して、カマラシーラは、「など」という語によって、認識の原因の〈対象と対応した認識を生み出す能力〉とヴェーダ教令の〈超感覚的対象を理解させる能力〉が含意されていると解釈した(TSP on TS 2012)。そのことに基づく類推からは、この「など」という語で、錯誤知の原因(欠陥そのもの、もしくは、欠陥によって損傷された〈認識の原因〉)の〈対象と対応していない認識を生み出す能力〉(ayathārthajñānananaśakti)が含意されているのであろう。

<sup>69</sup>したがって、視覚器官などは自らが持たない〈偽〉を認識の中に与えることができないから、クマーリラの意図に反して、〈偽〉も認識にとって本性的であるということになってしまう。

<sup>(100)</sup>de'i] D; om. P

<sup>(101)</sup>bla] P; bab D



### K 3.1.2.2 〈認識性〉と対象画定能力の同等性

[TSP 2842–2845.4] *kiṃca yady ātmany avidyamānaṃ rūpaṃ<sup>34)</sup> kāraṇair nādhīyate kārye, tadā katham indriyādayo jñānarūpatām<sup>35)</sup> ātmany asatīm ādadhati vijñāne / athāvidyamānāpi<sup>36)</sup> sā tair ādhīyate,<sup>37)</sup> arthaparicchedaśaktiṃ kiṃ nādadhīran / na hi tadādhāne teṣāṃ kaścit pratiroddhā /*

[TSP 2842–2845.4] *gzhan yang gal te bdag nyid la yod pa ma yin pa'i ngo bo'i rgyu dag gis 'bras bu la mi byed pa de'i tshe dbang po la sogs pa bdag nyid la yod pa ma yin pa zhes bya ba'i ngo bo nyid ji ltar shes pa la byed / yang yod pa ma yin pa de yang de dag gis byed na yongs su gcod pa'i nus pa ci'i phyir byed par mi 'gyur / de dag de byed pa la gegs byed pa ni 'ga' yang yod pa ma yin no //*

[TSP 2842–2845.4] そしてさらに、もし「自らに存在していない本質を複数の原因が〔一つの〕結果に与えることはない」とするなら、その場合、どうして、感覚器官などは、〈認識性〉(jñānarūpatā 「認識を本質とすること」)を、それが自らに存在していないにもかかわらず、認識の中に与えるだろうか。またもし「〔自らに〕存在していないにもかかわらず、それら(感覚器官など)はそれ(〈認識性〉)を〔認識の中に〕与える」とするなら、どうして、〔感覚器官などは〕対象画定能力を与えることができないだろうか。なぜなら、それ(対象画定能力)を与えることに関して、それら(感覚器官など)を妨げるものは何もないからである<sup>70)</sup>。

#### 1.3.3.1.2.3 能力が能力保持者と異なる場合：能力は本性的はない；異なる場合：能力保持者が抛り所ではなくなる

[TSP 2842–2845.5] *kiṃca yadi tāvad avyatiṛeṅyaḥ śaktayo bhāvād abhyupagamyante, tadā bhāvasvarūpavat tāsām api hetupratibaddhaivātmasthitir<sup>38)</sup> iti kutaḥ svābhāvikatvam āsām / atha vyatiṛeṅyaḥ tadā svayam eva bhāvān na svāśrayais tāsām sambandhaḥ sidhyati, teṣāṃ tadanupakāratvāt<sup>39)</sup> / na cānupakāraka āśrayo yuktaḥ, atiprasaṅgāt /*

[TSP 2842–2845.5] *gzhan yang re zhiḡ gal te dngos po las nus pa tha mi dad par khas len par byed na / de'i tshe dngos po'i rang gi ngo bo bzhin du de dag kyang bdag nyid gnas pa rgyu la rag pa nyid yin pa'i phyir gang las 'di dag rang bzhin can yin / 'on te tha dad pa yin na de'i tshe rang nyid kyis 'byung ba'i phyir de dag rang gi rten dang 'brel ba grub par mi 'gyur te / de dag ni de la phan 'dogs par byed pa yang ma yin pa'i phyir ro<sup>(102)</sup> // phan 'dogs par mi byed pa yang rten du rigs pa ma yin te / ha cang thal bar 'gyur ba'i phyir ro //*

[TSP 2842–2845.5] そしてさらに、まず、もし「能力は存在者と異なる」という〔見解〕を承認するならば、その場合、存在者の本質と同様に、それら(能力)も、必ず原因に縛り付けられる形でのみ、その本質の成立があるのだから、どうしてこれら(能力)は本性的であろうか<sup>71)</sup>。また

<sup>70)</sup> 〈認識性〉は対象画定能力と同様に、認識には存在するが、感覚器官などにはない。感覚器官などは認識ではないから。感覚器官などが認識性を作り出さないとすれば、認識の原因ではないことになる。一方、自らにない本質を作り出すなら、能力も作り出すだろう。仏教徒が同一視する本質と能力の二つに区別を設定している輩に対する皮肉とも取れる。

<sup>71)</sup> 結果と異なる能力は、結果の本質と同じく、原因に対して〈因果関係〉という必然的關係を持つことになるから、本性由来ではなく他者由来になる。

<sup>34)</sup> -mānaṃ rūpaṃ] TSP<sub>BBS</sub> TSP<sub>GOS</sub>; -mānarūpaṃ TSP<sub>ms<sub>J</sub></sub> TSP<sub>ms<sub>P</sub></sub>

<sup>35)</sup> jñānarūpa-] TSP<sub>ms<sub>J</sub></sub>; jñāne rūpa- TSP<sub>BBS</sub> TSP<sub>ms<sub>P</sub></sub>; jñāne(na?) rūpa- TSP<sub>GOS</sub>

<sup>36)</sup> athā-] TSP<sub>BBS</sub> TSP<sub>ms<sub>J</sub></sub>; ta(ya?)thā- TSP<sub>GOS</sub>; tathā- TSP<sub>ms<sub>P</sub></sub>

<sup>37)</sup> ādhīyate] TSP<sub>BBS</sub> TSP<sub>GOS</sub> TSP<sub>ms<sub>J</sub></sub>; ānidhīyate TSP<sub>ms<sub>P</sub></sub>

<sup>38)</sup> -baddhaivātmā-] TSP<sub>ms<sub>J</sub></sub>; -pratibaddhair ātma- TSP<sub>BBS</sub> TSP<sub>GOS</sub> TSP<sub>ms<sub>P</sub></sub>

<sup>39)</sup> -kāraka- TSP<sub>BBS</sub> TSP<sub>GOS</sub> TSP<sub>ms<sub>J</sub></sub>; -kārīka- TSP<sub>ms<sub>P</sub></sub>

<sup>(102)</sup>ro] D; om. P

もし「〔能力は存在者と〕異なる」〔という見解を承認する〕ならば、〔能力は、他に依拠せずに〕それ自体で存在することになるから、それら（能力）の自らの拠り所（存在者）との関係が成立しないことになる。なぜなら、それら〔の拠り所〕はそれら（能力）の非扶助者（anupakāraka）になるからである。そして、非扶助者〔である存在者〕が拠り所になるということは不合理である。というのは、〔拠り所たること〕の過大適用になってしまうからである。

### K 3.1.2.4 能力の時空的制約がなくなってしまう

[TSP 2842–2845.6] *kiṃca animittāḥ svāntryeṇaitā bhavantyo na deśakālaniyamam apekṣeran / tathā hi yasya kiṃcit<sup>(40)</sup> kvacid āyattam anāyattam vā bhūtvopālīyate<sup>(41)</sup> na vā, yat punar anāyattam svāntryeṇa pravṛttam, tat kim iti kadācit kvacid viramet / tatas ca pratiniyatasaktiyogitā bhāvānām na syāt, anyathā sarvasya sarvatropayogaḥ syād iti /*

[TSP 2842–2845.6] *gzhan yang rgyu mtshan med par rang dbang nyid kyis gyur pa yin na yang yul dang dus nges pa la ltos<sup>(103)</sup> par mi 'gyur te / 'di ltar gang zhig 'ga' zhig tu cung zad rag las pa'am / rag ma las pa de ni de la ltos<sup>(104)</sup> pa med pa'am / yang na ma yin te / gang yang rag ma las pa rang dga'<sup>(105)</sup> 'jug pa de ci'i phyir res 'ga' 'ga'<sup>(106)</sup> zhig tu ldog par 'gyur / de lta yin dang dngos po rnams so sor nges pa'i nus pa dang ldan par mi 'gyur la gzhan du na thams cad thams cad la nye bar sbyor bar 'gyur ro //*

[TSP 2842–2845.6] そしてまた、これら（能力）は、原因を持たずに自律的に存在しているとするなら、〔結果を生み出すために〕場所と時間の制約に依存することはないはずである。すなわち、或るもの X の中に何らか〔の特定の属性 Y〕が何らか〔の特定のもの Z〕に依存するか依存しないかして生じた後で消滅する、或いは、そうではない。一方で、X は何にも依存せずに自律的に発動する。その場合、X は、どうして、或る時間、或る場所で停止するだろうか。そして、そのことから、諸々の存在者は、それぞれ特定の決まった能力と結び付くことはないだろう。そうでなければ、あらゆるものがあらゆるものに対して資することになってしまうだろう<sup>72</sup>。

## K 3.2 自律的真理論解釈 (B) 及びその批判

### K 3.2.1 自律的真理論解釈 (B)

[TSP 2842–2845.7] *anye tu manyante / satkāryadarśanam āśrityedam ucyate svataḥ sarvapramāṇānām ityādi / yataḥ sarva eva bhāvāḥ santa eva kāraṇaiḥ kriyante, kāryotpādaniyamāt / na hy asanto vyomakusumādayaḥ kvacid api śakyante kartum, sikatāsu vā tailam / asata utpattau sarvasyāsattve 'tiśayābhāvāt sarvadā sarvatra cotpattiḥ syād iti /*

[TSP 2842–2845.7] *gzhan dag ni 'bras bu yod par lta ba la brten nas / tshad ma kun gyi<sup>(107)</sup> tshad ma nyid ces bya ba la sogs pa 'di brjod de / 'di ltar 'bras bu skyed par nges pa'i phyir dngos po yod pa rnams kho na rgyu dag gis byed kyis<sup>(108)</sup> / med pa nam mkha'i me tog la sogs pa'am / bye ma rnams la til mar*

<sup>72</sup>Cf. [2842–2845.25]

<sup>40</sup>kiṃ-] TSP<sub>BBS</sub> TSP<sub>msJ</sub> TSP<sub>msP</sub>; yat kiṃ- TSP<sub>GOS</sub>

<sup>41</sup>vā bhūtv-] TSP<sub>BBS</sub> TSP<sub>GOS</sub>; vāttavo- TSP<sub>msJ</sub>; vābhūtvavo- TSP<sub>msP</sub>

<sup>(103)</sup>ltos] D; bltos P

<sup>(104)</sup>ltos] D; bltos P

<sup>(105)</sup>dga'] P; 'ga' D

<sup>(106)</sup>'ga' 'ga'] D; 'ga' P

<sup>(107)</sup>gyi] D; gyis P

<sup>(108)</sup>kyis] D; kyi P

ni gang du yang bya bar nus pa ma yin te / med pa skye<sup>(109)</sup> na med par khyad par med pa'i phyir thams cad thams cad kyi tshe thams cad du skye bar 'gyur ro snyam du sems pa

[TSP 2842–2845.7] 一方、他の人たちは次のように考えている。

【自律的真理論解釈者 (B)】〔クマーリは、〕因中有果論を認めた上で「全ての〈認知手段〉の〔〈真〉は〕自律的である、云々」と述べているのである。というのは、全ての存在者は残らず、〔もともと質料因の中に〕存在しているからこそ、諸々の原因によって作り出されるのである。というのも、結果の発生が制約されているからである。実に、〔もともと何処にも〕存在していない空華などは、何処にも作り出され得ないし、また、砂の中に〔もともと存在していない〕胡麻油は〔砂の中に作り出され得ない〕。〔全ての結果はもともと〕存在していないにもかかわらず生じるとするなら、どの〔結果〕も〔もともと〕存在していないという点で卓越性がない (atiśayābhāva) ので、〔全ての結果が〕あらゆる時間にあらゆる場所で生じることになるだろう<sup>73</sup>。

### K 3.2.2 自律的真理論解釈 (B) に対する批判

#### K 3.2.2.1 因中有果論批判

##### K 3.2.2.1.1 原因が無意味になってしまう

[TSP 2842–2845.8] tad etad ayuktam, kāraṇavaiarthyaprasaṅgāt / asat tāvad bhavanmate na kiṃcit kriyate / sato 'pi sarvanirāśaṃsatvān na kiṃcit kartavyam astīti kiṃ hi kurvat<sup>42)</sup> tasya tat kāraṇaṃ bhavet / ataḥ kāryakāraṇatvābhāvaprasaṅgaḥ /

[TSP 2842–2845.8] de ni mi rigs te / rgyu don med par thal bar 'gyur ba'i phyir ro // re zhig khyod kyi lugs kyi cung zad kyang med pa byed pa ma yin la / yod pa yang ltos pa thams cad dang bral ba'i phyir cung zad kyang byar yod pa ma yin pas ci zhig byed pa na de'i byed pa por 'gyur / de bas na rgyu dang 'bras bu nyid med par 'gyur ro //

[TSP 2842–2845.8] 【解釈 (B) 批判】上記のこの〔解釈〕は不合理である。なぜなら、〔因中有果論を認めた場合には、〕原因が無意味になってしまうからである。まず、あなたの考えでは、〔原因によって、もともと〕存在しないものは何も作り出されることはない。〔そして、もともと〕存在しているものも〔自らが生じるために原因を〕何も期待しないのだから、〔それの中に原因によって〕作り出されるべきものは何もないということになる。したがって、〔結果の中に〕いったい何を作り出すから、それ（原因）はそれ（結果）の実現者になるのだろうか。このことから、〔結果と原因の間に〕因果関係がなくなってしまう。

<sup>73</sup>Cf. TT on ŚV codanā 47 (48: 15–48: 18): kecid evam āhuḥ / sarva eva bhāvāḥ svataḥ santa eva kārakāḥ kriyante, nāsantaḥ, kāryotpādaniyamāt / na hi svato 'vidyamānāḥ śaśaviśānādayaḥ kvacid api śakyante kartum, sikaṭāsu vā tailam / asadutpattau tu sarvatrāsattve niyamābhāvād utpattiḥ syād iti / （「或る者たちは『シュローカヴァールツェイカ』第 2 章第 47 詩節の解釈について）次のように述べている。あらゆる全ての存在者は、自律的に〔もともと〕存在している〔事物〕が実現者たちによって作り出されるのであり、〔自律的にもともと〕存在していない〔事物〕が実現者たちによって作り出されるのではない。なぜなら、結果の発生が制約されているからである。じつに、〔どこにも〕自律的に〔もともと〕存在していないウサギの角などは、どこにも作り出されることはあり得ない。あるいは、砂において〔自律的にもともと存在していない〕油は〔作り出されることはあり得ない〕。一方で、〔仮に、自律的にもともと〕存在していない〔事物〕が生じるとするならば、〔何かが〕ないことに制約がないことになるから、あらゆる〔原因〕において〔どのような結果でも〕生じることになってしまうだろう」

<sup>42)</sup>-vat] TSPmsJ; -vaṃs TSP<sub>BBS</sub> TSP<sub>GOS</sub>; -vvas TSP<sub>mSP</sub>

<sup>(109)</sup>skye] P; skyed D

### K 3.2.2.1.2 顕現理論は成立しない

#### K 3.2.2.1.2.1 顕現がもともと存在しているとしてもいないとしても成立しない

[TSP 2842–2845.9] abhivyaktiḥ sataḥ kriyata iti cen na, tasyā api sadasattvena karaṇavirodhāt / yatas tatrāpīdam vikalpadvayam avatarati / kiṃ sā satī kriyata āhosvid asaṭī / prathame pakṣe 'tiśayābhāvāt karaṇānupapattir ity uktam / tatrāpy abhivyaktyāśrayaṇe 'navasthāprasaṅgaḥ / nāpi dvitīyaḥ pakṣaḥ, asataḥ kriyānabhuyupagamāt / abhyupagame vā bhāvasyāpy asataḥ karaṇaprasaṅgāt /

[TSP 2842–2845.9] gal te yod pa mngon par gsal bar byed do zhe na / de ni ma yin te / de la yang yod pa dang med pa nyid byed pa 'gal ba'i phyir ro // 'di ltar de la yang ci ste yod pa byed dam / 'on te med pa byed ces rnam par rtog pa 'di gnyis 'jug pa yin te ci ste yod pa byed dam / 'on te med pa byed / de la phyogs dang po la ni khyad par med pa'i phyir byed pa mi 'thad do zhes bstan zin to // de la yang mngon par gsal ba la brten nas thug pa med par thal bar 'gyur ro // phyogs gnyis pa yang ma yin te med pa byed par khas mi len pa'i phyir ro // khas len na yang dngos po med pa byed par thal bar 'gyur ba'i phyir ro //

[TSP 2842–2845.9] 【反論】〔もともと〕存在しているものの中に顕現が作り出されるのである。

【回答】そのようなことはない。なぜなら、〔存在者だけでなく、〕それ（顕現）も、〔もともと〕存在しているとしても存在しないとしても、作り出されることは矛盾するからである。というのも、その場合でも、次のような二つの選択肢が導入される。

- (1) それ（顕現）は〔もともと〕存在しているから作り出される。
- (2) 〔顕現は〕もともと存在していないにもかかわらず作り出される。

最初の選択肢では、卓越性がないから、〔顕現が〕作り出されることは説明がつかない。このことは既に述べた<sup>74</sup>。仮にそのように顕現〔が作り出されること〕を認めた場合でも、無限連鎖が起こってしまう。また、第二の選択肢もない。なぜなら、〔あなたは、もともと〕存在しないものが作り出されるということを承認しないからである。或いは、〔あなたがそれを〕承認するなら、〔顕現だけでなく〕存在者も〔もともと〕存在しないにもかかわらず作り出されることになってしまうからである。

#### K 3.2.2.1.2.2 顕現が顕現保持者と異なる場合にも異なる場合にも成立しない

##### K 3.2.2.1.2.2.1 顕現が顕現保持者と異なる場合に成立しない

[TSP 2842–2845.10] kiṃca arthāntarabhūtā vā bhāvād abhivyaktiḥ kriyeta, anarthāntarabhūtā vā / yady arthāntarabhūtā kriyeta, tadā bhāvasya na kiṃcit kṛtaṃ syāt / na hy anyasya karaṇe 'nyat kṛtaṃ nāma,

<sup>74</sup>第1章「根本質料因の検討」(praktīparīkṣā)では、因中有果論に対して「確定知(niścaya)を生み出すための論証(sādhana)が無意味になる」という批判がなされている(TS 24–27)。それは、この「存在者(bhāva)を生み出すための原因(kāraṇa)が無意味になる」という批判とパラレルな関係にある。カマラシーラは、そこで用いた論理を自律的真理論解釈(B)批判でも、そのまま使い回している。

TSP on TS 26 (37: 6–10): api ca yo 'sāv atiśayaḥ pṛthagbhūtaḥ kriyate, sa kim asann āhosvit sann iti vikalpadvayam atrāpy avataraty eva / tatrāsate pūrvavat sādhanānam anaikāntikatāpattiḥ / sattve ca sādhanavaiyarthyaṃ / tatrāpy abhivyaktāv iṣyamānāyām keyam abhivyaktir ity anavasthāprasaṅgo durnirvārah / tasmād vyatirekapakṣe 'py asaṅgater asambandhān na rūpātiśayotpattir yujyate // (「さらにまた、〔確定知と〕別個なものとして作り出されるその卓越性は、〔もともと〕存在していないのか、それとも、〔もともと〕存在しているのかという二つの選択肢がここでも必ず導入される。それらのうち、〔もともと〕存在していないとすれば、前と同様に、論証は不確定であることになってしまう。また、〔もともと〕存在しているとすれば、論証は無意味になる。仮にそのように〔確定知の〕顕現(卓越性)を認めるとしても、この顕現はどうなるのか。〔さらなる顕現を要請する他はない。〕このように無限連鎖の帰結は回避し難い。それゆえに、「〔卓越性は確定知と〕異なる」という見解でも、整合性がないので無関連であるから、〔論証に基づく〕卓越の本質の発生は理に合わない」)

atiprasaṅgāt / tatsambandhiny abhivyaktiḥ kriyata iti cen na, anupakāryatayā tatsambandhitvāsiddheḥ / upakāre vābhūyapagamyamāne tasyāpy arthāntaratve 'navasthāprasaṅgāt sambandhāsiddhiḥ / anarthāntaratve 'pi kāraṇānām vaiyarthyaprasaṅgaḥ / bhāvād evāśrayabhūtād upakārasvabhāvāyā abhivyakter utpādān nityābhivyaktiprasaṅgaḥ, svabhāvasyābhivyaktikāraṇasya sarvadā vidyamānatvāt / nāpy anupakāryasya parāpekṣā yukteti pratipāditaṃ bahudhā /

[TSP 2842–2845.10] gzhan yang dngos po las don gzhan du gyur pa'i mngon par gsal bar byed dam / don gzhan du gyur pa ma yin pa byed grang / gal te don gzhan du gyur pa byed na de'i tshe dngos po la cung zad kyang byas par mi 'gyur ro // gzhan byed pa na gzhan byas pa ni ma yin te / ha cang thal bar 'gyur ba'i phyir ro // de dang 'brel ba'i mngon par gsal ba gzhan byed do zhe na / ma yin te / phan gdags par bya ba ma yin pa nyid kyis de dang 'brel ba ma grub pa'i phyir ro // phan 'dogs par byed par khas len na de yang don gzhan yin na thug pa med par thal bar 'gyur ba'i phyir 'brel ba ma grub la / don gzhan ma yin na yang rgyu rnam don med par thal bar 'gyur te / rten du gyur ba'i dngos po las phan 'dogs par byed pa'i rang bzhin gyi mngon par gsal ba skyed par byed pa'i phyir dang dngos po'i mngon par gsal ba'i rgyu thams cad kyi tshe yod pa'i phyir rtag tu mngon par gsal bar thal bar 'gyur ba'i phyir ro // phan 'dogs par bya ba ma yin pa gzhan la ltos<sup>(110)</sup> par yang rigs<sup>(111)</sup> pa ma yin no zhes rnam pa mang du bstan zin to //

[TSP 2842–2845.10] そしてまた、顕現は、〔仮に作り出されるとしても、〕(a) 存在者とは別の事物として作り出されるか、或いは、(b) 存在者とは別の事物ではないものとして〔作り出される〕かのいずれかであるはずである。

〔それらのうち、〕(a) 「〔顕現は存在者とは〕別の事物として作り出される」としよう。その場合、存在者の中に何かを作り出されたことにはならないだろう。なぜなら、或るもの X が作り出されるとき、他のもの Y が作り出されたということには決してならないからである。というのは、〔作り出される対象の〕過大適用になってしまうからである。

【反論】それ（顕現）と関係するから〔存在者の〕中に顕現が作り出されるのである。

【回答】そのようなことはない。なぜなら、〔存在者は〕扶助され得ない者であるので、〔存在者の〕それ（顕現）との関係が成立しないからである。或いは、〔存在者に対する顕現による〕扶助が認められるならば、それ（扶助）も別の事物であるので、無限連鎖が起こってしまうから、関係は成立しない<sup>75</sup>。〔顕現が存在者と〕別の事物ではないとした場合も、原因は無意味であることに

<sup>75</sup>TSP on TS 26 (36: 19–37: 5): atha prthagbhūtaḥ, evam api tasyāsāv iti sambandhānupapattiḥ / tathā hy ādhārādheyalakṣaṇo vā sambandho bhavet janyajanakabhāvalakṣaṇo vā / na tāvad ādyāḥ, parasparānupakāryopakārakayos tadasambhāvāt / upakāre vā tasyāpy upakāryasya vyatirekīte sambandhāsiddheḥ, anavasthāprasaṅgāt / avyatirekīte ca sādhanaprayogavaiyarthyam, niścayād evopakārāvyatirikṣayātiśayasyotpatteḥ / amūrtatvāc cātiśayasyādhahprasarpaṇāsamhāvān na tasya kaścid ādhāro yuktāḥ, adhogatipratibandhakatvenādhārasya vyavasthānāt / nāpi janyajanakabhāvalakṣaṇaḥ, sarvadaiva niścayākhyasya kāraṇasya sannihitavān nityam atīśayotpattiprasaṅgāt / na ca sādhanaprayogāpekṣayā niścayātiśayotpādatkaṭvaṃ yuktaṃ, anupakāriṇy apekṣānupapatteḥ / upakāritve vā pūrvavad doṣo 'navasthā ca / 「『またもし〔顕現 (vyakti) としての卓越的本性 (svabhāvātīśaya) が確定知と〕別個であるとするならば、このような場合も、『それ (確定知) のそれ (卓越的本性)』という第6格接辞が意味する〈関係〉は説明がつかない。すなわち、〔それらの間には〕(A) 〈保持者と被保持者の関係〉、或いは、(B) 〈因果関係〉のいずれかの関係があり得る。〔それらのうち、〕まず、(A) 〈保持者と被保持者の関係〉はない。なぜなら、相互に〈被扶助者と扶助者の関係〉にない二者の間にはそれ (保持者と被保持者の関係) は存在し得ないからである。或いは、扶助されるとしても、その扶助〔作用〕も、(A-1) 異なるとすれば、関係が成立しないからである。というのは、無限連鎖が起こってしまうからである。そして、(A-2) 異なることとすれば、論証式を述べることは無意味になる。なぜなら、確定知のみを通じて扶助と異なる卓越性が生じるからである。そして、卓越性は、無形態なので、下に這い進むことがあり得ないから、それ (卓越性) に何らかの保持者があることは不合理である。なぜなら、保持者は、下方進行を妨げるものとして確立されるからである。また、(B) 〈因果関係〉という〔関係〕もない。なぜなら、確定知と呼ばれる原因が近在しているせいでも、絶え間なく常に、卓越性が生じることになってしまうからである。さらに、論証を述べることに依存して、確定知が卓越性を生じさせるというものは不合理である。なぜなら、非扶助者に対する依存はあり得ないからである。或いは、仮に〔論証が確定知の〕扶助者であるとしても、前と同様に問題が起こるし、さらに無限連鎖も起こってしまう」

<sup>(110)</sup>ltos] D; bltos P

<sup>(111)</sup>rigs] D; rig P

なってしまう。まさに抛り所である存在者を通じて扶助を本性とする顕現が生じるのだから、常に顕現していることになってしまう。なぜなら、顕現の原因である本性はいつでも存在しているからである。また、「扶助され得ない者が他に依存することは不合理である」ということは既に何度も説明した<sup>76</sup>。

### K 3.2.2.1.2.2.2 顕現が顕現保持者と異なる場合にも成立しない

[TSP 2842–2845.11] athānarthāntarabhūtābhiviyaktiḥ kriyata iti pakṣaḥ, so 'py ayuktaḥ, atīśayābhāvāt / tathā hy anarthāntarabhūtā kriyata iti bhāvasvabhāvaḥ kriyata ity uktaṃ bhavati / tasya ca sattvena sarva-nīrāṃśasatvāt karaṇam ayuktam ity etad eva cintyate /

[TSP 2842–2845.11] ci ste don gzhan du mi 'gyur ba ma yin pa'i mngon par gsal ba byed pa'i phyogs de yang rigs pa ma yin te / khyad par du byar med pa'i phyir ro // 'di ltar don gzhan du gyur pa ma yin pa byed do zhes bya bas dngos po'i rang bzhin byed do zhes bstan pa yin la / de yang yod pa nyid kyis ltos<sup>(112)</sup> pa thams cad dang bral ba'i phyir<sup>(113)</sup> byed par mi rigs so zhes bya ba 'di nyid bsam par bya ba yin no //

[TSP 2842–2845.11] また、(b) 「〔存在者とは〕別の事物ではないものとして顕現が作り出される」という見解を取るとしても、その〔見解〕も不合理である。なぜなら、卓越性がないからである。すなわち、「〔存在者とは〕別の事物ではないものとして〔顕現が〕作り出される」という表現で、「存在者の本性が作り出される」ということが意図されていることになる。そして、それ（存在者の本性）は、存在しているのでどのようなものにも依存していないから、作り出されるということは不合理である。まさにこのように考察される。

### K 3.2.2.1.2.3 顕現が作り出されると仮定した場合：因中無果論になってしまう；顕現の無限連鎖になってしまう

[TSP 2842–2845.12] kiṃca abhiviyaktivad bhāvasyāpy asataḥ karaṇaṃ syāt, vyatirekāt / bhāvasvabhāva-vad vābhiviyakter api satyā eva karaṇaprasaṅgaḥ / na caitad api yuktam, atīśayābhāvāt / anavasthā-prasaṅgād ity uktaṃ /

[TSP 2842–2845.12] gzhan yang mngon par gsal ba bzhin du tha mi dad pa'i phyir dngos po yang med par byed par 'gyur ba'am dngos po'i rang gi ngo bo bzhin du mngon par gsal ba yang yod pa nyid byed par thal bar 'gyur la / de yang rigs pa ma yin te / bogs dbyung du med pa'i phyir dang / thug pa med par thal bar 'gyur ba'i phyir ro zhes bstan zin to //

[TSP 2842–2845.12] そしてまた、顕現と同じように、存在者も〔もともと〕存在していないものが作り出されることになるだろう。なぜなら、異なるからである。或いは、存在の本性と同じように、顕現も存在しているものが作り出されることになってしまう。そして、このことも不合理である。なぜなら、卓越性がないからである。というのは、無限連鎖が起こってしまうからである。このことは既に述べた<sup>77</sup>。

<sup>76</sup>TSP on TS 87, 197, 427, 473–74, 742, 2447, 2524, 2652–54, [TSP 2823.1].

<sup>77</sup>[2842–2845.9].

<sup>(112)</sup>ltos] D; bltos P

<sup>(113)</sup>phyir] P; phyir ro D



### K 3.2.2.1.3 原因の働きが止まなくなってしまう

[TSP 2842–2845.13] sadarthaviṣaye ca kāraṇavyāpāra iṣyamāṇe kāraṇānām kāryakriyānuparamaprasaṅgaḥ / kiṃ hi tadopalabhya kāraṇāni nirvarteran / kāryasattām iti cen na, bhavanmatyā tasyāḥ prāḡ api bhāvāt /

[TSP 2842–2845.13] yod pa'i don gyi yul la yang rgyu'i bya ba 'dod pa ni rgyu rnams kyi<sup>(114)</sup> 'bras bu byed pa ldog pa med par thal bar 'gyur te / der ci zhig dmigs nas rgyu rnams ldog par 'gyur / 'bras bu yod pa'o zhe na ma yin te / khyed kyi<sup>(115)</sup> lugs kyis de ni sngar yang yod pa'i phyir ro //

[TSP 2842–2845.13] そして、存在者の対象領域に対する原因の働きが認められるならば、原因は結果を作り出すのをやめないことになってしまう。実に、そのとき、何に依拠した後で原因は機能停止するのだろうか。

【反論】結果の存在性に〔依拠した後で原因は機能停止する〕。

【回答】そのようなことはない。なぜなら、あなたの考えによれば、それ（結果の存在性）は以前にも存在しているからである。

### K 3.2.2.1.4 能力に基づく因果関係制約説の確立

[TSP 2842–2845.14] tasmād asad evotpadyate yasya kāraṇam asti, na vyomakusumādi, tadutpādanasamarthakāraṇābhāvāt / ataḥ kāraṇaśaktipratiniyamāt kāryakāraṇabhāvaniyamō bhaviṣyati / na hi sarvo bhāvaḥ sarvotpādanasamartho 'ṅgīkriyate, anādisvahetuparamparayā sarvabhāvānām śakter niyamatatvāt /

[TSP 2842–2845.14] de lta bas na gang gis rgyu yod pa ni med pa nyid<sup>(116)</sup> skye'i de skyed par byed pa'i rgyu med pa'i<sup>(117)</sup> phyir nam mkha'i me tog la sogs pa ni ma yin no // des na rgyu'i nus pas so sor nges pa'i phyir rgyu dang 'bras bu'i dngos po nges par 'gyur ro // dngos po thams cad skyed pa'i nus pa yod par khas blang bar bya ba ma yin te / dngos po rnams kyi nus pa ni thog ma med pa'i rang gi rgyu bryud pas nges par bya ba'i phyir ro //

[TSP 2842–2845.14] それゆえに、〔全ての存在者はもともと〕存在していないからこそ生じるのである。ただし、それに原因があればの話である。空華などは〔もともと存在していないにもかかわらず生じることが〕ない。というのも、それ（空華など）を生み出すことができる原因がないからである。このことから、原因の能力の制約を通じて因果関係の制約が起こるだろう。なぜなら、あらゆる存在者があらゆる事物を生じさせることができるということは認められないからである。というのは、無始以来の自らの原因によって次から次へと能力を通じて全ての存在者は制約されてきたからである。

### K 3.2.2.2 〈偽〉も自律的になってしまう

[TSP 2842–2845.15] yadi cāsat prāmānyam anyena kartuṃ na śakyata iti svatas tad ucyate, aprāmānyam api tarhy anenaiva nyāyena svata eva prāpnotīti yat kiṃcid etat /

[TSP 2842–2845.15] gal te yang tshad ma med pa gzhan gyi bya bar mi nus pa'i phyir de rang las yin par brjod na / 'o na tshad ma ma yin pa yang rigs pa 'di nyid kyis rang nyid las yin par 'gyur ba'i phyir 'di ni gyi na'o //

<sup>(114)</sup>kyi] D; kyis P

<sup>(115)</sup>kyi] D; kyis P

<sup>(116)</sup>nyid] D; nyid du P

<sup>(117)</sup>rgyu med pa'i] D; om. P

[TSP 2842–2845.15] そして、もし「〔或る存在者の中にもともと〕存在していない〈真〉を〔その存在者の中に〕他の存在者が作り出すことができないという理由から、それ（〈真〉）は自律的である」と〔クマーリラが〕主張しているとすれば、その場合、〈偽〉も全く同じ道理によって必ず自律的であるということになってしまう。このことはほんの些細なことに過ぎない<sup>78</sup>。

### K 3.3 自律的真理論解釈 (C) 及びその批判

#### K 3.3.1 自律的真理論解釈 (C)

[TSP 2842–2845.16] yo 'pi manyate / prāmānyam nāma vijñānasyārthapricchedotpādikā śaktiḥ / śaktiś ca kṣaṇikavijñānāśritatvāt svato 'satī na śakyate kartum, kālatraye 'pi tasyāḥ kriyānupapatteḥ / tathā hi na tāvat prāg vijñānotpatteḥ kriyate, āśritatvāt / na hy āśritasyāśrayābhāve karaṇam yuktam, yathā kuḍyābhāve citrasya, anāśritatvaprasaṅgāt / ata eva saha karaṇam apy ayuktam, āśritatvāt / na hi kuḍyālekhyayor āśrayāśritayor yugapadārambhaḥ sambhavati / nāpy utpannasya sato vijñānasya paścāt kriyate, kṣaṇikatvāt tāvatkālam sthiter abhāvāt / ataḥ sarvapramāṇānām svataḥ prāmānyam ucyaṭa iti /

[TSP 2842–2845.16] gang yang tshad ma nyid ces bya ba rnam par shes pa'i don yongs su gcod pa bskyed pa'i nus pa yin la / nus pa yang rnam par shes pa skad cig ma la brten pa'i phyir yod par bya ba nus pa ma yin te / dus gsum du yang de byed par mi 'thad pa'i phyir ro // 'di ltar re zhig rnam par shes pa skyes pa las sngar byed pa ma yin te / brten pa yin pa'i phyir ro // brten pa rten<sup>(118)</sup> pa med par byed par rigs pa ma yin te / rtsig pa med par ri mo bzhin te / mi brten pa nyid du thal bar 'gyur ba'i phyir ro // de nyid kyi phyir lhan cig tu byed par yang rigs<sup>(119)</sup> pa ma yin te / rten med pa'i phyir ro // rten dang brten pa rtsig pa dang<sup>(120)</sup> ri mo dag ni cig car rtsom pa ma yin la / dus de tsam du gnas pa med pa'i sgo nas de nyid skad cig ma yin pa'i phyir skyes pa na rnam par shes pa physis byed pa yang ma yin te / des na tshad ma thams cad rang las<sup>(121)</sup> tshad mar brjod par bya'o snyam du sems pa

[TSP 2842–2845.16] 次のように考えている人もいる。

【自律的真理論解釈者 (C)】〈真〉というのは、認識が持つ対象画定を生み出す能力のことである。そして、能力は、瞬間的な認識に依拠しているから、自律的に存在していなければ作り出すことはできない。なぜなら、過去、現在、未来のいずれにおいても、それ（対象画定能力）が作り出されることはあり得ないからである。すなわち、〔対象画定能力は、〕まず、認識が生じる前に作り出されることはない。なぜなら、〔対象画定能力は認識に〕依拠するものだからである。実に、依拠するものが拠り所が存在しないのに作り出されるということは不合理である。例えば、壁が存在しないときに壁画が〔作り出されるということは不合理である〕。なぜなら、〔依拠するものが〕依拠しないことになってしまうからである。まさに同じ理由から、〔対象画定能力は認識と〕同時に作り出されるということも不合理である。なぜなら、〔対象画定能力は認識に〕依拠するものだ

<sup>78</sup>Cf. TT on ŚV codanā 47 (48: 25–49: 2): yadi ca\*<sup>1</sup> asat prāmānyam anyena\*<sup>2</sup> kartum na śakyata iti svatas tad ity\*<sup>3</sup> ucyaṭe, aprāmānyam apī tarhi tenaiva hetunā svata eva prāpnoti / athābhivyaktir asya parata itī parato 'prāmānyam ucyaṭe, prāmānyam apī parato 'bhivyajyata itī parataḥ syāt / tasmāt tulyam etat prāmānyetarayor<sup>43</sup> ity alam atiprasaṅgena / \*<sup>1</sup>ca] TT; vā TTms<sub>S</sub> \*<sup>2</sup>anyena] TTms<sub>S</sub>; om. TT \*<sup>3</sup>ity] TT; om. TTms<sub>S</sub> \*<sup>4</sup>prāmānye-] TTms<sub>S</sub>; pramāne- TT (「そして、もし、「〔認知手段〕の中にもともと〕存在していない〈真〉を〔認知手段〕の中に〕それ以外〔の存在者〕が作り出すことができないという理由から、それ（〈真〉）は自律的である」と言うならば、その場合、同じその理由によって、〈偽〉までもまさに自律的であるということが結果する。また、もしも「これ（〈偽〉）の顕現は他律的であるという理由から、〈偽〉は他律的である」と言うならば、〈真〉も他律的に顕現させられるのだから他律的であることになってしまうだろう。したがって、このこと（因中有果論にもとづく自律性の帰結）は〈真〉と〈偽〉に共通である。これ以上の余計な議論は不要である」)

<sup>(118)</sup>rten] D; brten; P

<sup>(119)</sup>rigs] D; rim P

<sup>(120)</sup>dang] D; om. P

<sup>(121)</sup>las] D; la P

からである。実に、壁と壁画という拠り所と依拠するものが同時に形成されるということはない。また、〔対象画定能力は、〕認識が生じた後で、その認識に作り出されるということもない。なぜなら、認識は瞬間的であるので、ほんの僅かな時間も存続することがないからである。以上の理由から、「全ての〈認知手段〉の〈真〉は自律的である」と述べられているのである<sup>79</sup>。

### K 3.3.2 自律的真理論解釈 (C) に対する批判

#### K 3.3.2.1 「〈真〉は対象画定を生み出す能力である」という主張に対する批判

[TSP 2842–2845.17] tad etad asamyak / tathā hi yat tāvad uktam arthaparicchodtpādikā śaktiḥ prāmāṇyam iti tad asambaddham, arthaparicchedasya jñānaparyāyavāt / na ca tad eva jñānam āśritā sañī śaktis tasyaivotpādikā yujyate, anāśritatvaprasaṅgāt samānakālaṃ ca kāryakāraṇabhāvānupapatteḥ /

[TSP 2842–2845.17] de ni yang dag pa ma yin te / 'di ltar re zhiḡ don yongs su gcod pa skyed par byed pa'i nus pa tshad ma nyid yin na zhes gang smras pa de ni 'brel pa med pa yin te / don yongs su gcod pa ni shes pa'i rnam grangs yin pa'i phyir ro / nus pa shes pa de nyid la brten pa yin na de skyed par byed pa nyid du 'thad pa ma yin te / mi brten pa nyid du thal bar gyur ba'i phyir dang / dus mnyam pa'i rgyu dang 'bras bu'i dngos po mi 'thad pa'i<sup>(122)</sup> phyir ro //

[TSP 2842–2845.17] 【解釈 (C) 批判】上記のこの反論は正しくない。すなわち、まず、「〈真〉は対象画定を生み出す能力である」と言っていたが、そのことは関連性がない。なぜなら、「対象画定」は「認識」の同義語であり<sup>80</sup>、そして、能力が、或る認識に依拠しているにもかかわらず、まさにその〔認識〕を生み出すということは不合理であるからである。というのも、〔能力が認識に〕依拠しないことになってしまい、また、同時における因果関係はあり得ないからである<sup>81</sup>

<sup>79</sup>Cf. TṬ on ŚV codanā 47 (43: 11–19): yo 'pi manyate / prāmāṇyam nāma paricchodtpādikā śaktiḥ / tannimitta eṣa jñāneṣu pramāṇasabdhaḥ / śaktiḥ ca kṣaṇikavijñānāśritatayā na svato 'sañī śakyā kartum, kālatraye 'pi kriyānupapatteḥ / na tāvat prāḡ vijñānotpatteḥ,\*<sup>1</sup> āśritatvāt svāśrayabhāve tadayogāt / na hy asañī kuḍye citrakarma / anenaiva\*<sup>2</sup> hetunā na sahotpādaḥ\*<sup>3</sup> / na khalu kuḍyacitrayor\*<sup>4</sup> yugapad ālambhaḥ / nanu citravād eva\*<sup>5</sup> jñānasoyotpannasya sā karīṣyate / na, kṣaṇikatvāt tāvatkālaṃ sthiter abhāvāt / tasmāt kāryatāyām asattvam eva syāt / tac cāyuktam, paricchedavirodhād ity akāryā śaktiḥ svata eva seti kāraṇaiḥ saha tadbhāvabhāvitvam anyathā siddham iti, tadāśrayasya taiḥ kriyamāṇatvād iti / \*<sup>1</sup>Ms: vijñānotpatter] TṬms; vijñānakriyotpatter TṬ \*<sup>2</sup>anenaiva] TṬms; anena ca TṬ \*<sup>3</sup>hetunā na saho-] TṬ; hetunāsaho-TṬms \*<sup>4</sup>kuḍyacitrayor] TṬ; citrakudyayor TṬms \*<sup>5</sup>citravad eva TṬms; citraṃ paṭasyeva TṬ (「また、次のように考えている者もある。「〈真〉」というの〔対象〕確定を生じさせる能力である。この「〈認知手段〉」という語は、〔認識の中の〕それ〔対象画定能力〕を根拠として認識に対して適用される。そして、〔対象画定〕能力は刹那滅である認識に依拠しているの、自律的に〔認識の本質に基づいて〕存在していなければ、〔認識の中にその認識以外の存在によって〕作り出されることはあり得ない。なぜなら、〔そのような場合、認識が生じる前（過去）、認識が生じる時（現在）、認識が生じた後（未来）の〕三つの時間のいずれにおいても〔認識の中に対象画定能力が〕作り出されることが妥当しないからである。まず、認識が生じる前に〔認識の中に対象画定能力が作り出されること〕はない。なぜなら、〔対象画定能力は認識に〕依拠している〔依拠者（āśrita）である〕ので、自らの拠り所（āśraya）〔である認識〕が存在しないときにそのように〔対象画定能力が作り出されること〕はあり得ないからである。周知のように、壁がないとき壁画が作り出されることはない。同じこの〔拠り所がないときに依拠者は作り出され得ないという〕理由で、〔認識が生じるときに対象画定能力が〕同時に生じることはない。周知のように、壁と壁画が同時に作り出されることはない。【反論】〔既に生じた後の壁に〕壁画〔が作り出されるの〕とちょうど同じように、既に生じた後の認識の中にそれ〔対象画定能力〕が作り出されることになるだろう。【回答】そのようなことはない。なぜなら、〔認識は〕刹那滅なのだからほんの僅かな時間も（tāvatkālaṃ）存続することはない〔ので対象画定能力が作り出される瞬間には消えている〕からである。それゆえに、〔対象画定能力は、何らかの原因の〕結果であるとするならば全く存在しないことになるだろう。しかし、そのことは不合理である。なぜなら、〔実際に認識が生じたときに対象が〕確定されることと矛盾するからである。したがって、能力は〔何らかの原因の〕結果ではないので、その〔対象画定能力〕は自律的に〔認識の本質に基づいて〕存在しているのだから、〔対象画定能力の認識〕原因との〈それがあればある〉という関係は誤って確立されたものである。なぜなら、〔対象画定能力ではなく、〕それ〔対象画定能力〕の拠り所〔である認識〕がそれら〔認識原因〕によって作り出されるからである」

<sup>80</sup>対象画定（pariccheda）は、単なる認識ではなく、二種類の〈認知手段〉、知覚と推理のことである。より具体的には、シャーキヤブッディによれば、知覚の場合には対象の現れ（pratibhāsa）、推理の場合には対象の確定（niścaya）のことである。中須賀 [2015: 73–77] を参照。

<sup>81</sup>何にも依拠せずに独立して存在する〈真〉がまだ生じていない認識を生じさせることになってしまう。また、上記

(122)pa'i] D; pa'i yang P

### K 3.3.2.2 「依拠するものであるから」という理由は不成立である

#### K 3.3.2.2.1 対象画定能力が認識と異なる場合に不成立である

[TSP 2842–2845.18] yac coktam āśritatvāt saha prāk na kriyata iti tad apy ayuktam, avyatickāḍ āśritatvā-siddheḥ / bhāvasvabhāva eva hi viśiṣṭārthakriyākārī tadbhāvamātrajñāsāyām śaktir iti vyapadiśyate, nārthāntaram / arthāntaratve bhāvasyākāratvaprasaṅgaḥ<sup>44)</sup> sambandhāsiddhiś ceti nirloḥitam etad bahudhā / tasmāt svabhāvabhūtā vijñānasya śaktir abhinna-yogakṣematvād vijñānasvabhāvavat prāg vijñānotpatter asaty eva kriyata ity aviruddham / sahaiva ca vijñānenotpadyata ity api yuktam eva, svabhāvabhūtasya dharmasya bhāvena sahaikayogakṣematvāt /

[TSP 2842–2845.18] gang yang brten pa yin pa'i phyir lhan cig dang sngar byed pa ma yin no zhes smras pa de yang mi rigs te / tha mi dad pas brten pa nyid ma grub pa'i phyir ro // khyad par can gyi don bya ba byed pa'i dngos po'i rang bzhin nyid de'i dngos po tsam shes par 'dod pa na nus pa zhes tha snyad du bya'i / don gzhan ni ma yin te / don gzhan yin na dngos po byed pa po ma yin par thal ba dang 'brel ba yang ma grub po zhes 'di ni rnam pa mang du dpyad zin to // de lta bas na rnam par shes pa'i nus pa rang bzhin du gyur pa ni grub pa dang bde ba tha mi dad pa'i phyir rnam par shes pa'i rang gi ngo bo bzhin du rnam par shes pa las sngar med pas de kho na byed do zhes bya bar 'gal ba med do // rnam par shes pa dang lhan cig skye'o zhes bya ba yod pa rigs pa kho na ste / dngos por gyur pa'i chos ni dngos po dang lhan cig grub pa dang bde ba gcig yin pa'i phyir ro //

[TSP 2842–2845.18] また、「〔対象画定能力は〕依拠するものだから、〔認識と〕同時に作り出されることも〔認識が生じる〕前に作り出されることもない」と言っていたが、そのことも不合理である。なぜなら、〔対象画定能力は、認識と〕異なるので、〈依拠するものであるということ〉は成立しないからである<sup>82</sup>。そのような存在者としてだけ認識しようと意図されているときに、特定の効果的作用を作り出す存在者の本性こそが「能力」と呼ばれるのであり、それ以外のものは〔「能力」と呼ばれ〕ない<sup>83</sup>。〔能力は存在者の本性〕以外のものとするならば、存在者は実現者ではないことになってしまうし、〔能力と存在者の〕関係は成立しない。以上のことは既に何度も考察して来た<sup>84</sup>。それゆえに、認識の本性である能力は、〔認識と〕運命を共にするから、認識の本性と同じように、認識が生じる前には全く存在していないものとして作り出されるということは矛盾しない。そして、「〔対象画定能力は〕認識と同時に生じる」ということもまさに合理的である。なぜなら、本性である属性は存在者と運命を一つにするからである。

の不都合を言い逃れるために、「〈真〉(依拠するもの)が認識(拠り所)と相互因果関係を持つ形で同時に生じる」と説明することもできない。具有因と土用果といった同時因果は成立し得ないから。

Cf. TSP on TS 468 (204: 21–25): samānakālam ca kāryakāraṇabhāvānupapatteḥ / yathoktam “asataḥ prāg asāmarthyāt paścād anupayogataḥ / prāgbhāvaḥ sarvavahetūnām nāto 'rthaḥ svadhīyā saha //” iti / (「そして、同時における因果関係はあり得ないから。そのことについて、〔ダルマキールティは〕「〔結果の発生より〕前に存在していないものは〔その結果を生み出す〕能力を持たないし、また、〔結果の発生〕以後に存在するものは〔その結果の発生に〕資することがないから、あらゆる原因は〔結果の発生より〕前に存在する。このことから、事物は自らを対象とする認識と同時に存在しない」(PV 3.246)と述べている) 戸崎 [1979: 343–347] 参照。

<sup>82</sup> 「【主張】対象画定能力は、認識と同時にそれ以前にも作り出されることがない。【理由】依拠するものであるから」という論証におけるこの理由は不成立 (asiddha) である。

<sup>83</sup> [TS 2817] を参照。

<sup>84</sup> [TSP 2816.2] を参照。

<sup>44)</sup> -kāratva-] TSP<sub>BBS</sub> TSP<sub>GOS</sub> TSP<sub>MSP</sub>; -kāratva- TSP<sub>MJ</sub>

### K 3.3.2.2.2 対象画定能力が認識と異なる場合にも不成立である

#### K 3.3.2.2.2.1 認識は能力に対して何もしないから能力は認識に依拠しない

##### K 3.3.2.2.2.1.1 認識は能力に対して何もしない

[TSP 2842–2845.19] bhavatu nāma śakter vyatirekaḥ padārthāt / tathāpi sadasator āśritavānupapatter āśritatvam asiddham / tathā hi sat tāvan nāśrayate, tasya sarvātmanā niṣpatter nirapekṣatvāt / nāpi sa tasyā āśrayo<sup>45)</sup> yuktaḥ, tasyākimcitaratvāt, yathā vindhyo himavataḥ /

[TSP 2842–2845.19] nus pa dngos po las tha dad pa yin du chug mod // de lta na yang yod pa dang med pa'i rten mi 'thad pa'i phyir brten pa nyid ma grub ste / 'di ltar re zhig yod pa ni rten ma yin te<sup>(123)</sup> / de bdag nyid thams cad kyis grub pas ltos<sup>(124)</sup> pa med pa'i phyir ro // de ni de'i rten du yang rigs pa ma yin te / de ni cung zad kyang mi byed pa'i phyir 'bigs byed dang gangs can bzhin no //

[TSP 2842–2845.19] 仮に能力は実在者と異なるとしよう。そのような場合でも、〔能力は、〕存在者にも非存在者にも依拠することがあり得ないから、〈依拠するものであること〉は成立しない。すなわち、(1) まず、〔能力は〕存在者に依拠することはない。なぜなら、それ（存在者）は全面的に実現している所以他に依存しないからである<sup>85</sup>。また、それ（存在者）がそれ（能力）の拠り所であるということ是不合理である。なぜなら、それ（存在者）は〔能力に対して〕何もしないからである。例えば、ヴェンディヤ山脈がヒマラヤ山脈の〔拠り所ではない〕ように。

#### K 3.3.2.2.2.1.2 認識は能力の中に存続を作り出すことはない

##### K 3.3.2.2.2.1.2.1 存続が存続者と異ならない場合に存続を作り出すことはない

[TSP 2842–2845.20] sthitis tena kriyata iti cen na, sthiteḥ sthātur avyatirekāt / sthātur eva hi svabhāvas tathā bhedāntarapratiḥśeṇocyate / na ca tenāśrayeṇāvasthātur ātmā kriyata ity akimcitarā eva / vyatireke 'pi sthiteḥ sthātuḥ sthāpako 'kimcitarā eva, arthāntarabhūtāyāḥ sthiteḥ karaṇāt / na cānyasya karaṇeṇānyasya kimcit kṛtam ity ubhayathāpi sthāpakasyākimcitaratvam / tatsambandhinīm sthitiṃ karotīti cen na, sthāpyasthāpakayor iva sthiti mataḥ sthityā saha sambandhāsiddheḥ, anavasthāprasaṅgāś ceti nirloṭhitaprāyam etat /

[TSP 2842–2845.20] des gnas pa byed do zhe na / mtshan nyid de gnas pa ni gnas pa po las tha mi dad pa'i phyir te / gnas pa'i rang bzhin nyid de ltar khyad par gzhan spangs pa'i sgo nas brjod kyi rten zhes gnas pa po'i mtshan nyid byed pa ni ma yin pa'i phyir cung zad kyang mi byed pa kho na'o // gnas pa po las gnas pa tha dad pa yin na yang don gzhan du gyur pa'i gnas pa byed pa'i phyir gnas par byed pa po cung zad kyang mi byed pa kho na'o // gzhan byed pa na gzhan la cung zad kyang byas pa zhes bya ba ma yin pa'i phyir nmam pa gnyi ga ltar na yang gnas par byed pa po ni cung zad kyang mi byed pa nyid do // gal te de dang 'brel pa'i dngos po byed do zhe na / ma yin te gnas par bya ba dang gnas par byed pa gnyis gzhan du gnas pa dang ldan par gnas pa po dag lhan cig 'brel pa ma grub pa'i phyir dang / thug pa med par thal bar 'gyur ba'i yang phyir ro zhes bya ba 'di ni phal cher dpyad zin to //

<sup>85</sup>能力が存在者と異なる場合、存在者はその原因から欠損部分なく完全な形で生じているから、その欠損部分を埋めるものとして能力に限らず何も必要とすることはない。したがって、その中に能力が居座る余地はない。

<sup>45)</sup>-syā āśra-] TSP<sub>BBS</sub> TSP<sub>GOS</sub>; -syāśra- TSP<sub>msJ</sub> TSP<sub>msP</sub>

<sup>(123)</sup>te] D; om. P

<sup>(124)</sup>ltos] D; bltos P



[TSP 2842–2845.20] 【反論】それ（存在者）は、〔能力の中に〕存続を作り出す<sup>86</sup>。

【回答】そのようなことはない。なぜなら、存続は存続者と異ならないからである。というのも、〔「存続」という語によって、〕他ならぬ存続者の本性がそのように〔〈非存続者からの差異〉以外の〕他の差異を無視する形で表示されているからである<sup>87</sup>。そして、その抛り所が存続者の本性を作り出すことはない。したがって、〔存在者は能力に対して〕全く何もしない。存続は存続者と異なるとした場合でも、存続させるもの（存在者）は〔能力に対して〕全く何もしない。なぜなら、別の事物として存続が作り出されるからである。そして、或るものが作り出されるとき、それ以外のものの中に何も作り出されることにはならない。したがって、〔存続が存続者と異なる場合でも異なる場合でも〕いずれにせよ、存続させるものは何もしない。

【反論】〔存続させるものは〕それ（存続者）と関係するものとして存続を作り出すのである。

【回答】そのようなことはない。なぜなら、存続させられるもの（存続者）と存続させるもの〔の関係が成立しないの〕と同様に、存続保持者（存続者）の存続との関係は成立しないからである<sup>88</sup>。そして、〔仮に存続が作り出されるとしても、〕無限連鎖が起こってしまう<sup>89</sup>。以上のことは、ほとんど既に考察済みである。

### K 3.3.2.2.1.2.2 存続が存続者と異なる場合にも存続を作り出すことはない

[TSP 2842–2845.21] kiṃca yadi padārthasya sthāpikā sthitir arthāntarabhūtāṅgikriyate tadā na kasyacit padārthasya vināśaḥ prāpnoti, sthāpikāyāḥ sthiter vidyamānatvāt / nāpi vināśahetuvaśāt satyām api sthītau vināśo bhaviṣyatīti śakyam vaktum, tasyāpy akimcitaratvād ayuktaṃ vināśakatvam / tathā hi tatrāpy ayaṃ vikalpo 'vataraty eva kiṃ bhāvād arthāntarabhūtaṃ vināśaṃ nāśahetuḥ karoty āhosvid bhāvam eva / na tāvad bhāvam eva karoti, tasya niṣpannatvāt / anyasya ca karaṇe bhāvasya na kiṃcīt kṛtam iti tadavasthatvād bhāvasya vināśābhāvād akimcītkaro vināśahetur iti carcītam etat sthīrabhāvaparīkṣāyām vistareṇa /

[TSP 2842–2845.21] gzhan yang gal te dngos po'i gnas par byed pa gnas pa las don gzhan du gyur par khas len par byed pa de'i tshe gnas par byed pa'i gnas pa<sup>(125)</sup> yod pa'i phyir dngos po 'ga' zhiḡ kyang 'jig par mi 'gyur la / gnas pa yod na yang 'jig pa'i rgyu'i dbang gis 'jig par 'gyur ba yin no zhes kyang brjod par mi rigs te / de yang cung zad kyang mi byed pa nyid kyi phyir 'jig par byed pa nyid du mi rigs so // 'di ltar de la yang ci dngos po las don gzhan du gyur pa'i 'jig pa 'jig pa'i rgyu byed dam / 'on te dngos po nyid yin zhes bya ba'i nram par rtog pa 'di nyid kho na 'jug pa yin no<sup>(126)</sup> // re zhiḡ dngos po nyid byed pa ni ma yin te / de ni grub zin pa'i phyir ro // gzhan byed na yang dngos po la cung zad kyang ma byas pa'i phyir dngos po de'i gnas skabs kho na yin pa'i phyir 'jig pa med pas 'jig pa'i rgyu cung zad kyang<sup>(127)</sup> mi byed do zhes rgyas par brtan pa'i dngos po brtag<sup>(128)</sup> par gtan la phab zin to //

[TSP 2842–2845.21] そしてまた、もし「事物を存続させる存続は別の事物である」ということが認められるならば、どの事物も消滅することがないということになってしまう。なぜなら、〔事物

<sup>86</sup> 反論者は、抛り所にはそれに依拠するものを存続させる働きがあると考えている。したがって、存在者は能力に対して何もしないわけではない。

<sup>87</sup> Cf. PV 1.61: bhedāntarapraticsepāpraticsepau tayor dvayoḥ / samketabhedasya padaṃ jñātrvāncānurodhinaḥ // (「他の差異の拒否・非拒がそれら二つ〔属性表示語と属性保持者表示語〕の認識者の欲求次第の特定の言語協約の根拠である」)

<sup>88</sup> (A) 存続させるもの（抛り所＝認識）、(B) 存続者（能力）、(C) 存続の3項目のうち、(A)と(B)の関係が成立しないのと同様に、(B)と(C)の関係も成立しない。

<sup>89</sup> 存続者を存続させるための存続1を存続させるために、さらに存続2が要請されるから。

<sup>(125)</sup> pa] D; par P

<sup>(126)</sup> no] D; om. P

<sup>(127)</sup> kyang] D; om. P

<sup>(128)</sup> brtag] D; brtags P



を] 存続させるものとして存続が現に存在しているからである。また、「消滅の原因の力を通じて、存続が現に存在しているにもかかわらず、[事物の] 消滅が起こるだろう」と言うことはできない。それ（消滅の原因）も、何もしないのだから、[事物を] 消滅させるものであることは不合理である。すなわち、その場合にも、次のような選択肢が必ず導入される。消滅の原因は、消滅を (A) 存在者とは別の事物として作り出すか、(B) 存在者に他ならないものとして〔作り出す〕かのいずれかである。まず、(A) 存在者に他ならないものとして〔消滅を〕作り出すことはない。なぜなら、それ（存在者）は既に実現しているからである。また、(B)〔存在者とは〕別〔の事物〕として〔消滅を〕作り出すとすれば、〔その〕存在者の中には何も作り出されていないことになるという理由で、〔その存在者は〕そのままであるので、存在者は消滅しないのだから、消滅の原因は〔その存在者に対して〕何もしない。以上のことは、第 8 章「常住性の検討」(sthira bhāva parikṣā) で詳細に議論した<sup>90</sup>。

### K 3.3.2.2.1.2.3 存在者が元来無常な本性を持つ場合も持たない場合も存続を作り出すことはない

[TSP 2842–2845.22] kiṃca prakṛtyā bhāvo 'sthira svabhāvo vā syāt sthira svabhāvo vā / tatra yadi prakṛtyaivāsthira tmā bhāvaḥ svahetor utpannaḥ tadā tena svabhāva niṣpatter ūrdhvaṃ svayaṃ na sthātavyam eveti tasyākiṃcitkarau dvāv api sthiti nāśahetū / atha prakṛtyā sthira tmā bhāvaḥ tathāpi tasya svabhāvanyathātvāsambhāvān na kaścīd vināśakaḥ / svayaṃ eva sthāvaratvān nāpi kaścīd sthāpaka ity ubhayathā sthiti nāśahetū akīṃcitkarau /

[TSP 2842–2845.22] gzhan yang dngos po rang bzhin gyis brtan pa'i rang bzhin yin nam / mi brtan pa'i rang bzhin yin grang / de la gal te dngos po mi brtan pa'i bdag nyid du rang gi rgyu las skyes pa yin na de'i tshe des rang gi ngo bo grub pa las physis dang nyid gnas par bya ba ma yin pa'i phyir de ni 'jig pa dang gnas pa'i rgyu gnyi gas cung zad kyang byed pa ma yin no / ci ste rang bzhin gyi brtan pa'i ngo bo nyid yin pa de lta na yang de'i rang bzhin gzhan nyid mi srid pa'i phyir 'jig par byed pa 'ga' yang yod pa ma yin no / rang nyid gnas pa yin pa'i phyir gnas par byed pa 'ga'<sup>(129)</sup> yang yod pa ma<sup>(130)</sup> yin pas gnas pa dang 'jig pa'i rgyu gnyi ga ltar yang cung zad byed pa ma yin no //

[TSP 2842–2845.22] そしてまた、元来、存在者は、(1) 無常な本性を持つか、(2) 常住な本性を持つかいずれかである。それらのうち、(1) もし、まさに元来、無常な本性を持つものとして存在者が自らの原因から生じるとするならば、その場合、それ（存在者）は、本性が実現した後それ自体では全く存続できないのだから、それ（存在者）の存続と消滅の原因の両者とも何もしないことになる。(2) またもし、元来、存在者は常住な本性を持つとするならば、そのような場合でも、それ（存在者）は、その本性が変容し得ないから、〔存在者を〕消滅させるものは何もないことになり、それ自体で存続するから、〔存在者〕を存続させるものも何もないことになる。したがって、〔(1) と (2) の〕いずれの場合にも、〔存在者の〕存続と消滅の原因は何もしない。

### K 3.3.2.2.3 非存在に依拠することもあり得ない

[TSP 2842–2845.23] nāpy asad āśrayata iti pakṣaḥ, tasya sarvasvabhāvarahitatvenādheyatvavyāpārayor asambhāvāc chaśa viṣṇāvad ity asiddham āśritatvaṃ śakteḥ /

<sup>90</sup>TSP on TS 357–366.

<sup>(129)</sup>'ga' D; om. P

<sup>(130)</sup>ma] P; om. D

[TSP 2842–2845.23] med pa rten yin no zhes bya ba'i phyogs kyang ma yin te / de ni rang bzhin thams cad dang bral ba nyid kyis brten pa nyid dang bya ba dag mi srid pa'i phyir ri bong gi rwa la sogs pa lta bu yin pa'i phyir nus pa brten pa nyid du ma grub po //

[TSP 2842–2845.23] また、「〔能力は〕非存在者に依拠する」という見解も成立しない。なぜなら、それ（非存在者）はあらゆる本性を欠いているので、〔非存在者に対して能力が〕与えられ得るといふことも、〔非存在者の能力に対する〕働きもあり得ないからである。例えば、ウサギの角のように。したがって、〈依拠するものであるということ〉〔という理由〕は、能力において不成立である。

### K 3.3.2.3 〈依拠するものであること〉という理由は不確定である

[TSP 2842–2845.24] siddhau vānaikāntikatvam, āsritānām api rūpādīnām ghaṭe sahotpattidarśanād aprāmāṇye 'pi prasaṅgāc ca / tathā hy aprāmāṇyam api viparītārthaparicchedotpādikā śaktiḥ / śakteś ca vijñānāśrītāyāḥ kālatraye 'py akaraṇāt prāmāṇyavad aprāmāṇyātmikā śaktiḥ svata eva prasajyate //

[TSP 2842–2845.24] grub na yang ma nges pa nyid yin te / gzugs la sogs pa la brten pa rnam kyang bum pa dang lhan cig skye bar mthong ba'i phyir dang tshad ma ma yin pa la yang thal bar 'gyur ba'i phyir te / 'di lta tshad ma ma yin pa yang bzlog pa'i don yongs su gcod pa skyed par byed pa'i nus pa yin la / rnam par shes pa la brten pa'i nus pa yang dus gsum char du yang mi byed pa'i phyir tshad ma nyid gzhan du tshad ma ma yin pa'i bdag nyid kyī nus pa yang gnyis kho na las yin par 'gyur ro //

[TSP 2842–2845.24] 或いは、仮に〔能力において〕成立しているとしても、〔〈依拠するものであること〉という理由は、自律性に関して〕不確定である。なぜなら、色などは依拠するものであるにもかかわらず壺の中に〔壺と〕同時に生じるということが経験されるし、また、〈偽〉にも〔自律性が〕帰結してしまうからである。すなわち、〈偽〉も、〔〈真〉が能力であるのと同様に、〕〈反対の対象の画定を生み出す能力〉である。そして、認識に依拠している能力は、過去・現在・未来のいずれにおいても作り出されることはないのだから、〈真〉と同じように、〈偽〉を本質とする能力はまさに自律的であるということが帰結する。

### K 3.3.3 能力が非結果であるなら、認識は全く何も能力を持たないことになってしまう

[TSP 2842–2845.25] kiṃca yadi kālatraye 'pi jñānasya śaktir na prādurbhavati tadā sarvasāmarthyasūnyaṃ vijñānaṃ prāpnoti / yasya hi yo dharmāḥ kālatraye 'pi na saṃjāyate sa kathaṃ tasya sambhavet, yathākāśasya mūrtatvam / kuto vā śaktibhir idam atyadbhutam indrajālaṃ śikṣitam, yenaitā vijñānasya kālatraye 'py asamāsāditasambhavā api satyas tena saha saṃgatim anubhavantīti / kimapy etan mahādbhutaṃ nityatvād anubhavantīti cen na, sarvasya śaktiyogitāprasaṅgāt, niyāmakābhāvāt / na hy anāyattasya pratiniyatapadārthayogitāyāṃ kiṃcit kāraṇaṃ niyāmakaṃ paśyāmaḥ, yenaitā vijñānasya bhavyeṣu, nānyasyeti / tataś ca pratyāsaṅganibandhanābhāvāt sarvasyaivaitāḥ<sup>46)</sup> prāpnuvantīti uktam etat / na cāpi tāsām akīṃcitkaraḥ kaścid āśrayo yuktaḥ, nityatvena kasyacit svabhāvaviśeṣasya kartavyasyābhāvād ity alaṃ bahunā //

[TSP 2842–2845.25] gzhan yang gal te dus gsum char du yang shes pa'i nus pa skye bar mi 'gyur ba de'i tshe rnam par shes pa nus pa thams cad kyis stong par 'gyur te / gang gi chos 'ga' zhig dus gsum du yang mi skye ba de ni ji lta de'i yin par 'gyur te / dper na nam mkha'i lus can nyid bzhin no // gang gis

<sup>46)</sup>syavaitāḥ] TSP<sub>BBS</sub> TSP<sub>GOS</sub> TSP<sub>msJ</sub>; syaiva tāḥ TSP<sub>msP</sub>

rnām par shes pa 'di dag dus gsum char du yang ma bsgrubs<sup>(131)</sup> pa yin na yang de dang lhan cig 'brel ba nyams su myong bar 'gyur ba zhes bya ba nus pa dag gi ngo mtshar ba'i mig 'phrul 'dis<sup>(132)</sup> su zhig gis bslabs / gal te 'di la ngo mtshar chen po ci zhig yod / rtag pa'i phyir nyams su myong ba yin no zhe na / ma yin te / nges pa med pa'i phyir thams cad nus pa thams cad dang ldan par thal bar 'gyur ba'i phyir ro // gang gis 'di dag shes pa kho na'i yin par 'gyur ba gzhan gyis ni ma yin no zhes bya bar rag ma las pa'i chos ni so sor nges pa'i dngos po dang ldan pa la rgyu nges pa 'ga' zhig kyang ma mthong ngo // de ltar yin na rgyu mtshan med pa'i phyir 'di thams cad kyi yin par 'gyur ro zhes 'di ni bstan zin to // de dag gi cung zad kyang mi byed pa ni 'ga' zhig gi rten du rigs pa yang ma yin te / rtag pa nyid kyi rang bzhin gyi khyad par 'ga' zhig byar med pa'i phyir te spros pas chog go //

[TSP 2842–2845.25] そしてまた、もしも過去・現在・未来のいずれにおいても認識の能力は生じないとするならば、認識はあらゆる能力を持たないということになってしまう。実に、或る〔存在者〕の中にある属性が過去・現在・未来のいずれにおいても生じないとき、どうしてその〔属性〕はその〔存在者〕の中に存在し得るだろうか。例えば、虚空の中に有形態性が〔存在し得ない〕ように。或いは、いったい何を通じて、諸々の能力はこの非常に驚くべき魔力（因陀羅網）を習得するのだろうか。習得すれば、その〔魔力〕によって、これら（能力）は、認識の中に過去・現在・未来のいずれにおいても発生し得ないにもかかわらず、それ（認識）との随伴関係を得ることになるのだが。

【反論】〔諸々の能力は、その〕常住性を通じて、この大いなる驚くべき何か（魔力）を〔習得することで認識との随伴関係を〕得るのである。

【回答】そのようなことはない。なぜなら、〔認識のみならず〕あらゆる〔存在者〕が能力と結びつくことになってしまうからである。というのは、制約する者が存在しないからである。実に、〔他に〕依存しないもの（常住なるもの）に〈それぞれ制約された事物との結び付き〉を生み出す原因（制約する者）を何も私たちは経験しない。もし経験するなら、その〔原因〕によって、これら（能力）は他ならぬ認識の中のみ存在し得るだろうが。そして、そのことから、近接した原因（制約する者）が存在しないので、あらゆる〔存在者〕の中にこれら（能力）が存在することになってしまう。このことは既に述べた。また、〔如何なるものも〕それら（能力）に対して何もしないのだから、何かが〔諸々の能力の〕拠り所になるということ是不合理である。なぜなら、〔あなたによれば、諸々の能力は〕常住なので、〔それらの中に何かによって〕作り出されるべき特殊な本性は何も存在しないからである。以上でこの議論はもう十分である。

**謝辞** 本稿で使用した TS と TSP の写本は、松岡寛子氏が画像データ化したものである。中須賀美幸氏には、TEX の使い方とチベット語資料について貴重な助言をもらっただけでなく、筆者の拙い日本語を丁寧に直して頂いた。徳武太郎氏にはサンスクリット語と和訳の対応のチェックのために過大な労力をおかけした。ここに心より感謝の意を示したい。

## 略号と文献

### 一次文献

- A: *Aṣṭādhyāyī*. See Cardona [1997].
- D: Derge Edition of the Buddhist canon in Tibetan.

<sup>(131)</sup>bsgrubs] D; sgrubs P

<sup>(132)</sup>'dis] D; 'di P

- **HB**: *Hetubindu*. See Steinkellner [2016].
- **P**: Peking Edition of the Buddhist canon in Tibetan.
- **PV**: *Pramāṇavārttika*. See 宮坂 [1972].
- **PVSV**: *Pramāṇavārttikasvavṛtti*. See Gnoli [1960].
- **ŚBh**: *Mīmāṃsāsūtrabhāṣya*. See Frauwallner [1968].
- **ŚV**: *Mīmāṃsāslokaivārttika*. See Dvārikādāsa Śāstrī [1978].
- **ŚV codanā**: The Codanāsūtra Chapter of ŚV. See Kataoka [2011a].
- **TS**: *Tattvasaṅgraha*. See Dvārikādāsa Śāstrī [1968].
- **TS<sub>BBS</sub>**: See Dvārikādāsa Śāstrī [1968].
- **TS<sub>GOS</sub>**: See Krishnamacharya [1926].
- **TS<sub>msJ</sub>**: A manuscript of TS preserved in Jinabhadrasuri Tadapatriya Grantha Bhandara, No. 337.
- **TS<sub>msP</sub>**: A manuscript of TS preserved in Hemachandracharya Jain Jnan Mandir, No. 6679.
- **TSP**: *Tattvasaṅgrahapañjikā*. See Dvārikādāsa Śāstrī [1968].
- **TSP<sub>BBS</sub>**: See Dvārikādāsa Śāstrī [1968].
- **TSP<sub>GOS</sub>**: See Krishnamacharya [1926].
- **TSP<sub>msJ</sub>**: A manuscript of TSP preserved in Jinabhadrasuri Tadapatriya Grantha Bhandara, No. 378.
- **TSP<sub>msP</sub>**: A manuscript of TSP preserved in Hemachandracharya Jain Jnan Mandir, No. 6680.
- **TṬ**: *Tātparyatīkā*. See Rāmanātha Śāstrī [1971].
- **TṬ<sub>msS</sub>**: A manuscript of TṬ preserved in Sarasvatī Bhavan Library, Sampurnananda Sanskrit University, No. 29323.

## 二次文献

- **Cardona [1997]**: Cardona, George. *Pāṇini: His Work and its Traditions*. Vol. 1. 2nd Edition, Revised and Enlarged. Delhi: Motilal Banarsidass Publications.
- **Dunne [2004]**: Dunne, John D. *Foundations Dharmakīrti's Philosophy*. Boston: Wisdom Publications, 2004.
- **Dreyfus [1997]**: Dreyfus, Georges B. J. *Recognizing Reality*. Albany: State University of New York Press, 1997.
- **Dvārikādāsa Śāstrī [1968]**: Dvārikādāsa Śāstrī, Svāmī. *The Tattvasaṅgraha of Ācārya Śāntarakṣita with the 'Pañjikā' Commentary of Ācārya Śrī Kamalaśīla*. 2 Vols. 2nd Edition, 1981 and 1982. 3rd Edition, 1997. Varanasi: Bauddha Bharati.

- **Dvārikādāsa Śāstrī [1978]:** Dvārikādāsa Śāstrī, Svāmī. *Ślokovārttika of Śrī Kumārila Bhaṭṭa with the Commentary Nyāyaratnākara of Śrī Pārthasārathi Miśra*. Varanasi: Tara Publications.
- **Frauwallner [1968]:** Frauwallner, Erich. *Materialien zur Ältesten Erkenntnislehre der Karmamīmāṃsā*. Viena: Hermann Böhlau Nachf.
- **Gnoli [1960]:** Gnoli, Raniero. *Pramāṇavārttikam of Dharmakīrti*. Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.
- **Halbfass [1991]:** Halbfass, Wilhelm. *Tradition and Reflection: Explanation in Indian Thought*. Delhi: Sri Satguru Publications.
- **Hattori [1968]:** Hattori, Masaaki. *Dignāga, On Perception, being the Pratyakṣapariccheda of Dignāga's Pramāṇasamuccaya from the Sanskrit fragments and the Tibetan Versions*. Cambridge: Harvard University Press.
- **Jha [1937]:** Jha, Ganganatha. *The Tattvasaṅgraha of Śāntarakṣita with the Commentary of Kamalaśīla*. 2 Vols. Baroda: Oriental Institute.
- **Kajiyama [1998]:** Kajiyama, Yuichi. *An Introduction to Buddhist Philosophy: An Annotated Translation of the Tarkabhāṣā of Mokṣākaragupta: Reprint with Corrections in the Author's Hand*. Vienna: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien.
- **Kataoka [2002]:** Kataoka, Kei. "Validity of Cognition and Authority of Scripture," *Journal of Indian and Buddhist Studies* 50-2: (11)–(15).
- **Kataoka [2003]:** Kataoka, Kei. "The Mimamsa Definition of Pramana as a Source of New Information," *Journal of Indian Philosophy* 31: 89–103.
- **Kataoka [2011a]:** Kataoka, Kei. *Kumārila on Truth, Omniscience, and Killing Part 1: A Critical Edition of Mīmāṃsā-Ślokovārttika ad 1.1.2 (Codanāsūtra)*. Vienna: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- **Kataoka [2011b]:** Kataoka, Kei. *Kumārila on Truth, Omniscience, and Killing Part 2: An Annotated Translation of Mīmāṃsā-Ślokovārttika ad 1.1.2 (Codanāsūtra)*. Vienna: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- **Kataoka [2013]:** Kataoka, Kei. "Transmission of Scripture: Exegetical Problems for Kumarila and Dharmakīrti." In *Scriptural Authority, Reason and Action. Proceedings of a Panel at the 14th World Sanskrit Conference, Kyoto September 1st-5th, 2009*. Ed. Vincent Eltschinger, Helmut Krasser. Vienna: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 239–269.
- **Katsura[1984]:** Katsura, Shoryu. "Dharmakīrti's Theory of Truth," *Journal of Indian Philosophy* 12: 215–35.
- **Krasser [1992]:** Krasser, Helmut. "On the Relationship between Dharmottara, Śāntarakṣita and Kamalaśīla," In *Tibetan Studies: Proceedings of the 5th Seminar of the International Association of Tibetan Studies*. Ed. Ihara Shōren and Yamaguchi Zuihō. Narita: Naritasan Shinshoji, 151–158.
- **Krasser [2003]:** Krasser, Helmut. "On the ascertainment of validity in the Buddhist epistemological tradition", *Journal of Indian Philosophy* 31: 161–184.

- **Krishnamacharya [1926]:** Krishnamacharya, Embar. *Tattvasaṅgraha of Śāntarākṣita with the Commentary of Kamalaśīla*. 2 Vols. Reprint, 1984 and 1988, Baroda: Central Library.
- **Kyuma [1997]:** Kyuma, Taiken. “Incompatibility and Difference—virodha and anyonyābhāvāvyabhicāritva—,” *Journal of Indian and Buddhist Studies* 45-2: (24)–(27).
- **Kyuma [1999]:** Kyuma, Taiken. “Bheda and Virodha,” In *Dhatmakīrti’s Thought and Its Impact on Indian and Tibetan Philosophy: Proceedings of the Third International Dharmakīrti Conference Hiroshima, November 4–6, 1997*. Ed. Shoryu Katsura. Vienna: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 225–232.
- **Ogawa [2005]:** Ogawa, Hideyo. *Process & Language: A Study of the Mahābhāṣya ad A1.3.1 bhūvādayo dhātavaḥ*. Delhi: Motilal Banarsidass Publishers.
- **Rāmanātha Śāstrī [1971]:** Rāmanātha Śāstrī, S.K., *Ślokavārttikavyākhyā Tātparyāṭikā of Uṃveka Bhaṭṭa*. Madras: University of Madras.
- **Sahota [2015]:** Sahota, Jaspal Peter. *Generative Knowledge: a pragmatist logic of inquiry articulated by the classical Indian philosopher Bhaṭṭa Kumārila*. University of Sussex, Ph.D. thesis.
- **Steinkellner [2016]:** Steinkellner, Ernst. *Dharmakīrti’s Hetubindu*. Beijing – Vienna: China Tibetology Publishing House – Austrian Academy of Science Press.
- **Taber [1992]:** Taber, John. “What Did Kumārila Bhaṭṭa Mean by Svataḥ Prāmāṇya?” *Journal of the American Oriental Society* 112-2: 204–221.
- **Taber [2005]:** Taber, John. *A Hindu Critique of Buddhist Epistemology: Kumārila on Perception: The “Determinatin of Perception” Chapter of Kumārila Bhaṭṭa’s Ślokavārttika*. New York: RoutledgeCurzon.
- **Tillemans[1999]:** Tillemans, Tom J. F. *Scripture, Logic, Language: Essays on Dharmakīrti and his Tibetan Successors*. Somerville: Wisdom Publications.
- **稲見 [1993]:** 稲見 正浩. 「仏教論理学派の真理論——デーヴェンドラブッディとシャーキャブッディ——」, 『渡邊文磨博士追悼記念論集：原始仏教と大乘仏教』(下), 85–118.
- **宇野 [2000]:** 宇野 智行. 「Śakti の認識根拠——〈結果に基づく想定〉と〈結果に基づく推理〉——」『戸崎宏正博士古稀記念論文集：インドの文化と論理』福岡：九州大学出版会, 637–666.
- **江崎 [2004]:** 江崎 公児. 「ダルマキールティによる差異の定義について——‘viruddhadharmādhyāsa’ とは何か——」『比較論理学研究』2: 39–46.
- **岡崎 [2005]:** 岡崎 康浩. 『ウッドヨータカラの論理学——仏教論理学との相克とその到達点——』京都：平楽寺書店.
- **小川 [2000]:** 小川 英世. 「バルトリハリの〈能成者〉論」『戸崎宏正博士古稀記念論文集：インドの文化と論理』福岡：九州大学出版会, 533–584.
- **小野 [2012]:** 小野 基. 「真理論——プラマーナとは何か」『シリーズ大乘仏教 第九巻：認識論と論理学』東京：春秋社, 155–188.
- **片岡 [2001]:** 片岡 啓. 「インド聖典解釈の法源論——知覚と聖典の住み分け——」『仏教文化研究論集』5: 26–50.



- 片岡 [2003]: 片岡 啓. 「仏陀の慈悲と権威をめぐる聖典解釈学と仏教論理学の対立」, 『東洋文化研究所紀要』142: 198(151)–158(191).
- 片岡 [2011]: 片岡 啓. 『ミーマーンサー研究序説』福岡: 九州大学出版会.
- 桂 [1989]: 桂 紹隆. 「知覚判断・疑似知覚・世俗知」『藤田宏達博士還暦記念論集: インド哲学と仏教』京都: 平楽寺書店, 533–553.
- 久間 [2002]: 久間 泰賢. 「インド仏教論理学派における自立的真理性をめぐる一考察」『印度学仏教学研究』50-2: (187)–(191).
- 志田 [2004]: 志田 泰盛. 「認識の確度と行為発動条件——インド古典論理学派各論師の真知論の特徴——」『仏教文化研究論集』8: 1–24.
- 戸崎 [1979]: 戸崎 宏正. 『仏教認識論の研究 上巻』東京: 大東出版社, 1979.
- 戸崎 [1985]: 戸崎 宏正. 『仏教認識論の研究 下巻』東京: 大東出版社, 1979.
- 戸崎 [1992]: 戸崎 宏正. 「クマーリラ著『シュローカヴァールティカ』第4章（知覚ストラ） 和訳(2)——認識手段とその結果——」『成田山仏教研究所紀要』15（仏教文化史論集II）: 303–317.
- 中須賀 [2014]: 中須賀 美幸. 「ダルマキールティの「付託の排除」論——adhyavasāya, niścaya, 知覚判断をめぐる——」『南アジア古典学』9: 397–418.
- 中須賀 [2015]: 中須賀 美幸. 「ダルマキールティの知覚判断説と仏教真理論におけるその受容」『哲学』（広島大学）67: 71–84.
- 宮坂 [1972]: 宮坂 宥勝. 「Pramāṇavārttika-kārikā (Sanskrit and Tibetan)」『インド古典研究』2: 1–206.
- 三代 [2012]: 三代 舞. 「プラマーナ (pramāṇa) という語のもつ二つの意味とその関係—仏教論理学派とニヤーヤ学派」『久遠—研究論文集』3: 52–68.
- 吉水 [2015]: 吉水 清孝. 『クマーリラによる「宗教としての仏教」批判——法源論の見地から——』, 京都: 龍谷大学現代インドセンター.
- 渡瀬 [1988]: 渡瀬 信之. 「法典の成立とその思想」『岩波講座東洋思想第五巻: インド思想1』東京: 岩波書店, 111–134.

（本稿は、2015年度仏教伝道協会日本人留学生奨学金制度の支援を受けた研究の成果の一部である。）

（いしむら すぐる、所属なし [インド哲学]）

## A Study of the Svataḥprāmāṇyaparīkṣā of the Tattvasaṃgraha (1): Arguments about *pramāṇa*'s Innate Capacity

Suguru Ishimura

The present study aims at providing a Japanese translation of the Svataḥprāmāṇyaparīkṣā of the Tattvasaṃgraha (TS) by Śāntarakṣita and its *pañjikā* (TSP) by Kamalaśīla. The Svataḥprāmāṇyaparīkṣā (TS 2810–3122) deals with Kumāriḥa's theory of intrinsic validity (*svataḥprāmāṇya*), according to which the validity (*prāmāṇya*) of all cognitions is intrinsic (*svatas*) while their invalidity (*aprāmāṇya*) is extrinsic (*paratas*). This paper covers the section comprised of TS 2810–2845, where Śāntarakṣita is concerned with Kumāriḥa's view that the validity is an innate capacity (*svābhāvīkī śaktiḥ*) such as that to make known the cognized (*meyabodha*). The following is a synopsis of the section in question.

1. Refutation of Kumāriḥa's view of the validity of a cognition as an innate cognitive capacity
  - 1.1. Introduction (TS 2810–11)
  - 1.2. Bṛhaṭṭīkā (TS 2812–15):
    - 1.2.1. Argument 1: all *pramāṇas* intrinsically possess validity that is an innate capacity such as that to make known the cognized (*svābhāvīkī meyabodhādike śaktiḥ*) (TS 2812)
    - 1.2.2. Argument 2: the validity is established independently (*anapekṣatva*) of another *pramāṇa* (TS 2813–15)
  - 1.3. Counterarguments against arguments 1 and 2 (TS 2816–45)
    - 1.3.1. Counterarguments against argument 1 (TS 2816–2831)
      - 1.3.1.1. Assumption 1: the 'innate' capacity is eternal (*nitya*) or causeless (*ahetu*) (TS 2816–25)
        - 1.3.1.1.1. Examination from the viewpoint that a capacity is distinct from its possessor (*avyatirekapakṣa*) (TS 2816–23)
          - 1.3.1.1.1.1. Argument for the above-mentioned viewpoint (TS 2816–17)
          - 1.3.1.1.1.2. Conclusion: the capacity is not innate (TS 2818)
          - 1.3.1.1.1.3. *prasaṅga* (a): If the capacity were innate, the undesired consequence would follow that a *pramāṇa* is eternal or causeless (TS 2819–20)
          - 1.3.1.1.1.4. *prasaṅga* (b): If a *pramāṇa* were eternal or causeless, the undesired consequence would follow that a *pramāṇa* itself and its effect are not temporary (TS 2821)
          - 1.3.1.1.1.5. [Objection] Invalidation of *prasaṅga* (b) from the viewpoint of the manifestation (*abhivyakti*) theory (TS 1822)
          - 1.3.1.1.1.6. Rejection of the manifestation theory (reference to the Śrūtiparīkṣā) (TS 1823)
        - 1.3.1.1.2. Examination from other viewpoints: a capacity is distinct from its possessor (*vyatirekapakṣa*); a capacity is both distinct and non-distinct from its possessor (*ubhayātmakapakṣa*); a capacity is neither distinct nor non-distinct from its possessor (*anubhayātmakapakṣa*) (TS 2824–25)
          - 1.3.1.1.2.1 *prasaṅga* (c): If the capacity were innate, the undesirable consequence would follow that a *pramāṇa* is eternal
      - 1.3.1.2. Assumption 2: the 'innate' capacity is produced at the same when a *pramāṇa* is produced by its cause (TS 2826–31)

- 1.3.1.2.1 Pointing out a logical fallacy in the thesis of argument 1: *siddhasādhyatā* (TS 2826–28)
- 1.3.1.2.2 *prasaṅga* (d): If a capacity were not innate, the undesirable consequence would follow that a capacity and its possessor are distinct from each other (TS 2829)
- 1.3.1.2.3 *prasaṅga* (e): If a capacity were not innate, the undesirable consequence would follow that no entity can possess a capacity (TS 2830–31)
- 1.3.2. Counterarguments against argument 2 (TS 2832–41)
  - 1.3.2.1. An argument for extrinsic validity (*parataḥprāmāṇya*) (TS 2832–37)
    - 1.3.2.1.1 Śāntarakṣita's claim: the cognitive capacity cannot be established independently of another *pramāṇa* (TS 2832–33)
    - 1.3.2.1.2 Presenting a reason: a non-*pramāṇa* and a *pramāṇa* are similar to each other in that they have a vivid appearance (TS 2834)
    - 1.3.2.1.3 Two means of establishing the cognitive capacity: the experience of practical efficacy (*arthakriyājñāna*) and the recognition of a good quality of a cognitive cause (*kāraṇaguṇajñāna*) (TS 2835)
    - 1.3.2.1.4 Exemplification: the capacity of a poisonous substance (*viṣa*), etc. (TS 2836–37)
  - 1.3.2.2. Pointing out a logical fallacy in the thesis of argument 2: *svavacanavirodha* (TS 2838–39)
  - 1.3.2.3. How the cognitive capacity is different from how it is established (TS 2840–41)
- 1.3.3. Pointing out a logical fallacy in the reasons of arguments 1 and 2: *anaikāntika* (TS 2842–45)